

想外に甚しかりき。隠謀は凝らされぬ。弟子等も其の密議に参せる如し。そは耶蘇を強ひてイスラエルの王となさんとするにあり。首謀者は八方に駆けめぐれり。耶蘇を捕へて、王たることを承認せしめずんは止まざる氣合を示せり。耶蘇眼をあげて見たまふに、『往來の者いと多し。食する暇もなきほど繁忙を極めり。』狂熱せる企畫は今や實現されんとす。耶蘇は東海岸に之を避けんと心を定められぬ。

耶蘇の突然の出發には尙ほ一つの理由あり。ヘロデ、アンチパスは耶蘇の名聲益々揚るを耳にしぬ。當時ヘロデは其の斬首せるヨハネを想うて良心の呵責堪へ難かりしを以て、耶蘇の事を聴くや、一層の煩悶に陥れり。ヘロデは耶蘇の偉大なる靈力に驚きて、侍臣の意見を徵す。侍臣は耶蘇に就いて種々なる流説を言上せり。或は來るべきエリヤなりと言ひ、或は古の預言者の類なりともいふ。そは何れもヘロデを満足せしむる説にあらざりき。彼の罪惡は其の魂を惑はし、恐ろしき迷信に陥らしむ。彼は復活を信ぜざるサドカイ宗の者なれど、己が殺せる洗禮者が死より復活せるにあらずやと疑ひぬ。迷信と好奇の念に

驅られてヘロデは、耶蘇を見んとせり。チベリアスの首都はカペナウムより十里ガリラヤ湖畔に位す。されば耶蘇を引見するも容易なる如く思はれぬ。こは逸早くも耶蘇の耳に傳はれり。女のために最大なる預言者を殺せる彼れヘロデ何者ぞ、耶蘇は其の面前に出づるを潔しとせられざりき。故に一時も早く湖水を横切つて、東海岸に至らんとせらる。東海岸はピリポの領分にして、ヘロデの權外にあればなり。

## 第二節 五つの麴麩と二つの魚

耶蘇は十二人と船に乗らる。使徒には漁人多し。船をあやつることは自由なり。楫は北東に向つて操られぬ。ベテサイダ、ジャリアに近く上陸す。こは水多く地肥えたる處。春季には綠草一面に茂りて清き絨氈の如し。耶蘇は此處に靜寂なる時を見出さんと望まれぬ。されど能はず。群衆は耶蘇の出發せるを見、湖水の首をめぐりて、他岸にて耶蘇に會はんと企てしを如何にせん。群衆の到着せざる前、耶蘇は使徒と偕に平原の後面小高き岡に登られぬ。瞰視すれば、疲れたる者惱める者、病める者は塵埃を天にあげて押寄せ來るにあらずや。真正の牧

羊者たる耶蘇は牧ふ者なき群衆を見て憫れみを催されぬ。されば默想の計畫を割愛し親切に群衆を迎へ、許多の事を教へ、又病める者を癒されぬ。

耶蘇のなせる所は管にこれに止まらず湖畔に憩ひ、緑野に坐れる群衆を見て、糧食を司どれるピリポを顧みて、曰く、「何處より麵麩を買ひて彼に食はしむべきか。」ピリポは驚きぬ。目を舉げて群衆の數を計り、これに要する食物の價を見つものぬ。當時一デナリ(英貨一先令に當らんか)は労働者一日の賃錢なりき。而して平均五人の家族ある者として、半デナリは一家に三度の食を給するを得たり。半デナリが五人に三食を供するを得んか、二百デナリは六千人に一食を供すべし。今そこに集へる者は、婦人子供のほか約五千人もありしならんか。故に糧食掛りは絶望の語調を以て言ひぬ。「銀二百の麵麩も人ごとに少しづつ與へて、尙ほ足らざるべし。」

耶蘇は尙ほ惱める者に教へ、病める者を癒すに忙し、その間、ピリポは先づこれを常に親しくせるアンデレに謀りぬ。他の使徒も其の相談にあづかりしなるべし。日は西に没して黄昏四邊を蔽はんとす。弟子等は耶蘇の許に來りて曰

く、「こゝは寂しき所にて時もはや遅し。人々をして諸邑に往きて自ら食を求めしめよ。」耶蘇は答へて曰く、「人々を往かしむるに及ばず、爾曹これに食を與へよ。」弟子等は面を見合はせぬ。アンデレはピリポに代りて答へぬ。「一人の漁師の少年あり、辨麥の麵麩五つと小さき魚二つを持ち居りて、群衆に賣らんとす。されど此の多くの人を如何にすべき。」耶蘇は一言の説明をも爲さず、告げて曰く、「人々を坐らせよ。」弟子等は怪しむことなく又譏くことなく、群衆の裡を馳けめぐりて之に坐ることを命ず。約五千人は草原に坐しぬ。その坐するや、混亂紛擾を來さざるため、或は百人或は五十人づつ列座せり。席定まり、群衆靜まるや、耶蘇は五つの麵麩をとり、天を仰ぎて謝し、麵麩を割き、弟子等に渡して人々の前に置かしむ。看よ、空しき貯藏は無量となれり。耶蘇は與へ又與へぬ。二つの魚も亦斯くの如くす。「衆人皆食ひて飽きぬ。否、食ひ飽きて麵麩と魚の餘屑一面に散在せり。猶太人の慣習として、旅する時は、他郷の食をくらふて嘔吐を催さんことを恐れ、その用意に筐を携ふ。この筐は猶太人の特徴にして、他國人の物笑ひの種なりき。傳道旅行を試みたる使徒等も、この時各その

筐を有せり。耶蘇の命に従ひ、食物の餘屑は筐に拾はれぬ。十二の筐は溢ち溢れしといふ。

この奇蹟に就いて特に注意すべき事あり。そは耶蘇が奇蹟を行ふや、他に方法なき時已むを得ず爲さるゝを常とす。然るに此の時は其の慣習を破られし事なり。群衆は近隣の諸邑に往きて食を得るを得しにあらずや。されば此の奇蹟には群衆の飢渴よりも他に目的ありしならん。當時耶蘇の精神は洗禮者の死に依つて甚だしく攪亂せられぬ。暗憐たる其の悲劇を見ては、わが身の前途をも想ひ浮べられしなるべし。「人々は意のまゝにヨハネを待へり。此の如く人の子もまた彼等より苦難を受くべし。」(馬太二十七)前途の悲惨なる光景は洪水の如く耶蘇の胸を襲ひぬ。詩篇の作者はよく耶蘇の心狀を描けり。「恐れと戦慄と我にのぞみ、甚だしき怖れ我を襲へり。われ言ふ、願はくは鴿のごとく翼のあらんことを、さらば我とびさりて平安を得ん。見よ、われ遙かに遁れ去りて荒野に住まはん。われ速かに暴風と狂風とを離れて、隱家に急がん。」(詩篇五十八)十字架は耶蘇の目的なり。然るに弟子等は王冠を夢む。こは甚だしく耶蘇を

苦しめぬ。耶蘇は静けき處に退き、使徒等の惰眠を醒まして一層高尚なる觀念に導かんとせらる。されど又もや集ひ來れる群衆に妨げられしなり。されど耶蘇は尙ほ其の目的を變ぜず、群衆を見まはして、一つの計畫をなされぬ。約翰の記せる如く、時恰かも逾越の節に近し。こはイスラエル民族が埃及の羈絆を遁れ出でたるを記念する聖なる祝日なり。耶蘇は人類をして罪惡の羈絆より脱せしめんとす。されば尙ほ一層聖なる逾越の節をなす必要あり。耶蘇が捕はるゝ前夜、樓上の室にてなされし聖晚餐はそれなり。聖晚餐をなさんことは、當時既に鮮かに耶蘇の心にあししや否やは知らず。されど此の時聖晚餐をなさんとするに似たる考想が耶蘇の心に湧きしは事實なり。己が人望の高潮に達せるは、やがて來る悲劇の好對照なるを記念しおくため、五千の崇拜者と晚餐を偕にせられしならん。而して此の晚餐のやがて來ん聖晚餐の前兆となれるも明らかなり。

この奇蹟を記すに福音の記者が聖晚餐と類似の語を用ひしこそ面白けれ。馬太は此の奇蹟を記していふ、「五つの麵麩と二つの魚を取り、天を仰ぎて謝

し、麵麩をわりて弟子に與ふ。』その聖晚餐を記しては『耶蘇麵麩を取りて祝し、これを割き、弟子に與へて曰ひけるは、取りて食へ。』約翰は此の奇蹟を記して、『麵麩をとり祝謝<sup>おほひ</sup>て弟子に與へ、弟子これを坐せる人々に與ふ。』保羅は聖晚餐の傳説を記して、『耶蘇麵麩をとり祝して之を割き云々』(哥林前十)といへり。翌日カペナウムに還れる時、耶蘇は會堂にて、生命のパンに就いて論じ、奇蹟をなせる前夜の感想を述べられぬ。『我は生命のパンなり。天より來れる生けるパンなり。若し人このパンを食はば限りなく生くべし。我が與ふるパンは我が肉なり。世の生命のために我これを與へん』(約翰六ノ四) 即ち知る、聖晚餐に於ける耶蘇の觀念は此の時に發せることを。

この奇蹟に群衆の心は熱火の如く燃えぬ。耶蘇は確かに救世主なり。嘗ての計畫を實現せんは今ぞ其の時なる。踰越の節は近し。エルサレムは禮拜者を以て充滿すべし。彼等は凱歌を擧げ行列を作りて、耶蘇をエルサレムに護送すれば可なり。幾萬の國民歡呼の裡に耶蘇を擧げ、祖先の王冠を彼の首に戴かしむるを得べし。されど斯る誘惑は來るや遅し。耶蘇は傳道の當初、荒野の試練にて

既に已に此の誘惑より超脱されしものを、耶蘇は群衆の意氣込を察せられぬ。危機一髮、夜の幕は既に落ちたり。人の姿は鮮かならず。その刹那耶蘇は斷乎として弟子等に命じ、船に乗りて、カペナウムの港ベスサイダに向はしむ。而して己は辛くも群衆より身を遁れ、獨り山に登りて、祈禱に我を没せられぬ。

### 第三節 耶蘇湖上を歩む

夜は深し、暴風は起れり。されど耶蘇は神との靈交に、全たく外界を忘れておられぬ。耶蘇の膝を延ばし身を起されし時は、既に夜も白み、鳥の啼を離れんとする頃なりき。耶蘇は湖上に眼を放たれぬ。見よ一里十町ばかりの沖合に、弟子の乗れる船は大浪に覆らんばかりなり。弟子等は大いに怖れ、主の彼等と共にあらばやと願へり。浪に漂ひつゝ、生ける心地もせざるなり。耶蘇は水上を歩みて直ちに船の側に往き、通り過ぎんとされぬ。弟子等は耶蘇に挨拶せざるなり。猶太人は夜その友に遭ふも、惡魔が友の姿に装へるを恐れて、挨拶せざるを慣ひとす。今や弟子等は耶蘇の姿を見て、變化の物ならんと思ひ、挨拶せざるのみか、驚きの叫びを發せり。耶蘇は彼等を顧みられぬ。『心強かれ。我なり。懼るゝ

勿れ。」常に熱烈にして常に同輩を凌駕するペテロは、その主なるを知りて好奇の念に驅られぬ。「主よ、爾なりしか。爾ならば、我に命じ、水を踏みて爾の許に至らしめよ」といふ。「來れ」と答ふ。耶蘇の一言に雀躍せるペテロは、舟より下りて浪の上を歩き初めぬ。大膽に出て立ちしペテロも、風烈しく、浪高く、耶蘇の姿の見えざる時あるに心細さ言はんかたなく、身を慄はせり。勇氣は天に達し、恐怖は神通力を失はしむ。ペテロは懼れに沈まんとす。足を躁けり。「主よ、我を救けたまへ」と泣聲にて叫ぶ。耶蘇は笑止なる弟子の狀に、手を伸べて之を執へ「信仰うすき者よ、何ぞ疑ふや」と言はれぬ。ペテロの心は刺さるゝ如し。驚愕と歡喜に滿てる他の弟子等も、この時舟を漕ぎて、耶蘇に近づき迎ふ。耶蘇もやがて偕に舟に乗られぬ。風は静まれり。舟中の者一同に耶蘇を拜し、こは誠に神の子なりと言ひあへり。間もなく舟はカペナウムに達す。

詩篇の作者は大膽なる想像を歌うて曰く、「なんぢの大路は海のなかにあり、なんぢの徑は大水の中にあり、なんぢの蹤跡はたづねがたし」(詩七十六)この想像は耶蘇に依つて實現せられしと言ふべし。シトラウスは曰く、「この

譚の特別なる困難は、耶蘇の身體が除外例なく人類を支配せる法則即ち引力の法則を全く脱せりといふに存す。耶蘇は水に沈まざるのみならず、之に浸されず、反對に堅き地を往く如く浪の上を歩めりとは何ぞ。」この非難は一般の思想を代表するものなり。されど科學の尺度を以ては、神秘界に一步も足を入るゝ能はざるも事實なれば、吾人は茲に斯かる譚に自然法を云々する人の恐をも亦知らざるべからず。

この奇蹟の意義を索ねんか。こは實に耶蘇の復活の豫告なり。耶蘇は洗禮者の死を聽ける時以來、己が前途を深く思案せられぬ。而して山上に於ける徹夜の祈禱は、耶蘇をして我が最後の目的は十字架、而して復活にあるを深く想はしめしならん。群衆を養へるは、聖晚餐の畫なり。死の豫告なり。而して水上の歩行は、復活の前兆にあらずして何ぞ。耶蘇の身體は、平素は他人と異なるなけれど、一度神力を受けんか、全身忽ち靈體に變ずるを見る。恰かも見るかげもなき黒き電線の一度電力を受けんか、赫奕として光を放つが如し。

#### 第四節 人心の背反

使徒等の舟に乗りし時、群衆は尙ほ散ぜざりき。耶蘇の舟に身を措かれざるを認めて群衆の中には、耶蘇の再び姿を現はされんことを望みて、一夜湖畔を彷徨し、遂に鷄鳴に至れるもありき。夜間テベリアに屬せる幾艘の舟は、暴風に追はれて、その近傍に上陸せり。されば其の舟便に依つて、残れる者共はカペナウムに引返しぬ。耶蘇の既に其處に在すには、一同愕然たりき。

群衆は耶蘇の救世主たることを認めり。昨夕の奇蹟は彼等の確信を強めぬ。イスラエル民族第一の救世主たるモーセは、天よりのマナを以て彼等を養ひぬ。これと同様第二の救世主も亦然らんとは猶太人の間に流布せる説なりき。されば救世主たる休徴として、耶蘇はベテサイダの荒野にてパンを以て彼等を養はれしならんとは群衆中の識者の考へる所にてありき。然るに耶蘇は彼等をして食せしめし後、救世主たる權威を避けて身を隠されぬ。これは何の爲めぞ。これ彼等の非常に懊惱せる所にてありき。それ故約翰傳第六章三十節に記さるゝ如き謎をかけて、耶蘇をして救世主たるを自白せしめずんば止まざらんとせり。時は恰かも月の二週間目の月曜か水曜にあたる。會堂には勤務のあ

る日なり。耶蘇は會堂に起ちて説教し、聽衆の質問に應ぜられぬ。(約翰六十九) 聽衆は讚嘆崇敬の情を以て耶蘇に對せり。されど彼等の救世主に對する觀念の淺薄にして虚偽なるを如何にせん。而して此の虚偽なる觀念こそ遂に禍をなして、彼等の讚嘆崇敬はやがて憎惡侮蔑と變じ、遂に耶蘇を十字架に釘けたる所以にあらずや。耶蘇が彼等の渴仰の情を苦々しく思はれたるも宜なりと謂ひつべし。

耶蘇は喝破して曰く、『誠にまことに爾曹に告げん。爾曹の我を尋ぬるは、休徴を見し故にあらず、只パンを食ひて、飽きたる故なり。』斯くして耶蘇は彼等の謬想を指摘し、己が死と復活こそ、眞正の救世主たる事業たるべきことを説明せられぬ。天よりパンを下して彼等を養ふべき救世主に對する夢想に就いて、巧妙にして深遠なる説明をなして曰く、『神のパンは天より降りて生命を世に與ふる者ぞその人なる。我は即ち生命のパンなり。我に來る者は飢えず、我を信する者は恒に渴く事なし。誠にまことに爾曹に告げん。若し人の子の肉を食はず、その血を飲まざれば、爾曹に生命あるなし。わが肉を食ひ、わが血を飲む』

者は無窮の生命あり。われ最終の日に之を甦すべし。』斯かる言葉は近代の人の耳に奇しく響く如くに、當時の猶太人の怪しとせざる所なり。聖書に於て又師父の文學に於て、聖訓のパンと稱せられ、それに熱中するを呼んで、パンを喰ふといふは常の事にてありき。預言者エレミアの語に、『われ爾の語を得て之を食へり』(十五)とあり。タルムウドにも、『パンを以て彼を養へ、即ち來りてわがパンを食へと言はれし如く、律法を恐れて彼をして働かしめよ』とあるを見ても、耶蘇の救世主たる告白が、當時の人の耳に解し易き語なりしを想ふべし。

耶蘇の説明は懇切なりき。されど大聲俚耳に入らざるを如何にせん。地球廻轉の轟聲は人間の耳に達せざるなり。聽衆の中有司等は激し怖れぬ。叫んで曰く、『彼が父母は我儕の識る所にあらずや。即ち彼はヨセフの子耶蘇にあらずや。然るに何ぞ我は天より降りしと言ふや。この人は如何にして其の肉を我儕に食はしめんとするや。』彼等が背反するは自然なり。耶蘇はそれに就いて失望せざりき。然るに常に耶蘇の弟子として其の信任を辱うする多くの者も皆、

『こは甚だしき語なり誰かよくこれを聽かんや』と言ふに至りては啞然たらざるを得んや。而して此の後その弟子多く歸り往きて、耶蘇と偕に歩まざりき。只残れるは十二人のみ。耶蘇は使徒を顧みられぬ。各自難色あり。耶蘇は凄切の語調を以て曰く、『爾曹も亦去らんと欲するや。』一語深痛たり。彼等もこゝに至りてや、耶蘇が到底國民を救ふ王者にあらざるを悟れり。されど彼等は一切を棄て、耶蘇に従ひたるものを、その野心の達せられぬとて、如何にして耶蘇を棄つるを得ん。彼等は此の時耶蘇に對する信仰よりも、外聞に耻ぢぬ。今や耶蘇の間に接し、答へをなさざるべからず。彼等は面を見合はせしならん。シモン、ペテロは常に耶蘇を愛する者なり。又常に使徒中の代言人なり。耶蘇の凄切の語に接し、如何にして師を棄つるを得んと想へるなるべし。『主よ我儕なんぢを去りて誰に往かんや。無窮の聖言を有する者は爾なり。又われ等信じて知る、爾は活ける神の子基督なり。』そは憐れむべく力なき告白なりき。耶蘇は使徒等の信仰の如何にも、弱きを認め、天の王國に就いて一層深く教ふるの急務なるを想はれぬ。最も大膽にして敬虔なるペテロ既に斯くの如し。況して其の他

の者をや使徒等の薄信の窮極は如何耶蘇はそれに想ひ至つて曰く、『我ながら十二人を選びしにあらずや、されど其の中の一人は悪魔なり』。こはイスカリオテのユダを指して言はれしなり。

#### 第十四章 カペナウムの争論

人々は耶蘇に背けり、されど彼等は忽ち耶蘇の必要なるを見出せり。假令彼等の夢見たる王位を拒めりとして、愛と恩寵に満ちたる者を如何にして忘れらるべきぞ。聽て又彼等の耶蘇に來るや、蟻の甘きにつくが如し。病める者を携へて四方より來る。只耶蘇の衣の裾に捫らんことを欲せり。而して押分けられぬ群衆の中をくゞりて、逸早くも耶蘇に捫りし者は皆癒されぬ。

時恰かも逾越の節は來りぬ。されど耶蘇はエルサレムに上るを欲せず、尙ほガリラヤに留まれり。そは猶太人の殺意を慮りてなり。耶蘇は適當なる時に死せんことを欲せられしかど、尙ほなすべき多くの事を有す。その時は未だ至らざるなり。(七約翰) 猶太の有司等は耶蘇の來らざるに失望し、カペナウムの官憲

に學者とパリサイの人を遣はし、相協力して事を成さんとせり。されどカペナムに於ける耶蘇の勢力は隆々として盛んとなりぬ。彼等は指を銜へて嫉視し、耶蘇を捕ふる口實もがなと待設けぬ。

聽て口實は見出されぬ。耶蘇の弟子食する時手を洗はざるを發見せり。師父の律法として食の前後に手を洗ふことは嚴命せられし所。而してそは實に迷信より來る。シブタといふ悪魔あり。人の手を洗はずして食する者あれば、深夜に來りて彼を襲ふといふ。猶太の宗教の當時如何に迷信に陥りしかを察すべし。面白き逸話あり。師父アキバ嘗て羅馬人に依つて獄に投ぜらる。飲料と洗身のために、毎日は水は充分に供せられぬ。一日獄吏の命に依つて其の水は減せらる。『わが手に水をそゞげよ』と師父はいふ。『わが師よ、飲料にも充分なる水あらず』と弟子は答へり。『手を洗ふべき水なしとや、われは祖先の戒律に背かんよりは、寧ろ死せんと欲す』とはアキバの答へなりしとぞ。

笑止にも耶蘇の敵は斯かる弱點を捕へぬ。而して其の説明を耶蘇に求めたり。『古の人の遺習を犯すは何故ぞ。』耶蘇は彼等の詰問を逆さに捫れり。『爾曹も



亦なんぢらの遺習のために神の誠を犯すは何故ぞ、それ爾の父母を敬ひ、父母を罵る者は殺さるべしとは神の誠しむる所、然るに爾曹は、父母を養ふには禮物を以て足れりとし、少しも父母を敬はざるにあらずや。これ爾曹遺習に依つて神の誠を破るなり。偽善者よ、イザヤは能く爾曹に就いて預言せり。この民は口にて我に近づき、唇にて我を敬へども、其の心は我に遠ざかり、人の命令を教へとなして、空しく我を拜すと。』

こは痛切なる答なりき。耶蘇は尙ほ傍に立てる人々に向つて曰く、『聽きて悟れよ、口に入るものは人を汚さず、口より出づるものこそ人を汚す。』耶蘇の勢と其の答に避易して、パリサイの人は憤恨骨に徹しつゝ、歸り往けり。十二人は其の復讐を恐れて、餘りに其の答の峻刻なりしことを主に告げぬ。耶蘇はパリサイ宗の運命を預言して曰く、『わが天の父の植ゑざる者は皆抜かるべし。彼等を棄ておけ。替者の手引きする替者なり。めしひの者めしひの手引きせば二人とも溝に落つべし。』こは當時一般に通ずる諺なりき。耶蘇は之れを以て傍觀者をも誡められしなり。

群衆に語らるゝ比喩の意を耶蘇に問ふは十二人の慣ひなりき。パリサイの徒の既に去り、耶蘇の宿所に歸られし時、十二人は耶蘇の面前に出てぬ。ペテロは衆に代りて言ふ。『この譬を我儕に解きたまへ。』そは全く比喩にあらず、されど十二人は猶太的僻見に囚はれて、隠れたる意味のそれに存すると想へり。潔き食物と潔からざる食物との差は、使徒等の尙ほ重んぜし所。彼等は『口に入るものは人を汚さず』との言を悟る能はざりしなり。後年ペテロが尙ほ此の僻見を有せしは、使徒行傳第十章(九五)に記す所なり。耶蘇は彼等の心の鈍きを悲しみ、『爾曹も未だ悟らざるか』といはれぬ。

この出來事に依つて耶蘇は、十二人の現状のいと幼稚なるを深く悟られぬ。彼等は無智にし世俗的なり。到底神國建設の大業に參する能はざるなり。況んや耶蘇の逝ける後、その後繼者たるをや。時は短かし、一刻の猶豫もあらず、耶蘇の精神、その思想、否、耶蘇その者をば、十二人の心に深く徹底せしめずんばあるべからず。これ耶蘇の瞬時の決心にてありき。カペナウム傳道はこゝに終る。耶蘇は此處を去りて他に隠退せんことを欲せられぬ。

## 第十五章 ホエニシアに隠退

## 第一節 希臘婦人

耶蘇は何處に往かんとするや、ガリラヤ湖の東海岸に至るべきか、はたガリラヤの内地に深く入るべきか、今までの経験によれば、何れも身を隠すに處なし、されば他に新しき隠退地を索ねざるべからず。ガリラヤの北西にホエニシアの地あり、嘗ては世界の最大なる海權國の一つにして、今はシリアの羅馬領の一部をなせり。その人民はイスラエル民族が約束の地に入る時強奪せるカナン人の遺族なり、猶太人の眼よりは穢れたる地、偶像崇拜の種族なり。耶蘇は眼を此の地に放たれぬ。見出されず、煩はされざる好適地として、歩を彼處に向け、嘗ては有名なる港なりし、チレとシドンの附近まで往かれぬ。されど耶蘇はまた茲に失望せられたり。彼の名聲は既に此處に達せるなりき。チレとシドンの旅人は、ガリラヤに來りて耶蘇の事業を見、歸りて之を四方に吹聴せり。(三馬ノハセ)耶蘇來れりとの風評は忽ち擴がりぬ。耶蘇十二人と偕に途を往くや、狂氣

せる小さき娘を有する寡婦あり。サイロピニケに生まれし希臘人なり。叫んで曰く、『主よダビデの裔よ、我をあはれみたまへ。』そは凄切なる哀調を帶べり。恒人の心もそれに依つて動かさる。況して恵に満てる人の子の心情をや、聖クリソストムは曰く、『腸を絞りて叫ぶ婦、その婦は母親にして、一人の娘のために哀願す、その娘は痛くも病めるなり。こは憐れむべき光景にあらずして何ぞ。』されど耶蘇は氣付かざるが如し。彼は一言の答へをなさずして往く。婦の叫びは尙ほ續けり。弟子等は心を動かしぬ。耶蘇の情なきを怪しみぬ。婦のために乞うて曰く、『我儕の後より呼はるが故に、彼を去らせたまへ。』耶蘇は答へぬ。『婦にかしはる勿れ。我はイスラエルの羊の外に遣はされず。』この答は希望の戸を悉く閉せり。弟子等は再び語を發せざりき。然れども婦は尙ほ退かず。その後隨へり。耶蘇の足跡を踏んで其の宿所にまで至れり。耶蘇と十二人の食卓に坐せるを見、その足下に伏せり。拜して曰く、『主よ、我を救けたまへ。』耶蘇は前に在る食卓よりして聯想せる語を以て答へられぬ。『兒女のパンを取りて犬に投げ與ふるは宜しからず。』婦は賢くも反詰しぬ。『主よ、然り、されど犬も其

の主人の膳より落つる屑を食ふなり。』この答は耶蘇を悦ばしぬ。曰く、『婦よ、爾の信仰は大なり、爾の願ふ如く成るべし。』婦は心を安んじて家に往きぬ。娘は既に癒えてありき。

この譚に就いて注意すべきは、耶蘇が何故初めつれなくも婦の哀願に耳傾けられざりしかといふことなり。こは恩寵に満てる耶蘇に相應しからず、これに就いて種々なる事は考へらるべし。第一耶蘇は十二人を教へんため隠退所を見出さんことを欲せられぬ。ツロとシドンの地にまで來り今度こそはと内心竊かに慰へる想ひをなされしならん。然るに其の耳許に突然霹靂の響くが如く、婦の叫び聲は發せられぬ。耶蘇は尠ならず當惑せられしならん。されど既に見出されたるを如何にせん。耶蘇は婦の叫びに心を動かされぬ。然れども耶蘇の態度は名醫の重病者に臨んで騒がざるが如し、その爲すべき術は明らかなり。耶蘇の無言はつれなしとも見えしならん。されど一言以て之を癒すを得る耶蘇にとりては、愁に沈む表情をなす必要なし。故を以て第二に耶蘇は、婦と十二人の信仰を強めんとせられぬ。『イスラエルの家の迷へる羊の外にわ

れは遣はされず』とは、婦の信仰を試むると同時に、十二人の僻見を打破せんため、彼等の胸に想へる所を言ひ、以てイスラエルの家の者にあらずとも、信仰ある者は皆救はるといふ實物教育をなして、以て彼等に萬民救済の大精神を吹込まんとなされしならん。

而して耶蘇は何故僻見なる猶太人の如く異邦の民を『犬』に譬へられしや。説あり、曰く、耶蘇の犬といはれしは、穢れたる牧ふものなき犬にあらず。寧ろ食卓のまはりに遊びて、主人のパン屑を拾ふ小さき狗を指せり。恐らくは耶蘇の坐せる床の上に一匹の狗の戯れぬたりしならんといふ。故にそは侮蔑の語にあらずして、愛玩の意を含めりと。又一説あり、曰く、耶蘇の語は諺を其のまゝ用ひられしなり。これに類似せる諺は數多存す。希臘人は『爾は犬を養ひて自ら飢う』といふ格言を有す。エラスムスは之を解して曰く、『これ日常生活に窮しながら、馬を牧ひ、僕を有するをいふなり。又家族を支ふる能はざる身にて、衣に奢り、權勢を欲するを諷せるものなり。』又言あり、『隣人の犬に親切なる勿れ。』『他人の犬を養ふ者は、繩のほか何ものも得ざるべし。』エラスムスは曰く、『こ

の諺は無用なる所に親切を盡すとも、何等の報を得ざるを諫しめしなり。隣人の犬を厚く養ふも、前の持主之を連れ往くべし。』されば耶蘇が『兒女のパンを取りて犬に投げ與ふるは宜しからず。』と言はれしも、當時に知られたる諺ならざるべからず。『爾と我とは他人なり、わが家族に屬する祝福をとりて、他人に與ふべけんや。』耶蘇は笑を含みて此の諺を引かれぬ。

而して又この婦の答を見るに、これ又諺なり。羅馬に住ひし希臘の修辭學者フィロストラタス(紀元後百七十)の『チキアナのアポロニウス傳』の一節はこれを證す。アポロニウスは恰も英國の文豪ジョンソンのボスウエルに於ける如く、その徒弟ニエヴェのダミスに伴はれぬ。ダミスは讚嘆の眼を放ちて、微細なる點まで師の一言一行を記せり。ある時これに就て、彼を嘲弄するものあり。『斯かる細事を集むる爾は、饗宴より落つる屑を食ふ犬の如く働けるなり』といふ。ダミスは答へらく、『神々の饗宴あり、神々の食する時は、聖食の屑をも失はれざらんために侍者なかるべからず。』こは婦が、『然り主よ、犬も亦主人の膳より落つる屑を食ふ』といへると同種類の語にあらずや。されば耶蘇の言と

婦の答へとを、相對の諺と見るも可ならざらんや。耶蘇の慧眼は此の婦の希臘人なることを知られたり。彼等は智慧を好む。頓才は其の得意とする所。故に眞面目なる面にて此の諺を用ひられぬ。婦もさる者。耶蘇の冷刻に見ゆる辭の下には慈愛滾々として枯れざる泉の如きを認めぬ。故に娘の惱みを心痛せる間にも、諺を以て耶蘇に對する餘裕を見出せしならん。趣味深き譚にあらずや。

### 第二節 福音書の缺陷

耶蘇のなせる所は金粉燦然たる流れの如く、ツロとシドンの地にまで至りぬ。而して其の流れはこゝに至りて沙漠に没する如く見失はるゝなり。路加はサイロビニケの希臘婦人の事さへ記さず、五千人の晚餐より直ちにカキザリア、ピリピの告白に移れるにあらずや(路加九章)。馬太も亦黙々として語らず、只馬可のみ『耶蘇ツロとシドンの地を去りて、デカポリスの地を過ぎ、ガリラヤの海に至れる』ことを記せり(馬可七)。この間確かに耶蘇は多くの恩寵を施されしならん。希臘婦人に對する親切は、ホエニシヤ人の心情を開き、盛んなる歓迎は彼等によりてなされしと見ゆ。そは後年耶蘇がガリラヤ人の不信仰を憤りて『あ

禍なる哉、コラジンよ。あゝ禍なる哉、ベテサイダよ。爾曹の中になせし異なる業を、若しッロとシドンになせしならば、彼等は忽ち麻を着、灰をかひりて悔改めしなるべし。(馬二十一)といはれしを見ても明らかなり。然らば福音書の記者は何故之れに就いて黙せしや。異邦人に對する僻見より、彼等になされし耶蘇の恩寵を記すを好まざりしのみ。

## 第十六章 漂泊

ホエニシアにて活潑に働かれし間にも、耶蘇は當初の目的を棄てられざりき。シドンを後にして、南方に志せる間にも、耶蘇は適當なる場所や何處と探されぬ。されど常に群衆は彼に付きまとひ、その數四千人にあまりぬ。既にしてガラヤ湖畔に達せる時、耶蘇は群衆より遁れんとし、湖の東方とある山に登り、以て靜かなる時を得んとせらる。然れども耶蘇は又こゝに失望す、その地方の人々は歡んで彼を迎へ、跛者、瞽者、瘋者、不具者及びさまざまの病める者を携へ來りぬ。耶蘇は其の凡てを癒せり、その中に一人、聲にして訥る者あり。耶蘇は彼を衆人より離れて、人なき場所に伴れ往かれぬ。而して指を其の耳にさしいれ、

又唾きして其の舌をぬらされぬ。これ當時醫學上の効果ありと信ぜられし所なり。(馬可八ノ廿三) 耶蘇は斯くして衆人の熱せる心を靜めんとせられぬ。耶蘇のなす所は不思議にあらず、通常の醫士のなす所と同じく想はしめんと。丁夫に外ならず。而して耶蘇は其の不具者の狀を熟視して之を憐れみ、想はず。天を仰ぎて歎じ、『その人に向つて、『啓けよ』と言はれぬ。然るに忽ち其の耳ひらけ、舌の絡ゆるみて正しく物いふに至れり。

山上の奇蹟は益々群衆の熱情を増せり。耶蘇は遁れんとして遁るゝ能はざる仕儀に陥れり。群衆の狀況は彼の心をいたましめむ。ホエニシアより長途耶蘇の後を追うて、疲れ果てたるもあり。三日の間、絶食せる者も尠なからず。耶蘇は大に之を憫れと想はれぬ。弟子を召して曰く、『もし飢えしまゝ其の家に還さば、途にて憊まん。その中に遠方より來れる者あればなり。』

弟子は答ふ、『この野にて何處よりパンを得て、この人々を飽かしむべきや。』耶蘇は彼等が七つのパンと些少の魚を持てるを知り、之を取り、謝して擘き、その弟子に與ふ。弟子は之れを人々に與へぬ。衆人食ひて飽き、そのあまりの屑を

拾ひしに七の籃に満てり(衆人を養へる二つの奇蹟は同一なる出来事なりとは、ソ  
る所なり。されどこの二つの同様な奇蹟にて籃といふ字の希臘原語にて二様に配  
さるゝは注意すべき事なり。馬太十六ノ九―十一馬可八ノ十九―廿一)……Koponsos及びof  
はそれ、スは猶太のパン籃にて、は異邦の籃をさす。は第一の群  
衆は猶太人なりしが、第二の群衆は多く異邦人なる籃にありざるか。

飽食せる群衆は尙ほ去らず。耶蘇は種々工夫を凝らし、遂に舟に乗りて湖上  
に出でられぬ。されど何處に往かんとする目途もあらざりしなりしなり。只南  
方に舟をやり、湖の下端に上陸し、隠退所を見出すまで内地に進み、遂に馬太が  
『マゲダラの境』と稱し、馬可が『ダルマヌタの方』といふ處まで往かれぬ。この二  
つの名は何處を指せるにや、殆んど知るなし。ヨルダンの河邊エド、テルヘミエ  
と稱する處ならんともいふ。

耶蘇は又こゝに失望しぬ。彼の敵は久しく姿を見せざりし耶蘇の再びガリ  
ラヤ湖畔に現はれしを知り、その後を追隨せるなりき。耶蘇の隠退所に達する  
や、直ちにバリサイとサドカイの人々は現はれぬ。彼等はカペナウムより來れ  
るにやあらん。彼等は耶蘇を捕ふる新工夫をめぐらしぬ。而して天の休徴を我  
儕に見させよと言ふ。聖クリソストムは想像して曰く、そは太陽を止め、月を馭

し、雷を下に落す如き休徴を欲せしならんと。實際彼等は多くの休徴を目撃し  
ぬ。されど尙ほ一層大なる奇蹟を要求せるなり。この要求は痛く耶蘇の胸を激  
し、悲哀の感その面に現はれぬ。彼等の執拗なる何ぞこゝに至るや、『耶蘇は心  
の中に深く歎息せられぬ。』

耶蘇の休徴を求めらるゝや、こゝに三度第一は傳道の初め、エルサレムにて  
逾越の節の際なりき(約翰二ノ十八)。耶蘇は其の時復活の休徴を預言せられぬ。第二は  
耶蘇を侮蔑するあまり休徴の要求なりき(馬太十二ノ三十八)。その時耶蘇はヨナの説教  
に依つて、ニネベ人の悔改めたることを語り、バリサイ人の反省を促されぬ。今  
や第三回の休徴の要求なり。耶蘇はこゝに於て其の要求を峻拒して曰く、『こ  
の世の人なんぞ休徴を求むるや。爾曹日没には反映によりて晴れならんと  
いひ、晨には曉霞又は曇天によりて今日は、雨ならんといふ。偽善者よ、爾曹天空  
の景色を別つことを知りて、時の休徴を別つ能はざるや。姦惡なる世は休徴を  
求む。されど必ず與へられじ。』(馬太傳十六ノ四にヨナの休徴云々とあるは、その十二  
二に斯かる事を)  
記さいるは正し。

斯の如く幾度も静思せんとして妨げられたる耶蘇は、再び舟に乗りて湖上に出でられぬ。ガリラヤも湖の東岸も、身を憩ふべき處にあらず。只残れるは北方異教の地のみ。舟は湖の下端より上端に至らんとす。その距離約三十哩なり。波穩かに舟は鏡をすべるが如し。耶蘇は湖上にて十二人に向ひ天の王國のこゝとを告げんと志されぬ。されば冒頭先づ彼等を戒しめて曰く、『戒心してパリサイの人の麪酵とへロデの麪酵を慎しめよ。』而して次には己が救世主として苦痛を受くるこそ、真正の途なれと説かんとせられしならん。されど其の對談は妨げられぬ。弟子等はパンを携ふることを忘れ、舟中には只一つのパンあるのみなれば、三十哩の湖上を如何にせんとは彼等の竊かに心配せる所なりき。故に耶蘇の此の語を聴くや、パンを忘れし不注意を耶蘇に悟られたりと想ひ、互ひに顔を見合せぬ。その思想の低く地に屬ける、嗚然たらざるを得んや。耶蘇之を知りて曰く、『何ぞ互にパンを携へざりし事を論ずるや。未だ悟らざるか。爾曹の心頑さや。目あるも視えざるか。耳あるも聴えざるか。又覺らざるか。われ五千人に五つのパンをささて與へし時、その餘屑を幾筐拾ひしや。』弟子等

は暢氣なり。洒然として答へていふ、『十二なり。』然らば四千人に七つのパンをさきあたへし時、その餘屑を幾筐ひろひしや。』七つなり』と答ふ。耶蘇曰く、『何を悟らざるや。』耶蘇は舟中パンなきを憂ひたるにあらず。パリサイの盲目的遺習固執と當時へロデの朝廷に蔓延るナドカイの世俗的なるに就いて十二人を戒しめんとせられしなり。然るに彼等の悟らざる斯くの如し。耶蘇は心愁に滿ち、再び口を開かれざりき。

舟はやがて湖の北岸に達す。耶蘇は十二人と偕にペテサイダに歩を進む。ペテサイダは昔て寒村なりしが、王ビロポ之を擴大して其の繁榮を計り、皇帝アウガスタスの娘ジュリアの名譽のために、之をジュリア、ペテサイダと稱す。耶蘇は其の繁榮せる街を經ざるべからず。こゝに又人々耶蘇を認め、瞽者を携へ來り、癒さんことを乞ふ。耶蘇は群衆の又も集ひ來らんを恐れ、瞽者の手を執りて、尙ほ歩を進め、町はづれにまで往かれぬ。而して當時の醫師のなす如く、目に睡きして手を彼につけ、『何か視ゆるや』といはる。瞽者は少しの視力を得たる如く、目をあげて、『われ人々の樹の如く歩くを見る』と言ふ。耶蘇は兩手を其の

目につけ、又彼に目をあげさしむ。この度は萬物明らかに見ゆるに至れり。耶蘇は斯くして奇蹟の力を弱め、普通の醫師の如く装はれぬ。且つその上に醫者なりし者に告げ、『この邑に入る勿れ、又この邑人に告ぐる勿れ』といはれぬ。用意周到斯くの如し。群衆は遂に耶蘇を追ふことなし。耶蘇は心安く息をつかれぬ。

## 第四篇 傳道第三期

### 第一章 偉大なる告白

ガリラヤの境外、巍峨たるヘルモンの麓に、カキザリア、ピリビの市あり。ヨルダン河は其處に發して潺々たる清流を湛へ、風景甚だ佳なり。耶蘇は長く退隱の地を求められしが、今や漸く此の地を見出せり。暫く此の地に退きて神の國に就いて使徒等に教ふる所あらんとす。耶蘇はカキザリアの諸村に至るの途次、使徒等に問うて曰く、『人々は人の子を誰れと言ふや。』耶蘇はこゝに人の子といふ綽號を用ひられぬ。そは彼が謙遜の稱なり。自ら己が光榮を隠して、彼等が如何にそを看破せるかを試みんとせられたり。而して耶蘇は祭司や學者の己れに對する意見を聽くを欲せず、民衆一般の説を聽かんとせられぬ。使徒等は答へて曰く、『或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ又は



預言者の一人なりと言ふ。この答は耶蘇自ら充分に知らるゝ所なりき。されど談話の順序として斯く問はれぬ。今や一步を進めて問うて曰く、『然らば爾曹は我を誰と言ふや。』使徒等は頭を垂れぬ。こは誠に大いなる問題なり。使徒等の耶蘇觀、これに依つて耶蘇と使徒との靈的關係の深淺の定まるのみならず、延いては基督教の消長に關す。否、基督教の興廢この一答にありとも謂ふべし。

使徒等の中先づ口を開くは常にペテロなり。曰く、『爾は基督、活ける神の子なり。』ペテロの此の直下の答は言ふべからざる満足を耶蘇に與へぬ。即ちペテロに言ひて曰く、『ヨナの子シモンよ、爾は福なり、そは血肉なんぢに示せるに非ず、天に在ますわが父なり。』耶蘇が斯く祝福せられしを見て、ペテロの一言が千鈞の價值ありしを知るに足る。ペテロは決して輕舉妄動の人にあらず。耶蘇に重んぜらるべき尊崇の人格を具へたるを見るべし。而して其時耶蘇は約束して曰く、『我また爾に告げん、爾はペテロなり。我が教會をこの磐の上に建つべし。陰府の門は之に勝つべからず。又われ天國の鑰を爾に與へん、爾が地に於てつなぐことは天に於ても繋ぎ、なんぢが地に於て釋くことは天に於ても釋くべし。』

し。』に『この磐』と記されたるは、ペテロなるか又耶蘇自身のことなるか、これ多くの議論の存する所。羅馬法王は此の語によりてペテロの耶蘇に繼ぐべき神權を主張する根據となせり。オリゲンは此の磐を以て使徒全體を指すものとせり。聖エロメは此の磐を以て耶蘇自身とせり。聖アウガスチンも初めはペテロとなせしが、終には耶蘇を指すことを是認するに至れり。聖クリソストムはペテロに非ずしてペテロの告白を指すものとせり。吾人は後者の説に與す。この磐とは即ち『爾は基督、活ける神の子たり』といふペテロの信仰たらざるべからず、この信仰の上に基督の教會を建つべしと考へし方、甚だ自然なるを覺ゆ。

耶蘇は使徒の此の告白を聽ける後、彼等を戒しめて曰く、『我が基督なることを人に告ぐる勿れ』擾亂を慮られしなるべし。

## 第二章 苦難と榮光

耶蘇は基督、活ける神の子なり。而して其の結論は如何。彼は十字架の苦難に

遇はざるべからず。これ完全なる三段論法の如く、耶蘇の意識に明らかなる所  
 なりき。即ち耶蘇は使徒の告白を聴くや、間もなく此の事を使徒等に示し始め  
 られぬ。そは使徒等には耳近く轟ける雷聲なりき。彼等は戦慄しぬ。殊に耶蘇を  
 愛すること深きペテロの耐ふる所にあらず。彼は耶蘇を援とめて曰く、『主よ可  
 ならず、その事爾に来るまじ。』そは耶蘇に取りては悪魔の聲なりき。悪魔は愛す  
 る弟子の唇より之を語る。耶蘇の鋭き眼光は直にそれを看破せられぬ。振返り  
 てペテロを見て曰く、『サタンよ、我が後に退け。爾は我に礙づく者なり。そはなん  
 ぢ神の事を想はず。人の事を想へばなり。』耶蘇はペテロに斯く答へし後、徐ろに  
 口を開き弟子等に教へて曰く、『若しわれに従はん。と欲する者は己を棄て。十字  
 架を負うて我に従はざるべからず。生命を全うせんとする者は之を失ひ。我が  
 ために生命を失ふ者は之を得べし。』耶蘇は真理の權化なり。神の子なり。耶蘇に  
 従ふは宇宙の大道を歩むなり。宇宙の大道を外にして生命を全うすべき途あ  
 るべけんや。されば耶蘇の此の語は使徒等にとりて一痛棒たりき。この世の榮  
 華を欲して救世主に従ひたる彼等の眼前に十字架はつきつけられぬ。礙かさ

るを得んや。

一週間は經ぬ。その間のことに就いては何の記す所なしと雖も、想ふに安閑  
 と過されしにあらざらん。耶蘇は前途の畫策に疲れし身を以てペテロ、ヤコブ、  
 ヨハネの三人を伴ひ、人々を避けて高き山に登られぬ。その山はタボアなりし  
 との傳説あり。希臘教會にては八月六日タボア祭といふ名にて耶蘇の變貌を  
 記念せり。されどそは不可能の想像なり。タボアはカキザリアより殆んど五十  
 哩のガリラヤの南部に位す。且つ其の山頂には城砦築かるゝを以て、天上の神  
 秘を現はすべき適地にあらず。されば其の山はカキザリアの近傍ヘルモン山  
 の一峯なりと認めて可ならんか。

耶蘇は神との靈交に疲れし心を癒さんとして其の山に赴かれぬ。然るに不思  
 議は使徒等の眼前に起れり。馬太はいふ、『その容貌かはり、而は日の如く輝き、衣  
 は白く光れり。』馬可はいふ、『その衣輝きて雪よりも白く、世の布漂にては斯く  
 白くなし能はざるべし。』路加はいふ、『その衣白く輝きぬ。』而して二人の者そこ  
 に現はれぬ。モーセとエリヤはそれ。耶蘇がエルサレムにて世を逝るべきこと

に就いて偕に語る。その光景の壯嚴に心を壓迫せられしにやあらん、深き睡眠は使徒等を襲ひぬ、程經て眼醒むれば尙ほ榮光の裡に三者の立てるを見る。今や異象は凋まんとす。性急なるペテロは去らんとするモーセとエリヤを留めんと考へしや、叫んで曰く、「師よ、こゝに居るは可なり。我儕をして三つの魔まを造らせたまへ、一は爾のため、一はモーセのため、一はエリヤのためにせん」斯く言へるペテロは自ら其の何のためなるかを知らざるなり。その狼狽せし状笑ふべし、されど深くペテロの心裡に立入らば、彼が主耶蘇のエルサレムにて死せんとする告示に堪へやらで、こゝに魔を建て、この榮光の中に何時までも耶蘇を在らしめんとせるなるべし。造次顛沛にも主を愛せるペテロこそいとも尊ぶべからずや。聽て雲は來りて彼等を蔽ふ、聲は雲より出づ、「こはわが意にかなふ我が愛子なり、爾曹これに聽くべし。」使徒等は其の聲の森嚴なるに驚き、耶蘇の來りて彼等を引起さるゝまで地に倒れて敢て首を擡げざりき。彼等目をあぐれば、只獨り耶蘇を見るのみ。

耶蘇の變貌は其の湖上を歩まれし奇蹟と同じく、彼が復活の豫示なり。耶蘇

の肉體は神の力に依つて保羅の所謂「靈なる體」になりしことを證されぬ。而して此の變貌は何の爲めぞ。一つには耶蘇を待てる悲慘よりして耶蘇の心を強めんためなり、追放者に現はれたる故郷の幻影、疲れたる旅人に示されたる前途の休息の甘味の如く、耶蘇の遂には占むべき光榮ある永劫の聖座は、こゝに閃めくと見るべし。又一つには此の變貌は使徒等の心よりして耶蘇の十字架を耐へ難く想ふ苦痛を除き、そは苦痛にあらず、寧ろ光榮なることを悟らしむるためなるべし。

### 第三章 カペナウムに還る

#### 第一節 納金に就いて

耶蘇の三使徒を伴うて山に登れる間に、多くの事は起りぬ。サドカイ、パリサイの徒は耶蘇が北方に引退せる跡を追求せり。耶蘇は在らず、只九人の弟子に遇ふ、彼等は悪意を以て九人の弟子に對せり。そは悪鬼につかれたる一人の童をば、弟子達の癒すを得ざりしに因る。弟子達は己が無能を耻ぢ、衆人の難詰に

耐へやらで冷汗背を濕せり。如何にせばや、進退こゝに窮す。時しも幸なるかな、耶蘇は山より歸られぬ。弟子達は重荷を下せり。衆人は尙ほ光失せやらぬ。耶蘇の面を見て畏敬して之を迎ふ。耶蘇はありし事共に耳傾けられぬ。想はずも嘆じて曰く、『あゝ、信なき世なる哉、いつまで我なんぢらと共に在らんや、何時まで我なんぢらを忍ばんや。』耶蘇は其の童を連れ來らしめ、忽ち之を癒されぬ。衆人は其の奇蹟に畏れて退潮の如く去りぬ。耶蘇の家に入れる時、弟子等は聲を潜めて問へり。我等惡鬼を逐出すこと與はざりしは何故ぞと。彼等は既に病める者を醫し、惡鬼を追出す力を與へられしなれど、その力を用ゆる能はざりしなり。耶蘇答へて曰く、『この族は祈禱と斷食にあらざれば逐出すこと能はず。』耶蘇の此の答は九人の弟子達が耶蘇の不在中、神のことを想はず、安閑として地上のことに心を煩はされ居たるを暗示せり。祈禱と斷食に日を消して神の力に満されなば、何ぞ鬼を逐出すこと能はざらんや。弟子達の心は刺さるゝ如し。應て耶蘇はカペナウムに還らんとし、ガリラヤの諸村を過ぐ。來るべき十字架に就いて弟子達に教ふべき事なほ存せるを以て、衆人の隨ひ來るを避けら

れぬ。弟子達は此の途上、人の子は人の手にわたされ、彼等に殺され、殺されて後、三日目に復活すべきことを聽きしかど、耶蘇の語の眞意を悟る能はず、只深く悲しむのみにて、反問する力もあらざりき。遂にカペナウムに着す。弟子達は各その家に往けり。耶蘇はペテロの家に宿る。時に納金を集むる者ペテロの許に來り合せぬ。曰く、『爾曹の師は納金を出さざるや。』ペテロは答に逡巡しぬ。『然らず』と言ひて急ぎ耶蘇の許に來りぬ。耶蘇は彼等の問答を聽けりと覺しく、ペテロの狼狽へる狀に與を催し、諧謔を弄して曰く、『シモンよ、爾如何に思ふや。世界の王たちは税又は貢を誰より徴集するや。己の子よりか、又は他の者よりか。』ペテロは此の間を訝かしく感じつゝ、『他の者より徴集す』と答ふ。耶蘇曰く、『然らば子は係はることなし。』こは半ば戯れに斯く言はれしなれど、そのうち眞面目の意味を藏せり。耶蘇は神の子なり、神殿は彼が父の家なり、何人ぞ其の爲めに貢を收むる要あらんや。されど耶蘇は人々を礙せざらんために、ペテロに告げて曰く、『なんぢ海に往きて釣を垂れよ。初めに釣れし魚を取りて其の口を啓かば金一つを得べし。それを取りて我と爾

のために彼等に納めよ。』とは勿論諧謔の續きなり。ペテロの家貧しくとも、豈に納金に窮せんや。然るに耶蘇は魚の口に含める金を以て之に當らる。想ふに耶蘇は普ねく言ひ傳へられし昔譚を心に浮べられしならん。幸福なる漁人が魚の腹より財寶を見出せる譚や、ソロモンが失はれし玉璽を回復せる物語は、猶太人の語草とする所、又ヨセフといふ嚴格に安息日を守る敬虔の人あり、その隣家に富める者ありしが、賣卜者は其の財産の何時かはヨセフのものなるべきを預言しぬ。この預言に驚き、之を防がんとて、富める者は其の財産を悉く賣りて一つの眞珠を買ひ、舟の中に藏して海に浮ぶ。然るに舟覆りて眞珠は海に落ち、一匹の魚に吞まる。その魚は捕はれぬ。偶然にもヨセフは其の魚を買ひ、その例の眞珠を見出せり。斯かる譚は耶蘇の稚くして聖母マリアの口より聽きし所ならん。耶蘇は即ち其の神秘力を用ひて、斯かる諧謔を弄せらる。誰か耶蘇を憂に沈む神經家といふや。その態度や光風霽月の如し。

## 第二節 ペテロ家の教訓

その日、夕暮にやあらん、弟子等はペテロの家に集ひ來りぬ。耶蘇は此の一場

の教訓を與へらる。弟子等は耶蘇の苦難と復活の如き神秘なる問題を解せざるのみならず、俗臭紛々として此の世の榮華を夢む。耶蘇は彼等の心を洞察して痛く愁ひ、先づ教ふるに、謙遜の必要を以てせらる。カキザリア、ピリビより來れる途上、弟子等は少しく後れ、耶蘇一人を高き想ひに耽らしつゝ、己れ等は此の世の野心に就いて共に語れり。耶蘇の敵に渡さるゝこと又、その苦難に就いての預言を耳にせる其の後に、師がエルサレムに往きて王となり、この世を支配するに至れる時の壯大なる光景を描きて得々たりし、彼等の心の鈍さ、想ひやるだに憐れなり。野心は嫉妬を生む。彼等は互に、『天國に於て最大なる者は誰ぞや』と論ぜり。

耶蘇はそを知りぬ。その時は口を噤まれしが、今同室に坐せる時、彼等が途上互に論ぜし所は何ぞやと問はれぬ。弟子等は心歴せらるゝ如く耻ぢて黙然たり。是に於て耶蘇は靈界の法則を示して曰く、『若し首たらんと欲する者は凡ての人の後となり、又凡ての人に使はるゝ者とならん。』即ち其の説明にとて稚兒を取りて之を抱かれぬ。そは疑ひもなくペテロの兒にして其の室に遊び

居りしならん、稚兒を彼等の前に差出して曰く、『我まことに爾曹に告げん。若し改まりて稚兒の如くならずば、天國に入ることを得じ。』十二人の誤謬は天國に於て偉大とならんとする其の欲望にあらず、彼等が偉大なる觀念に存す。世人の眼に偉大なる如く見ゆる者は、矢張彼等の優れりとせる所、然れども天國に於ては人に使はれ、柔しき心もて人々の犠牲となるを甘んずる者こそ偉大なるなれ。『凡そ此の稚兒の如く自ら謙る者こそ天國にて大なる者なれ。又わが名によりて此の如き一人の稚兒を接くる者は我を接しなり。』

そは手痛き批難なり。殊に野心に満てるヨハネには心を列らるゝ想ひあり。『耶蘇が我が名によりて』と言はれしより、そのヤコブと共にガリラヤ傳道に往ける時の出來事を回想して、その話題を他に轉ぜんとす。曰く、『師よ、爾の名によりて鬼を逐出せる者を見たりしが、我儕と共に従はざる故これを禁ぜり。』耶蘇答へて曰く、『その人を禁むる勿れ。そは我が名によりて不思議なる能を行ふ者にして、輕々しく我を誹り得る者あらじ。我儕に敵せざる者は我儕に屬する者なり。』耶蘇の許に來りて教を受けずとも、耶蘇の弟子たる行を

なす者は、又これを弟子の中に數ふべし。『わが父の家には邸宅多し。』天國はしかく狭量なるものに非ず。

耶蘇は深くヨハネの譚に就いて想ひ惱まれぬ。その無名の人こそ耶蘇が特に同情して、『小さき者』と呼べる輩の代表者なり。斯かる人こそ親切と救助を値ひすれ。然るに耶蘇の名によりて之を受容るゝ代りに、弟子は之を逐ひぬ。之を助け導かずして却つて其の途に障礙物を横ふ。往古の律法は盲人の前に障礙物を置き、又之を途の外に曳出せる者を罪に數へぬ。(利未十四、十九)然れども耶蘇の眼には天國に至る途上に障礙物を横ふは限りなき罪惡にてありき。『凡そ我を信ずる小さき者の一人を礙かする者は、その首に磨を懸けられて海に投入れられん方、その人のために尙ほ善かるべし。』

ヨハネの談話は他の教訓を引出しぬ。耶蘇は猶太教會の規則をこゝに反覆して曰く、『若し兄弟なんぢに罪を犯さば、その獨りある時に往きて諫めよ。若し爾の言聽かれなば、其の兄弟を得べし。若し聽かれずば、一人二人を伴ひ往け、而して兩三人の證人の口によりて其の事を定むべし。(申命十九)若し彼等にも

聽かずば教會に告げよ。若し教會に聽かずば、之を異邦人又は稅吏の如き者とすべし。』この言の中『教會に告げよ』との外、少しも猶太人の戒律に違ふなし。俄然耶蘇は律法を棄つるために來らず、之を成就せんために來れるを明かにせらる。斯かる戒律は弟子等の既に熟知せる所、その耳に入り易かりしならん。教訓は極めて平易となりぬ。さればペテロは疑問を提出する餘裕を得たり。問うて曰く、『主よ、わが兄弟われに罪を犯さば幾度これを赦すべきか、七度までか。』教師の掟にては三度罪を赦すべしとあり、ペテロは寛大なる心もて七度かといふ。七は完全なる數にて、以て一週をめぐるべし。耶蘇曰く、『赦罪の義務は無盡藏なり。爾に七度とは言はじ、七度を七十倍せよ。爾の兄弟悔いなば之を免せ。若し一日に七度爾に罪を犯して一日に七度爾に向ひてわれ悔ゆといはゞ免すべし。』斯くして耶蘇は有名なる譬の一つを此の時語られぬ。王に千萬金の負債をなせる一人の臣あり、到底償ふこと能はず。そは人の神に對する負債を表象す。調査の日、王は臣に命じてその身その妻孥及び有ゆる所有を皆賣りて償へといひぬ。されど其の惱める狀を憐れみて遂に之を免せり。然るに其の臣

は王の前をまかり出て、己に銀一百を借れる友に遇ひぬ。その喉を捕へて負債を返せと迫る。その友足下に平伏して猶豫を乞へども聽かず。遂に之を獄に投ず。王は之を聽き大に怒り、その臣を呼んで曰く、『悪しき臣よ、爾われに願ひしによりて我なんぢの負債を悉く免せり。我なんぢを憐れみし如く、爾も亦友を憐れむべきに非ずや。』遂に之を獄吏に付せり。耶蘇は嚴然附言して曰く、『若し各自その心より兄弟を赦さずば、我が天の父も亦爾曹に斯の如くなし給ふべし。』

## 第四章 ガリラヤの逍遙

### 第一節 七十人の派遣

耶蘇はカペナウムに還りぬ。されど其處に留まらんとにあらず。『天に至るべき時は將に來らんとす。彼はエルサレムに往くことを固く心に定めぬ。』(路九加一五)ガリラヤ傳道は既に終りを告げぬ。前途の悲しき光景を見れば、さすがに心熱せざるを得ず。耶蘇の愛は如何に大なりしぞ、而して其の反應は如何に冷

かなりしぞや。耶蘇の播ける種は如何に多かりしぞ、而して其の收穫は如何に貧しかりしぞや。彼は實に人民崇拜の焦點、所謂時代の英雄なりき。然れども衆人の心熱せる所以は、耶蘇の使命を解せし故にあらず、只奇蹟のためなるを如何にせんや。耶蘇の真正の弟子は大海の一粟のみ、世の標準より推せば、耶蘇の事業は全く失敗にてありき。耶蘇のいと深く愛してしかも冷かに待遇せられたる土地を去らんとするや、悲痛の辭その唇より發せるもゆゑなしとせんや。『あゝ禍なる哉、コラジンよ、あゝ禍なる哉、ベツサイダよ、爾曹の中になせし異能を若しツロとシドンになせしならば、彼等は早く麻を着、灰をかひりて悔改めしなるべし。われ爾曹に告げん。審判の日にはツロとシドンの刑罰は、爾曹よりも却つて易かるべし。既に天にまで擧げられしカペナウムよ、爾は又陰府に落さるべし。そは爾曹になせし異能を、若しツドムになせしならば、今日までも尙ほ保ちしならん。我なんぢらに告げん。審判の日にはツドムの地は爾曹よりも却つて易かるべし。』

耶蘇は徐ろにエルサレムに旅行せんとせられぬ。サマリアを経て、往く處い

づこにても教を説かんとは其の志にてありき。今ぞ最後なり。出来るだけの効果を收めざるべからず。そのため耶蘇は改宗者の中より七十人を選び、二名つゝ分ちて自ら至らんとする諸邑諸村に遣はされぬ(路加十)その目的は人々をして耶蘇の教に耳傾くる準備をなさしむるにあり。耶蘇が十二使徒を選びしは、イスラエルの十二種族に型れるなり。これ彼等の使命は重に猶太人の裡にあればなり。然れども耶蘇は一層大なる目的を有す。彼は世界の救主なり。今や世界的に福音を傳ふる時は來りぬ。救拯を世界大たらしむべし。猶太人の考想到に從へば、人類は七十の國民より成立す。故に耶蘇は七十の使徒を任命して、以て其の使命の世界的なることを表示せられぬ。

## 第二節 想ひ煩ふ勿れ

七十人は各地に赴けり。その間耶蘇はガリラヤを逍遙す。以て己が傳道の野を再び見んとせられしならん。數萬の群衆は諸方より蝟集し來る(路加十)群衆の中に一人あり、耶蘇の前に進み出てぬ。彼は耶蘇の救ひを受けんとて來るか。然らず。言ひて曰く、『師よ、我が兄弟に遺産を分つやうに命じたまへ。』耶蘇



は深く歎息せられぬ。その人は眞面目に謹みて之れを耶蘇に訴へしなり。されど其の訴ふる事の何ぞ俗なるや。斯かる訴訟を裁くは會堂の宰の役目なり。彼は耶蘇をして會堂の宰たらしめんとするか。斯かる俗事は耶蘇の努むべき本領にあらず。曰く、「人よ、誰が我を立て、爾曹の裁判人又は物を分つ者となせしぞ。」

その人を撥斥して、耶蘇は群衆に向ひ、これに就いて教へて曰く、「戒心して、貪心を慎しめよ、それ人の生命は所有物の豊かなるによらざるなり。」その説明として一つの譬を語る。農夫あり、歳々豊年にて田畑よく熟る。彼は收穫物を入るゝに所なきを見出せり。即ち獨り想へらく、「我かく爲さん。我が穀倉を毀ち、更に大なるものを建て、凡て我が作物と財貨とを其處に藏めん。而してわれ我が靈魂に向ひて、靈魂よ、爾は多年を過すに足る多くの貨物を有す。されば安心して食ひ、飲み、樂しめと言はん。」

この農夫は決して惡人にあらず。正直に稼ぎて其の富を得たるなり。その收穫物と財貨とは勞働の賜物なり。されど彼は世の事のために一層大いなる事

を忽かせにせり。神、信仰、審判、永生などいふ莊嚴なる事實は、尠しも其の心に浮ばざるなり。この世より鋭敏にして智慧に滿てる彼も、神の眼よりは一人の愚者に外ならず。されば神は彼に向つて曰く、「愚かなる者よ、今夜なんぢの靈魂取らるゝことあるべし。」

この譚に含まれし悲愁と諷示とを想へば、世の人誰か戰慄せざるを得んや。夙に起き、夜に寝ねて、額に汗して働く勤勉なる勞働者も、その心天に向ふことなくんば、その末路や憐れむべし。まして放縱に此の世を渡る醉生夢死の徒をや。「爾の備へしものは誰が有になるや。」例證は現に在り。弟は兄に向つて遺産の分配を要求せるにあらずや。兄弟相争ふ其の遺産は親の辛苦の脂汗の果實なり。これに想へば、いと悲し。骨肉相争ふ心よ。失はれたる靈魂よ。その最後や如何に。故に耶蘇は斷じて曰く、「凡そ己のために財を貯へ、神に就いて富まざる者は斯の如し。」

この諭譚を耶蘇は群衆に語りぬ。而して群衆の去れる時例の如く、十二人に對して尙ほ一層擴大せる議論もて之を説明せられぬ。「爾曹生命のために何

を食ひ、身體のために何を着んとて想ひ煩ふ勿れ。』そは甚だ重要な訓言なり。十二人は實に斯かる實驗を敢てする境涯に曝さるゝなり。彼等は耶蘇のため一切を棄てぬ。枕する所なき人の子の伴侶として、目さむる朝何處に食を求め、その日何處に宿るべきやを知らざることを屢々、『何を食ひ、何を飲み、又何を着ん』との問題は、幾度となく彼等を壓迫せるなり。斯かる状態は主ともに在す時のみならず、主既に逝りたまへる後に於ても然り。使徒保羅曰く、『今の時に至るまで、我儕は飢ゑ、また渴き、また裸體に、また撻たれ、斯くて定まれる住處なし。』(哥林前四十一)その状態すべし。

この不朽の論議に於て、耶蘇は世の事のために想ひ煩ふまじきことに就いて、三つの事を言はれぬ。第一は想ひ煩ひの不道理なり、『天空の鳥を見よ、稼くことなく穡かることをせず、倉に蓄ふることなし。然るに爾曹の天の父は之を養ひたまへり。爾曹これより大に勝れたるものならずや。野の百合花は如何にして長ながつかを思へ、勞あめず、紡紡がざるなり。われ爾曹に告げん、ソロモンの榮華の極みの時だにも、その装この花の一つに若かざりき。神は今日野にありて、明日爐

に投入れらるゝ草さへ、斯く装はせたまへば、まして爾曹をや。嗚呼信仰うすき者よ。』耶蘇はこれに依つて弟子等をして、凡ての事を神の攝理に委ねしめんとせられぬ。

第二に世の想ひ煩ひの不必要なり、『爾曹の中誰か能く想ひ煩うて其の生命を寸陰も延べ得んや。』一寸先きは暗黒の世なり。我等は現在の職分を盡さば足れり。將來は神の手に託せんかな。五十年百年いと永きやうなれども、只『今日』の堆積にあらずや。明日は永遠に來るなし。來りて見れば、明日も既に今日となれるを知らずや。故に曰く、『この故に明日の事を想ひ煩ふ勿れ。明日は明日の事を想ひ煩へ、一日の苦勞は一日にて足れり。』

最後に世の想ひ煩ひは非宗教的なり。『これみな異邦人の求むる者なり。』天の父を知らざる者が、衣食に就いて想ひ煩ふ、敢て不思議ならんや。然れども天國の子供たる者は斯かることを憂ふるに及ばず。『爾曹の天の父は凡てこれ等のものゝ必需なくてはぬことを知りたまへり。』世の想ひ煩ひは、實際的に異教的精神なり。故に耶蘇は弟子等の禮拜すべきものを確定せらる。『人は二人の主

に仕ふることを能はず、そは之を惡み、かれを愛しみ、これを親しみ、彼を疎むべければなり。なんぢら神と財たからに兼ね仕ふること能はず。』全く天の父の愛を信じ、その智慧に頼り、以て神の王國と其の義しきを求むるこそ、人生問題の根柢なれ。『爾曹まづ神の國と其の義しきを求めよ、然らばこれ等のものは皆爾曹に加へらるべし。』こは平和なる心情の秘訣ならずや。

### 第三節 ガリラヤ人の虐殺

耶蘇の尙ほガリラヤを逍遙せる間に、慘憺たる悲劇は其の耳に達せり。ガリラヤ人の一隊、エルサレムに至りて、神殿に捧物をなし居たりき。彼等は明かに敬虔にして平和の民なりき。されどガリラヤ人は大膽なる種族にして、常に羅馬政府に反抗の勢を示せるを以て、不幸にも此の一隊はポンテオ、ピラトの猜疑にかゝりしなりき。ピラトは彼等が神壇に跪ける時、これを捕へ、その肉を細断し、その血を彼等の供物ともものに雜ぜぬ。恰かも其の頃シロアムの池の塔倒れ、十八人を壓殺せり。その中六人は池の水に投じて病の癒えんことを欲せる者どもなりしならん。この二珍事は廣く傳はりて人心恟々たり。

虐殺されし一隊の中、危くもピラトの刃を遁れ、早急北方に走りて、之を耶蘇に告げし者あり。慘事を目撃せる彼等が胸の動悸をさまらざるも無理ならぬことなり。且つや、その上に猶太人の確信として、幸運は神の恩寵の表象、凶禍は神の不興の顯現と想はれぬ。約百記にもテマン人エリバスの言に「請ふ想ひ見よ、誰か罪なくして亡びし者あらんや、義しき者の絶たれしことなし」(七四ノ)とあり。こは實に舊約やタルムウドを通ずる一般の觀念なりしなり。されば彼等と共に往きし兄弟は罪人にして、神の手これを撃ちしと想ふや、戦々として安き心地なし。然るに耶蘇は斯かる迷想を打破せられぬ。曰く「爾曹このガリラヤ人は斯の如く害されし故に、凡てのガリラヤ人にまさりて罪ある者と想ふや。然らず、爾曹悔改めずんば皆おなじく亡ぼさるべし。シロアムの塔たふれて壓殺されし十八人は、エルサレムに住める凡ての人々にまさりて、罪ある者と想ふや。われ、爾曹に告げん、然らず、爾曹悔改めずんば皆おなじく亡ぼさるべし。』この預言は其の後凡そ四十年エルサレムの破壊に依つて適應せられぬ。エルサレムの塔は羅馬人の破城槌を以て倒され、神殿を最後の隠れ家とせる

幾多の市民は悉く虐殺されしにあらずや。

耶蘇は莊嚴なる此の預言を人々の腑に落さんため、譬喩を語られぬ。ある人その葡萄園に無花果を植ゑちしぬ。無花果は三年をもて成熟す。然るに此の樹は其の年月を経るも果を結ばざるなり。その人は耐へかねて園丁に言ひぬ。『見よ、われ三年來りて此の無花果に實を求むれども得ず、之を斫りされ。何ぞ徒らに地を塞がんや。』園丁は遮ぎりぬ。『主よ、われその周圍を掘りて肥しするまで、今年、は容せ。來年果を結ばざれば善し、若し結ばざればこれを斫るべし。』この無花果は他の國民にまさりて恵みを受けしイスラエルなり。『ある人』は神なり。園丁は其の怒をなだめし神の慈悲なり。三年はイスラエルの恵まれし永の歲月をさせり、モーセ來り、預言者來り、遂に基督來りても、彼等は頑強にして悔改めざるなり。斧は樹の根に置かる。而して神は尙ほ躊躇はれぬ。遂に果を結ばざると断定せらるゝや、一撃は與へられぬ。樹は倒れぬ。エルサレムは轉覆せられ、イスラエルの民族は灰の如く地球上に散布せられ了んぬ。

#### 第四節 安息日に婦を癒す

このガリラヤ逍遙の間に、尙ほ他に一事件起りぬ。そは耶蘇が途上過られたる無名の村にてなりき。安息日なりしかば、例の如く會堂にて教をなされぬ。禮拜者の中に殆んど二つに偪る婦ありき。そは疑ひもなく、痲質斯か脊髓病なりしならん。婦は十八年惱みぬ。耶蘇はこれを見て憐れみ、婦を呼び、その手を婦に按きぬ。而して『婦よ、爾は病より釋さる』と言はれしに、婦は直ちに身を伸ばして神を讚美せり。會堂の宰は狹量の人にてありき。然れども耶蘇を面責する勇氣なし。即ち衆人に向つて曰く、『仕事をなすの日は六日あり、その中にて來りて醫すべし。安息日にはなすべからず。』耶蘇これを聽き答へて曰く、『僞善者よ、爾曹のく、安息日には其の牛や驢馬を解きて、厩より曳き出して水を飲ませざるか。まして此の婦はアブラハムの裔なり。十八年サタンに縛られたる者。安息日に其の結びを解くべからざらんや。』こは猶太人の頑強に對する痛棒にてありき。安息日に働くべからざるは、モーセの十誡の嚴律する所なれど、家畜を厩より曳出して之れに水を與ふるは、猶太の教師等の默許せる所なればなり。

## 第五章 ガリラヤ旅行

## 第一節 構廬の節近づく

耶蘇がガリラヤに別を告げ、エルサレムに歩を向くべき時は來りぬ。十月十五日に始まるべき構廬の節は近づきぬ。ガリラヤの順禮者は隊をなし、陸續エルサレムに向つて出發す。耶蘇の兄弟も亦旅行の準備をなせり。兄弟は耶蘇をも共に往かしめんとす。彼等は尙ほ不信仰にして、只耶蘇の名聲の盛んなるを見て快とせり。兄弟の中に偉大なる預言者を有するは、豈に誇榮にあらざらんや。彼等は當時の救世主に對する觀念に感染し、耶蘇がイスラエルの王とならざるを耐へ難く想へり。耶蘇をして近づける節に往かしめよ、崇拜者は蟬集し來りて、耶蘇を王となさずんば、止まざらん。彼等は言ひぬ。『爾の行ふ所を弟子たちに見せんがために、此を去りて猶太に往け。そは己れを顯はさんとて秘かに事をなす者はあらず。爾これらの事を行はば、己れを世に顯はせよ。』

こは甚だしき陵辱の語なり。彼等は耶蘇が己れを世に顯はさんと欲すれど

も心臆して敢てする能はずと想へるなり。故に耶蘇は激語を以て之を拒けられぬ。『我時は未だ來らず。爾曹の時は常に備はれり。世は爾曹を憎むこと能はず。只我を惡む。そは彼等の行ふところは惡なりとわれ證言すればなり。爾曹この節に上れ。わが時は未だ至らざる故、我はこの節に上らじ。』耶蘇は實に節に往きつゝありき。されどそは構廬の節にあらざり。六ヶ月を経て來らんとする逾越の節なり。彼は世の罪を負ふ神の羔として、其の節の折祭壇に身を措かんと決心してありき。その時までは生命を保たざるべからず。構廬の節にエルサレムに登りて己が身を敵にさらす危険は、耶蘇の戒心して避けられし所。彼は尙ほ爲すべき多くの事を有されぬ。

逾越の節には尙ほ六ヶ月あり。されど耶蘇はエルサレムに面を向けて出立されぬ。徐ろに南に進み、到る處に教を宣べ、遂に來るべき時に聖なる首都に達せんとす。兄弟等の旅立てる後、『昭然ならず、秘かに』十二人と同行せらる。カペナウムよりサマリアの國境に至るまで、ガリラヤの領土は廣く、諸邑諸村連綿として續けり。耶蘇は人の群り來る所必ず教へらる。その心情は愛に満ち、そ

の語調は沈痛にして力ありしならん。これぞ耶蘇が唇もて人々に語るの最後なり。耶蘇の面は如何に神々しき光を放ちしよ。

### 第二節 旅行中の出来事

耶蘇ガリラヤ旅行の途次、某處に教を説かれぬ。その話題は救ひに就いてなりき。聴衆の赤心に訴へ、眞に救ひに入るべき事を極論せらる。聴衆の中に一人深く感動せるものあり。問うて曰く、『主よ、救はるゝ者は尠なきか。』こは當時の宗教説を打破すべき疑問なりき。往古イスラエル民族が埃及を遁れて約束の地に至れる如く、救世主の時にも亦斯くあるべしとは師父等の教ふる所なればなり。されば質問者は己が信仰の根柢の動搖されんことを厭ひ、耶蘇の教に心を撃たれつゝも、尙ほ耶蘇に「然らず」との答を發せしめんと企てぬ。

耶蘇は彼の心を察せられぬ。而して救はるゝ者は數の多少にあらず、その心の態度如何にあるを示さる。『窄き門より入らんことを努めよ。沈淪に至る路は濶く、その門は大なり、これより入る者多し。生命に至る路は窄く、その門は小さし。この路を得る者は尠なし。』斯かる語は古代の聖賢の一般に使用せる所

當時の諺ともなり居りしを、茲に耶蘇は豊かなる内容を吹込みて、生々せる力を與へられしなり。詩人ヘシオッドにも斯かる思想見ゆ。ケベスの傑作「額」(The Table)は希臘の天路歷程とも稱すべきもの、そはクロノスの神殿に懸れる繪入りの額に、人生の行路の示されあるを材とせり。ケベスは其の額を見、神殿を守れる老人より其の説明を聴けり。

『眞正の教に導く途は何ぞ』と余は言へり。

『上を見よ』と老人は言ふ。『誰も住まはぬ彼處の場所ぞ、荒野の如く見えずや』

『見ゆるなり』

『而して彼處に小さき扉あり。扉の前に途あれど、あまり人群がらず。只數人往くのみ。蒙茸巖巖途に横はりて通じ難きを見ずや』

『誠に然り』と余は言ふ。

『又峻峯登えて、絶壁を攀ぢる所こゝ、彼處にあるを見ずや』

『余は之を見る』

『然り、これ真正の教に導く途なり』と老人は言ひぬ。

耶蘇の語もこれと同じ。崇高なる行は難し、されば最も崇高なる救ひは最も難しと知らずや。窄き門に入り、峻巖を攀ぢてこそ真正の救ひに達すべけれ。

耶蘇は此の時天の王國の大なる饗宴を暗示せる譬喩を語られぬ。『家の主人起きて門の戸を閉ぢし後、爾曹外に立ちて、戸を叩き、主よ我等のために開きたまへといふ。主人答へて、我なんぢは何處より來りしを知らずと言はん。然るに爾曹は、我儕なんぢの前に飲み食ひし、爾も亦我儕の衢に教へたるにあらずやと言はむ。主人答へて、我なんぢに告げん、われ爾曹が何處より來りしを知らず。惡をなす者よ、我を離れ去れと言ふべし。然らば爾曹外に投出されて、アブラハム、イサク、ヤコブ及び凡ての預言者の神の國にあるを見る時、哀哭み、切齒することあらん。又人々東や西、北や南より來りて神の國の饗宴に與かるべし。それ後の者は先に、先の者は後になるべし。』これ實に聽く者をして戰慄せしむる預言なり。耶蘇は既にイスラエルの破滅を預言し、今また天國の状態を示さる。而かも彼等は悔改むることなし。

### 第三節 警告

耶蘇は尙ほ南に進み、ヘロデ、アンチパスの首都チペリアの近くに至る。パリサイの輩耶蘇の許に至り、一の警告を齎せり。ヘロデは耶蘇の名聲を恐れ、之を殺して人々の熱情を散ぜんとせり。洗禮者ヨハネを捕へしめし猶太の有司等は、恐らくヘロデの此の企に加擔せしならん。耶蘇に好意を有せるバリサイの輩は、早くも之を探知し、急ぎ耶蘇を訪ひ、『ヘロデ、爾を殺さんとす。速かに此處を去り往け』と告げぬ。耶蘇は從容として此の警告を聽きぬ。彼等をして小慧しき暴君に對する使者たらしめんとす。『爾曹往きて、その狐に告げよ。見よ、われ今日明日惡鬼を逐出し、病を癒し、三日目に其の事を完うすべし。』『今日明日』とは猶太にて『尙ほ暫く』の義なり。尙ほ暫くガリラヤに傳道し、恐嚇に怖れず、從容定まれる時に至るべし。ヘロデ何する者ぞ。而して耶蘇は悲調もて附言して曰く、『今日か明日又は其の翌日には、我必ず往かん。そはエルサレムの外に預言者の殺さるゝ所なし。』凡ての預言者の殺されしはエルサレムなり。最大なる預言者神の子も亦そこに死せざるべからず。

この時警告を齎せるパリサイの輩は誰々なりしや、その名を記すなし。然れどもパリサイの中に信仰こそ告白せざれ、耶蘇の信者ありしは事實なり。ニコデモ及びアリマタヤのヨセフも亦パリサイの徒なりき。猶太人なりし馬太と馬可もパリサイの徒に就いて少しも記さざれど、異邦人より出し路加は柔しき眼もてパリサイの中にも厚き心の人あるを見、耶蘇が三度パリサイの家に招待されし事を記せり。(七ノ三十六―五十―十一)。假令パリサイの人の耶蘇を遇する薄かりしにせよ、そは特別の好意なること察すべし。

#### 第四節 パリサイの家の饗宴

最後のガリラヤ旅行の途次、ある安息日に耶蘇は宰なるパリサイ人の家に招ぜられぬ。安息日の饗宴は當時甚だ盛んに行はる。食品は前日準備せられて、涼しき處に措かれぬ。聖アウガスチンは己が時代にて猶太人が安息日を暴食暴食の日となせるを記せり。今や主人は教法師その他多くのパリサイ人を招きて耶蘇に對面せしめ、以て其の不思議なる行を見せしめんとせり。彼等皆「耶蘇を窺へり。」窺へる甲斐やありけん。その近隣に腹脹を患ふる人ありしが、恰

かもマгдаラのマリヤの如く、パリサイの家に潜み入り、食堂に來りて耶蘇に憐れみを乞ふ。耶蘇は教法師とパリサイの人々に問ふ。「安息日に醫すは可きや否や。」彼等默然たり。耶蘇は其の人を執へ、醫して之を去らしめ、人々の心を推し、その非難を詰りて曰く、「爾曹の中、たれか息又は牛などの阱に陥たらんに、安息日なりとて、遽かに曳出さざらんや。」

彼等これに對ふるなかりしより推しても、耶蘇に對する友情想ふべし。饗宴進むや、人々は互に主人の次に坐らんとす。そは最も名譽の席なればなり。耶蘇は其の狀を見て心に可笑しく感ぜられぬ。即ち耶蘇はソロモンの故智(五ノ廿七)に倣ひて、教を垂れて曰く、「爾招かれなば往きて末座に坐せよ。招きし者來りて、友よ、首座に進めと言はば、同席の者の前に尊ばるべし。」又この家の主人に向つて曰く、「爾饗宴をなす時は、朋友兄弟親戚又は富める隣人を招く勿れ。恐くは彼等また爾を招きて報答をなさん。よろしく貧しき者、癡疾、跛者、瞽者などを招け。彼等は爾に報ふるを得ず。さらば義しき人々の甦らん。其の時、なんぢに報答あればなり。」こは奢侈と倨傲を以て、廷に列せる者どもに對する諧諷



なる諷刺にてありき。

斯かる鋭き卓上演説もて、耶蘇は饗筵に活氣をつけられぬ。その諷刺は人々の心を貫ぬけり。その一人は話題を轉ぜんとて、「義しき人々の甦り」といふ句を捕へ、如何にも感動せる如く、「神の國に食する者は福なるかな」と叫びぬ。こは敬虔なる如くして、實は空世辭にてありき。故に甚だしく耶蘇の不興を買ひぬ。ある時使徒等は各その怠慢を意識したりけん、「我儕の信を増せよ」と乞へり。耶蘇は東洋の諺を引き、「爾曹もし芥種一粒ほどの信あらば、この桑樹を抜きて海に植はれといふとも爾曹に従ふべし」と答へらる。こは嚴然たる難詰たり。その缺く所は信仰にあらず、敬虔の赤心なり。今やまた赤心なき斯かる空言に接す。譬を以て其の非を辨ぜられぬ。

或る人大いなる筵を設けて多くの賓客を招ず。既に準備のなりし時、シリア地方の慣習(日本の田舎あり)に従うて、僕を遣はし、招待せる人々に言はしむ。百物はや備はりたれば來らるべしと。然るに彼等は皆同じく辭しぬ。一人は曰く、「われ田地を買ひたれば往きて視ざるを得ず。願はくは我を允したまへ。」第

二は曰く、「われ五耦の牛を買ひたれば之を試むるために往かん。願はくは我を允したまへ。」第三は曰く、「われ妻を娶りたれば、その故に往く能はず。」その辭するや、皆如何にも禮に適へり。然れども赤誠なき空言たるを免れず。唇の禮拜何の價值かあらん。耶蘇は他の場合に曰く、「爾曹われを主よ、主よと呼びながら、何ぞわが言を行はざるや。」(路加六)。

家の主人は招待の蔑視されしと聽くや、大に激せり。心を翻して全く別種類の客を招かんとす。即ち僕を遣はして、邑の衢巷に往き、貧しき者、痲疾跛者、瞽者などを連れ來らしむ。然れども尙ほ餘りの席あり。主人は命じぬ。「道路や藩籬の邊りに往きて、強ひて人々を連れ來りて我家を満たしめよ。」斯くして主人は其の初めに招きたる者をば一人だに其の餐を味はしめざりき。斯の如く税吏罪ある者は主の救ひに與かり、正當に招かるゝ權利を有せしイスラエルの人々は儀式に拘はり、虚偽に安んじて神の饗筵に列せざるこそ是非なけれ。

#### 第五節 弟子たる資格

耶蘇の途を往くや、多くの人隨ふ。彼等は耶蘇のエルサレムに赴き、イスラエ

ルの王たる宣言をなすならんと想ひ、その後に従ひ往かば、幸にその盛大なる勝利に與かるを得んと望めり。若し彼等が耶蘇の目ざす所、エルサレムの王位にあらず、カルバリーの十字架なりと知らば如何。耶蘇は顧みて、狂熱せる群衆に面と向ひ、弟子たる資格に就いて語られぬ。「凡そ我に來る者は、父母妻子兄弟姉妹また己れの生命をも憎まざるべからず。然らずんば我が弟子たるを得ず。又十字架を負はずして、我に従ふ者はわが弟子たるを得ず。」要するに人情の至極をも棄てずんば、耶蘇に忠なる能はざるなり。彼等に此の決心あるや如何に。一層遠く耶蘇に従ふ前に、實にこは先決問題たり。「なんぢら誰か、塔(葡葡花園に築くもの)を築かん先に先づ坐して、その費を計らざらんや。礎を据えて、之を完成する能はずば、見る者皆嘲笑うて、この人は築き始めて成遂げざりしと言はん。或は又王出て他の王と戦はんに、先づ坐して此の一萬人をもて彼の二萬人に敵すべきや否やを籌らざらんや。若し及ばずば、敵尙ほ隔れる時に、使を遣はして和睦すべし。然れば斯の如く爾曹その所有物を悉く捨てずんば、わが弟子たることを得ず。」耶蘇の弟子たらん者は、先づ費を計り、虚心坦懐、十字架を負ふ

の決心を固むるの必要あること、今も昔と異ならず。  
群衆は嚴然たる此の宣告を聽きて、後に瞳若す。皆踵を接して去る。されど尙ほ耶蘇に従へる者こそあれ、そは税吏と罪ある人なりき。彼等は群衆の去れる時、始めて耶蘇の側に來れり。耶蘇は痛く彼等を悦ばれぬ。

#### 第六節 大なる三つの譬喩

耶蘇は税吏罪ある人より招待を受けられぬ。そはカペナウムにてレビの家に招待されしとさも似たり。パリサイの人と學者之を見て怖れ、譏りて曰く、「この人は罪ある者に交りて食を共にす。」この譏言(そしり)に答へて耶蘇は三つの比喩を語られぬ。失はれし羊、失はれし金子、失はれし息子の譚はこれ。耶蘇はこれに依つて神は失はれし罪人を悲しみ、そを見出すを悦びたまふ旨を示されぬ。  
「爾曹のうち誰か一百の羊を有せんに、若し其の一匹を失はば、九十九を野におき、往きて其の失ひし羊を得るまでは尋ねざらんや。尋ね得ば喜びて之を己が肩にかけ、家に歸りて其の友と近隣(かたがは)の人々を呼び集めて、我と共に悦べ、我が失へる羊を得たればといはん。われ爾曹に告げん、斯の如く一人の罪ある者悔

改めなば、悔改むるに及ばざる九十九の義人よりも尙ほ天に於て悦びあらん。牧羊者の心勞は、羊の價値よりも寧ろ其の災禍にあり。其の如く罪ある者災禍に陥らんか、神は痛く憫れみを催したまふ。

婦のうち誰か、金錢十枚を持ち、その一枚を失はんに、燈火を點して家を掃除し、之を得るまでは懇ろに尋ねざらんや、尋ね得ば、その友と近隣の人々を呼び集めて、我と共に悦べ、我が失へる金錢を得たればといはん、われ爾曹にいはん、かくの如く一人の罪ある者悔改めなば神の使の前に悦びあるべし。この婦が切に尋ねし所以は失はれし金の價値を重んじてなり、その如く罪ある者も神の眼に貴く、その失はるゝは神の損失たるなり。

第三の比喻は尙ほ一層驚くべき眞理を藏す。罪ある者は只神の失はれし所有にあらざ、實にそは失はれし神の息子なり。父の心は其の回復を希ふ。曰く、ある人息子二人あり、生前その財産を分配するは父の慣例なり。季子は律法に従ひて財産の半ばを請求しぬ、父は之を兄弟に分ち與ふ。數月を経て、季子は其の財産を集めて遠國に旅立てり、放蕩のため悉く其の財を失ふ。其の時恰かも饑

饑起り、彼は將に飢えて死なんとせり。辛うじて其の地の某に身を寄せ、豕を牧ふ者となれり。こは猶太にて最も賤業とする所、彼は甘んじて之をなす。豕の食する豆莢を以て己が腹を充たさんとするほど飢ゑに饑ゑぬ。自ら省みて、父の家には傭人すら食物に豊かなるを想ひ、曰く、『われ起ちて父の許に往いて言はん、父よわれ天と爾の前に罪を犯したれば、爾の子と稱するに足らず、傭人の一人と我をなしたまへ。』と、こは實に放蕩兒の墮落せる心狀を曝露せり。親を想ふは己が罪のために非ず、只窮すればなり。『われ耻を行へり、父の心を痛むる幾何ぞや、嗚呼われ惱める者なるかな。』と言は、如何に美はしかるべき。然るに彼の願ひ望む所は只父の家の食物にあり。『我が父の許には多くの傭人すら食物餘りあるに、我は飢ゑて死なんとす。』罪を犯すに利己的なりし彼は、罪を悔ゆるにも亦利己的なるを見ずや、實に彼は父に抱擁せらるゝまでは、眞正の悔改をなす能はざるなり。耶蘇はこゝに假令利己的なりとも、神に歸るの必要を示されぬ。一度父の家に歸らんか、父の愛に其の利己的考想は散り失せて、赤子の心になり得るものと。

その動機は賤しくとも、放蕩兒は起ちて郷里に歸り往けり。父は心の寥しげに、朝な夕な漂泊人の還らんことを切に望めり。今日は如何なる吉日ぞや、彼方に遙か見ゆるは失ひたる我が兒の姿にあらずや。父は趨りて之を迎へ、その頸を抱きて接吻せり。流石の放蕩兒も頑強なる心こゝに溶け、涙は頬に傳はり、

「父よ、われ天と爾の前に罪を犯したれば、爾の子と稱する能はず……」といひて、腹案し來りし語を口にする能はず、只歎歎するのみ。父は兒の言へる所を耳にせず、僕等に叫んで曰く、「いとも美しき衣を持ち來りて、これに着せ、その指に環をはめ、その足に履を穿せよ。又肥えたる積を曳來りて宰れ。我儕食して樂しまん。これ我が子死にて復た生き、失ひて復た得たればなり。」

この時兄は田に在りき。歸りて家に近づけば樂器と舞踏の聲喧し。僕の一人に其の實を正し、怒つて家に入らざるなり。兄は弟に對して愛なく、又父の喜びを喜びとする孝子の心なし。弟は放蕩を敢てする勇氣を有し、又それと同時に罪に泣く柔しき心を有てり。されど兄は財産をまとめて遠國に旅立つ如き冒險的氣象も有せず、只實直にして形式を重んじ、先人の跡を踏み、鞠躬如として

只命これ従ふの性格なりしと見ゆ。父は長子家に入らずと聽き、表に歩をはこびて之を宥む。答へて曰く、「われ多年なんぢに事へて未だ爾の命に背かず。されど我友と樂しむために羔をも與へしことなし。然るに妓女のために爾の財を耗したるこの爾の子歸れば、これがために肥えたる積を宰れり。」彼は此の答に於て放蕩兒が其の弟なるを非認すると同時に、己れは父の子たるをも辭退し、「この爾の子」といへり。又その「なんぢに事へ、爾の命に背かず」といふを見よ。彼は父に對して備人根性を有てるを示せるにあらずや。耶蘇は勿論この兄に依つてパリサイの人を代表せしめられぬ。彼等は税吏罪ある者を拒み、以て父の愛に與からしめざらんとはするなり。さはいへ、斯かるパリサイ人すら神の憫れみを引く。彼等は孝子たる精神を缺くと雖も、尙ほ父の息子なり。「子よ、爾は常に我と共に在り、また我が所有物は皆なんぢのものなり。この爾の弟死にてまた生き、失ひまた得たる故に、我儕悦びて樂しむは當然の事なり。」兄は父に對して「父よ」といはざりしかど、父は息子に對して「子よ」といはる。又兄は弟を呼びて「この爾の子」といひ、父は兄に對して其の弟を呼んで「この爾の

弟』といはる。この語に含まるゝ意義如何に深遠なるかを想へ。父は備人根性の兄をも愛して、之を子と呼ぶを嫌悪はず、彼をして弟の兄たる權威を尊重せしめらるゝなり。罪ある者、パリサイの人、何れか差別あらん。天の父は兩者を其の家に容るゝを此上なき歡喜とせらるゝなれ。

#### 第七節 不義なる操會者

耶蘇はまた財の使用に就いて語られぬ。こは十二使徒に對する訓言にあらず、耶蘇を厚遇せる税吏罪ある者に對しての教なりき。十二人は貧窮なりしかば、財の使用に就いて考ふる必要なければなり。然るに税吏罪ある者は、皆富有の人にてありき。故にこは彼等にとりて適當なる教訓なりしならん。

耶蘇は語られぬ。ある富める人あり。シリア地方の風習に従ひて、その財産を悉く操會者の手に委ぬ。こは創生記のポテバルとヨセフの譚の如し。『彼はヨセフに家を幸どらしめ、その所有物を悉く其の手に委ぬ、その食ふパンのほか何をも顧みざりき』(三十四、六)然るにこの操會者はヨセフの如くならず、その委任を亂用し、主人の財を耗せり。主人その風評を聽き、操會者を呼びて曰く、『爾に

就いてわが聽ける事は何ぞや。爾の扱へる事柄を述べよ。今後なんぢを操會者となすを得ず。』操會者心に役務を奪はれし後のわが身を想ひぬ。『われ鋤を取るには力なく、施物を乞ふには耻かし。』思案投首のあまり、彼は妙計を想ひあたりぬ。曰く、『われ爲すべき事を知れり。』そは窃に小作人に恩を施し、以て彼等の家に寄食せんとするにあり。即ち悉く小作人を呼び集へり。第一の者に曰く、『爾はわが主人に負債何ほどあるや。』答へて言ふ。『油百斗あり。』彼にいふ。『爾の券書を取り、急ぎ坐して五十と書けよ。』第二の者に曰く、『爾の負債は幾何ぞ。』答へていふ。『小麦百斛なり。』彼にいふ、『爾の券書を取りて八十と書けよ。』而して其の他順次に斯の如くす。主人はその所爲の如何にも巧妙なるによりて、此の不義なる操會者を讚めたり。

耶蘇は教へて云はく、この世の子供等は、この世に於ては、光の子供等より最も巧みなり。この不義なる操會者に倣ひて、財を巧みに用ひよ。而して之を慈善に費せ、然らば爾この世を去りて、天國の門に達せし時、爾に恩を施されたる者共、歡び迎へて爾に挨拶すべし。『我なんぢらに告げん、不義の財を以て己が友

を得よ。こは窮せる時、彼等なんぢらを永遠の邸宅に迎へんためなり。』こゝに所謂『不義の財』とは何ぞ。税吏等が不正なる手段にて得たる金をいふか。耶蘇は決してそれを嘉せられざるべし。耶蘇が此の譚に不義の財と真正の財とを對照されし(路加七六)より推せば、そは益々益々く鏝鏝くさる此の世の財といふ意なるべし(馬太六ノ)。耶蘇は尙ほ語をつゞけて曰く、『小事に忠なる者は大事にも忠しく、小事に忠ならざる者は大事にも忠しからず。故に若しなんぢら不義の財に忠しからずんば、誰か真正の財を爾曹に預けんや。爾曹若し人のものに不義ならば、誰か爾曹の所有をなんぢらに與へんや。』神の使命を人に下すや亦斯の如し。モーセのミジアンにて祭司エテロの羊群を牧ふや、山羊の仔道に迷へり。モーセはこれを探ね、其の泉に水飲めるを見出せり。モーセは山羊の仔に『爾は疲れたり』といひ、これを肩にかけて家に擔ひぬ。神はモーセに曰く、『なんぢは人の家畜にあはれみ深き者なる故、われ爾をわが群なるイスラエルの牧者とすべし』(路加十五)。こは聖書以外の譚なれど、美しき逸事にあらずや。

#### 第八節 富める人とラザロ

耶蘇この教訓を垂れし時、パリサイの人も側側にそれを聽きぬ。金に對する愛は、パリサイの人の特徴なり。彼等は金を以て神の特別なる恩恵となす。されば耶蘇の垂訓に其の心咎められ、之れを嘲笑せり。耶蘇は其の嘲笑を見て曰く、『爾曹は人々の前に自己を義とする者なり。されど神は爾曹の心を知れり。それ人の尊ぶところの者は、神の前に憎まるゝ者なり。』かくいひて又比喩を語る。こゝに富める人あり。彼の生活は奢侈を以て洗禮されし如く、紫の衣袍と薄絹の布を着て日々奢奢に樂しめり。又ラザロといふ貧しき者あり。痛く腫物を病めり。ラザロとは『神救ふ』といふ意なる故、耶蘇はこゝに此の名を用ひられぬ。このラザロは其の難澁の身を富める人の門におけり。而して其の案より落つる餘屑にて養はれんとせり。犬來りて其の腫物を舐む。その状いかに憐れぞや。されど富める人は惻隱の情を發せざるなり。貧しき者は神の救に依つて見えざる世界にうつされぬ。天の使たち之れをアブラハムの懷に送る。この世にありし時に引かへ、祝福の平和はラザロをめぐれり。懸て富める人も死せり。壯麗なる葬式は彼を墓に送りしならん。されど彼は死してアブラハムの懷に入る能

はず、この世の歡樂の報償として陰府に送られ、四苦八苦の惱みに遭へり。遂かに目を擧げて上を見れば、己が門前にて死せるラザロは、アブラハムの懷にあるにあらずや。即ち叫んで曰く、『父アブラハムよ、我を憐れみ、ラザロを遣はして其の指の尖を水に浸し、以てわが舌を涼さしめたまへ。われは此の火焰の中に苦しめばなり。アブラハムは答へぬ。』子よ、爾は生たる時に爾の福を受け、又ラザロはその苦しみを受けしを憶へ。今彼は慰められ、爾は苦しめらる。こは當然なり。管にこれのみならず、こゝより爾曹の許に涉らんとするも得ず。こゝより我儕の許に涉らんとするも得ざらんがために、我儕と爾曹との間を限界れる巨大なる淵あり。』富める人は自らその運命にあきらめたりけん。答へて曰く、『さらば父よ、願はくは我が父の家にラザロを遣はしたまへ。そはわれに五人の兄弟あり。彼等が此の苦しみの場所に來らざるために、ラザロを證據となしたまへ。』アブラハム曰く、『彼等にはモーセと預言者あれば之れに聴くべし。』苦しめる者は答へぬ。『然らず、父アブラハムよ。若し死より彼等に往く者あらば、悔改むべし。』絶對の拒絶はなされぬ。『若しモーセと預言者に聴かず

ば、縱令死より甦へる者ありとも、その勸告に従はざるべし。』誠に人の歩むべき途は、太古より教へらる。彼等がその途を歩まざるは、之を知らざるに非ず、その心頑強にして知つて尙ほ行はざるなり。耶蘇は此の譬を二重の目的に使用する。一は不義なる操會者の譬の中に、『不義なる財を以て己れが友を得よ、こゝは窮せん時、彼等なんぢらを永遠の邸宅に迎へんためなり』との語を説明して、弟子等に其の意義を明断ならしめんため。二はパリサイの人の嘲笑に答へて、『人の尊ぶところの者は、神の前に憎まるゝ者なり』との語を説明せんためなりき。

## 第六章 サマリア旅行

### 第一節 見る影もなき救世主

耶蘇は遂にサマリア領に達す。七十人は二人づゝ組をなして、先驅をなせるを以て、耶蘇の來ることは待望まれてありき。耶蘇ある村に入れる時、十人の癩

病者癒されんために彼を待てり。耶蘇の來るを見るや、遙かに聲を揚げて叫んで曰く、「師耶蘇よ、我儕をあはれみ給へ。」慘然たる光景とやいはん。同病相憫れむか、平素は交を結ばざる猶太人とサマリア人とは共に住へるなり。耶蘇は其の哀願を聽かれぬ。曰く、「往きて己れを祭司に見せよ。」彼等は其の意義を知らず、只耶蘇の言に従ふ。その柔順なる信仰の故にやあらん。往く間に身は潔められぬ。喉元すぐれば暑さを忘る。彼等は病に汚れし間は大旱の雲霓に於ける如く耶蘇を待ちしかど、既に身癒ゆるや、之を悦ぶのあまり、感謝を忘れたり。只一人あり、己が醫されたるを見て、歸り來り、大聲にて神を讚し、耶蘇の足下に俯伏して謝せり。そはサマリア人なりき。神を知れりといふ猶太人は感謝せず、神を知らざる異邦のサマリア人は斯の如し。耶蘇は慨然として曰く、「潔められし者は十人にあらずや、その九人は何處に在る。この異邦人の外に神に榮を歸せんとして歸り來る者なきか。」耶蘇は猶太人の無情を悲しまれしかど、翻つて賤しきサマリア人が恩寵に心開けるを悦ばれぬ。傳道の初め、スカルにてサマリアの婦を悔改めしむしことなど、回想して、心に言ひ知らぬ歡喜を覺えられし

ならん。されば曰く、「起て往け、なんぢの信仰爾を救へり。」この國境の村には猶太人多く住へりと見え、此處にもパリサイの輩居りぬ。耶蘇がサマリア人を推奨せるを怒りしと見え、耶蘇に近づいて問ふ。「神の國は何れの時來るや。」彼等は救世主たる者は凱歌を奏して出現すべきを信ぜり。然るに耶蘇の其の村に來るを見るに、一節の杖、素白の衣、見る影もなき漂泊人なり。従ふ者は僅少、しかも賤しき輩のみ。彼等は自稱救世主の見る影もなき狀を笑へり。されど神の王國の來るべき時を問へるなり。耶蘇は力に満てる簡潔の辭を以て答へらる。「神の國は顯はれて來るものに非ず。かの星學者や天氣の預言をなす者のいふ如く、こゝを見よ、かしこを視よと人の言ふべきものにも非ず。それ神の國は爾曹の裡に在り。」神の國は既に來れるなり。然るに彼等はそれを意識せざるのみ。洗禮者ヨハネは曰く、「爾曹が知らざるところの者一人、爾曹の裡に立てり。」(約廿六)

パリサイ人は退けり。されど其の嘲弄は弟子等の心を深く痛めり。弟子等も亦救世主のあまりに平民的なるに礙けり。こは彼等の平素の憂慮にてありき。



されば耶蘇の十字架に釘らるゝを見んか、弟子等は神の耶蘇を救はざるを嘆ち、全く信仰を失ふやも知るべからず。故に耶蘇は譬を語りて、神如何に彼等を輕視する如く見ゆるとも、不動不退の信仰を有すべき事を教へられぬ。ある邑に神を畏れず、人を敬はざる裁判人ありしが、その邑の寡婦その許に至り、「我をわが仇より救ひたまへ」と願へり。彼は久しく之を肯ざりしかど、心に想へらく、「われ神を畏れず人をも敬はざれど、この寡婦はわが煩ひなり。絶えず來りて我を聒さるるために之を救はん。」耶蘇教へて曰く、「不義なる裁判人の言ひしことを聽け。況して神は晝夜祈れる所の選びし者を永く忍びて、遂に救はざらんや。」

### 第二節 バリサイの人と税吏

耶蘇は此の國境の村より進み、到る處に神の國の福音を傳へらる。バリサイ人と税吏との有名なる譬は其の時語られぬ。何處の邑なりしや、バリサイ宗の精神に深く養はれたりと見え、「自ら義しと想ひ、人を輕しむる人々」ありき。耶蘇は譬を以て、彼等の傲慢を挫き、これを神の前に謙遜しめんとなされぬ。構

慮の節は近し。順禮者は隊をなしてエルサレムに赴く。耶蘇は其の聯想より二人の者神殿に登りて祈れることを述べらる。一人はバリサイの人、一人は税吏なり。自ら義しとせるバリサイの人は敬虔なる態度を以て祈りぬ。「神よ、我は他の人の如く強索、不義、姦淫をなさず。又この税吏の如くにもあらざるを謝す。われ一週間に二度斷食し、又凡て獲るものは其の十分の一を献げたり。」これは口に發せる祈にあらざらん。されど其の心に斯く祈れるなり。この祈に見ゆる如く、バリサイ人の所爲は一として不正なるなし。されど其の不正なるは自ら義しとする精神なり。又人を輕んずる漫心なり。この祈禱の裏面を見よ、他人は皆な強索者、不義なる者、姦淫せる者なり。義しきは我一人のみ、我は又この税吏の如くにもあらざるを謝すと、これ神に對して、發すべき辭なるか。これに反して、税吏は遙かに立ちて神殿を拜し、首を垂れて、眼を天に向けず。聖クリソストムはいふ、諸の星は彼を難じ、天空には己が罪の刻まれあるを覺えしならんと。而して其の祈禱は懺悔の哽び聲、憐れみの叫びなり。「あゝ神よ、罪人なる我を憐れみたまへ。」他に辭を發する能はざるなり。神は碎けたる靈魂を嘉した

まふ。耶蘇は附言して曰く、「我なんぢらに告げん、此の人は彼の人より義とせられて家に歸れり。それ凡て自らを高しとする者は卑ひられ、自ら卑ひる者は高たかげらるべし。」

### 第三節 サマリア人の拒絶

耶蘇は深くサマリアの内地に入る。七十人の先驅者は既に主の來ることを告げ知らせるを以て、傳道の効果多からんとは密かに期待されし所にてありき。然るに此の期待は空に歸せり。郷人しやびは耶蘇の近づける時、之を拒めり。福音記者は其の理由を説明して、『そのエルサレムに向ひ行く故なり』と言へり。されば此の冷遇はサマリア人と猶太人の平素の抗争のみならず、其理由は尙ほ近くあり。ガリラヤ人は聖都に詣づるに際し、途をサマリアに取る。通過の折、二種族の間に争擾の起ること敢て珍しからず。恰かも此の時、構慮の節にて順禮者の幾隊の通過せる後なれば、耶蘇の一行も其の憎惡の飛沫を浴せかけられしなりき。彼等の冷遇は弟子等を激昂せしめぬ。雷の子と呼ばれしほど激烈なる精神を有せるヤコブとヨハネは、エリヤの古事を思ひ浮べて曰く、

『主よ、我儕エリヤの爲せし如く、彼等を滅ぼすために天より火を召降よくだす能はざるか。』耶蘇は顧みて鋭く彼等を凝視せらる。戒しめて曰く、『爾曹は己が心の態度を知らず、人の子は人の生命を滅ぼすために來れりと想ふや。然らず惟これを救ふためなり。』遂に他の郷に往かれぬ。

### 第四節 七十人還る

この郷の拒絶は當時サマリア全體に擴がれる排猶太的感情の一波にてありき。耶蘇は往く所として容れられず、教を説くに術なかりき。さればサマリア傳道の計畫を棄て、ユデアに向つて旅を急がれぬ。恰かも其の途にて七十人の使命を完うし、喜び勇みて歸り來るに遇ふ。彼等がサマリアを経て傳道旅行をなせる時には、サマリア人の敵愾心あらざりしなり。彼等は耶蘇の痛める心をも悟らず、報告して曰く、『主よ、惡鬼さへも爾の名によりて我儕に服せり。』耶蘇は此の報告を悦ばれざりき。彼等を遣はせるは、洗禮者ヨハネのなせし如く、主の道を直くせんためなり。惡鬼を逐出す力は其の方便として授けられぬ。然るに彼等は此の不思議なる力を亂用するを悦びて、肝要なる其の目的を忘れ

しなり。即ち曰く、『われ雷火らいびの如くサタンの天より墮つるを見たり。我なんぢらに蛇蠍へびとこを踐み、又敵のすべての権力を制ふる權威を授けたり。必ず爾曹を害ふ者なし。』然るに彼等のなせる所は如何に僅かなるよ。彼等は尙ほそれを喜び誇るや。『惡鬼の爾曹に服せし事を喜びとする勿れ。』斯かる事を以ては、未だ爾曹の名、天に録さるゝに足らず。神の『生命の書』に不朽の名を留めんに、尙ほ偉大なる事をなさざるべからざるなり。

## 第七章 ユダヤ旅行

### 第一節 耶蘇と教法師

耶蘇はサマリアの南境を過ぎ、ユデア領に入り、或る町に達す。恐らくそはエリコなりしならん。その會堂に入りて説教されしものと見ゆ。耶蘇説教を終りし時、聴衆の一人は會堂の慣例に従ひ、起つて質問をなせり。そは教法師にてありき。彼の質問は耶蘇を試み、これを耻かしめんためなりき。曰く、『師よ、われ何を爲さば永生を受くべきか。』耶蘇は其の狡猾なる内心を看破されぬ。而して

己れに投げられし係締かひを投げ返して曰く、『律法に記されしは何ぞ、爾は如何にそれを讀むか。』答へて曰く、『なんぢ心を盡し、精神を盡し、力を盡し、意こころを盡して主なる爾の神を愛すべし。また己れの如く隣人を愛すべし。』こはモーセの二戒律を結合せるもの、當時猶太にて禮拜用として戒律を拔萃して作られありしならん(馬可十二ノ卅二、一三を見)。耶蘇は教法師の答を是として曰く、『爾の答は然り、これを行はゞ、生くべし。』教法師もさる者戒律中『隣人』とあるを見て、これに就て耶蘇は必ず異見あらんと想へり。一般の解釋によれば、そは猶太の同胞を意味す。されど耶蘇はこれに就て異端の説あらん。斯く字義の説明を求むる所、流石に律法の研究を以て職とせる教法師たるに背かざるなり。曰く、『わが隣人とは誰なるか。』耶蘇は此の答として亦譬を語られぬ。

旅人ありエルサレムよりエリコに下る。途にて強盜に遇へり。強盜は旅人の財囊衣服を奪ひ、之を打擲して殆んど死に瀕せしむ。而して悠然として去れり。猶太の祭司に廿四級あり、順番にエルサレムに勤務す。勤務中の祭司の半数は食物と水とに豊富なるエリコに宿るを常とす。故に祭司等は絶えずエルサレ

ムとエリコの間を往來せり。掠奪されし旅人の血に塗れて横はれる時、恰かも祭司は其處を過ぎれり。彼は旅人を見しが知らざるまねして去れり。次にレビの人來りしが、同じく見過して往けり。第三に來れるはサムリア人なり。彼は驢馬に乗りてエルサレムに旅す。想ふに商人なりしならん。不幸なる旅人を見急ぎ之を抱起せり。而して當時の旅行者が持薬として有せる油と酒を其の傷にそそぎ、布もて傷所をつゝみ、己が驢馬に乘せて、旅舎に伴れ往き、親切に之を抱す。翌日己れは出立せんとして主人を呼び、銀二枚を出し、頼みて曰く、『この人を介抱せよ。』銀一枚は勞働者一日の工錢にあたる。(馬太廿) 恐らく銀二枚は悠に旅人を回復せしめしならん。されど尙ほ彼は附言して曰く、『費用もし嵩まば、われ歸りにそれを償ふべし。』

耶蘇は此の譚を語りて曰く、『然らば三人の中誰か強盜にあひし者の隣人なるや。』教法師はサムリア人なる語を思み、答へて曰く、『その人を恤める者なり。』耶蘇は莞爾として曰く、『爾も往きて其の如くせよ。』

## 第二節 マルタとマリヤ

耶蘇ガリラヤを去るに當りては、構廬の節に出席せんとは想はざりき。行く處に説教して、逾越の節までにエルサレムに入らんとは其の志なりき。されど耶蘇も亦この世の生涯をば信仰を以て迎れるを以て、事志と違ひ、サムリアに傳道する能はざりしものから、豫定より早く聖都に近づくに至りぬ。即ちエルサレムに入るに先んじ、二哩の前に位せる一村ベタニヤに旅の塵を拂はる。この村に美しき家庭あり。そは約翰の記せし如く、『耶蘇の愛せる所なり。』マルタ、マリヤの姉妹及び其の弟ラザロは此處に住へり。耶蘇は此の一家と舊知の間柄にして、エルサレムに上らるゝ毎に、この家に宿りて教を説かれしが如し。今や耶蘇の此家に着かれしは、構廬の節の時にてあれば、此の一家も亦饗應の仕度に忙しかりき。構廬の節は猶太の祭にて最も悦ばしきもの、『その喜悅を見ざる者は喜悅を知らざるなり』とまで、教師は言へり。そは往古祖先が埃及を遁れて荒野に初めて天幕を張れるを記念すると同時に、又收穫祝カウレハなればなり。實にそは饗應と款待の季節にして、『肥えたる者を食ひ、甘きものを飲み、備へをなし得ざる者に分ちて、大なる歡樂はなされぬ。』(尼希米亞八ノ十)

斯かる樂しき時に耶蘇は此の家に入らる。一家の歡迎言はんばかりなし。旅と冷遇に疲れし耶蘇の心も輕きを覺ゆ。マルタは慧敏にして熱情ある愛すべき主婦として、この珍客を如何に待遇すべきか。その心は『いり紊れぬ。』彼女はあちこちと忙しく働けり。然るに妹のマリアは耶蘇の足下に坐し、その愛に満てる面を見あげて、その唇より洩出づる教に吞まれたり。これを見たるマルタは嫉みの情に燃えしにや、耐へ難き想ひに驅られて耶蘇に近づき、『主よ、わが姉妹はわれを一人遣して働かしむるを何とも想はじ。妹に命じて我を助けしめよ。』マルタは直接妹に向つて共に働くことを求めず、之れを主に訴へぬ。その耶蘇に對する敬愛の情掬すべきものあり。耶蘇はそれに答へて曰く、『マルタよ、マルタよ。なんぢは多くの事によりて想ひ煩ひ心勞ひせり。』華奢なる響應何かあらん。主の欲する所は高き信仰と清き想ひなり。即ち曰く、『無くて叶ふまじきものは一つなり。マリアは既に善き方を選べり。こは彼女より奪ふべからず。』マルタは地の事に心を煩はし、マリアは天の事に想ひを没す。その差大ならずや。この譚を玩味すれば、このマリアは靜淑溫雅の娘なり。彼のマゲダ

ラのマリアが活動的にして寧ろマルタに似たるを想へば、彼此同一人ならざること知るべし。

## 第八章 エルサレム傳道

ペタニヤより耶蘇はエルサレムに往く。そは大膽なる事なりき。ペテスダに奇蹟を行ひし時このかた、エダヤ人は安息日を犯せる罪に依つて耶蘇を殺さんと謀れり。彼等の憎惡は處を隔つとも時を經るとも減ぜざるのみならず、益々その殺意を強めぬ。今日に至るまで十八ヶ月、節は屢々ありしかど、耶蘇の影だに見えざることは、彼等に取りて甚だしき失望なりき。今や正に構廬の節にあたり、耶蘇を見んと、希望は勢を盛返せり。北方の順禮者は『耶蘇の面のエルサレムに向ける』を見しことを風評せり。然るに節筵は初まるも耶蘇は到着せざるなり。待望に耐へずして、有司は言ひぬ、『彼奴は何處に在るや。』その憎惡と蔑視とは耶蘇の名を口にするを潔しとせざりし如し。而して人民の中には耶蘇に對する感想二派に分れ、或は『彼を善人なり』といひ、或は『然

らず彼は民を惑はす者なり』といへり。

・聽て節<sup>イロハ</sup>の第四日、耶蘇を見んとする希望の殆んど棄てられし時、突然現はれし耶蘇は、神殿の外庭にて教へ初めぬ。その論を遣る、如何に深遠にして力に満てるよ。有<sup>ツカ</sup>司等は愕然たりき。彼等は未だ斯かる教を耳にせしことなし。耶蘇は彼等に答へて、その教のわがものならず、實に神の教なることを明かにせり。『人もし我を遣はせし者の意<sup>ココロ</sup>に従はば、この教の神より出づるか。又己れによりて言ふなるかを知るべし。』彼等は既に知れる僅かの眞理に忠ならざる故に、耶蘇の顯照する一層大なる眞理を理解する能はざるなり。『モーセは爾曹に律法を與へざりしや。爾曹の中それを守る者なし。爾曹何故われを殺さんと謀るや。』有司等の殺意を知るは、少數なるエルサレムの市民のみ。故に多くの群衆は愕然として叫びぬ。『爾は鬼に憑<sup>ユ</sup>れたり。誰か爾を殺さんと謀るや』耶蘇は群衆の靜まれるを待ちて、有<sup>ツカ</sup>司等の謬想を指摘し、安息日に人の病を癒すことの決して神を瀆すに非ざるを説かれぬ。『人もしモーセの律法<sup>ノモ</sup>を破らざらんがため、安息日に割禮を受くるにあらずや。然るに何ぞ我が安息日に人の

全身を癒せしことを怒るや。』

論議は鋭し、深く群衆の胸を衝く。エルサレム市民の一團は明かに有司等の畫策を知れるを以て、その手を拱<sup>ココロ</sup>けるを奇しみて曰く、『こは人々の殺さんと謀る者にあらずや。今彼は明かに言ふ。而して彼を尤<sup>トガ</sup>むる者なし。有司等は彼を誠に基督なりと認むるや。』他の者は叫んで曰く、『否、我儕は此の人の何處より來れるかを知る。されど救世主の來らん時は、誰も其の何處より來りしかを知るなし。』こは實に當時の思潮を代表せる語なりき。聖書によれば、救世主はベツレヘムに生るといふ。されど教師等はいふ。第一の贖主<sup>あがなひ</sup>モーセがミジアンの荒野に隠されし如く、第二の贖主も現はれ、隠され、而して又見ゆべし。而してその現はるゝや、突然にして決して待望せらるゝことなしと。故に耶蘇は斯かる思潮を打破して曰く、『爾曹われを知り、又わが何處より來るを知る。されど我は己れに依りて來りしに非ず。我を遣はせし者は眞正<sup>まこと</sup>なる者にて、爾曹の知らざる所なり。我は彼を知る。そは我は彼より出て、彼は我を遣はせし者なればなり。』群衆は大いなり。何ぞ耶蘇に同情せざる者あらんや。多くの互に曰く、

『基督の來らん時、そのなす所の休徴、豈に此の人より多からんや。』斯かる同情者群衆の中に多くありしを以て、有司等は尙ほ耶蘇に手を觸るゝこと能はざりき。

耶蘇は尙ほ時代の英雄なり。彼を信ずる者多し。されば耶蘇は狐疑逡巡せる輩に對し、時の短きを戒しめて曰く、『我なほ暫く爾曹と偕にあり。而して後われを遣せし者に往かん。爾曹われを尋ねるとも遇ふべからず。わが居る處に爾曹來ること能はざるべし。』そは即答を促す招呼なり。されど其の有司等の耳に達するや、驚愕と愚弄とを惹起せり。見よ、耶蘇はイスラエルを遁れて、何處にか其の姿を隠さんとす。これ彼等の想ひなりき。彼は何處に往かんとするや。彼等は、耶蘇が異邦の土に入らんとは想ふ能はず。さりとて何處か猶太人の殖民地に往くとも考ふる能はざるなり。當時猶太人は巴比倫、埃及、シリア、小亞細亞、希臘、伊太利に散りて、専ら商業に従事し、富有にして權勢を保てり。斯かる分散者は尙ほ固く先祖の信仰を保ち、年々エルサレムに順禮するを怠らざりき。されど其の住へる國風に染りて、その思想習慣は紊れ、到底純然たる猶太人と相容

るゝ能はざりしなり。故に互に怪しみて曰く、『爾曹われを尋ねるとも遇ふべからず。又わが在る所に爾曹來ること能はずと言へるは何ぞや。』

構廬の節は一週間續く。されど、其の第八日は一層嚴格に祝はれぬ。初日には十三頭の牡牛を犠にし、それより第七日まで一頭づゝを減ず。總て七十頭の犠を捧ぐ。而して第八日には只一頭の牡牛を捧ぐ。然れども第八日は節筵の大なる日と稱せらる。そは七十頭は世界七十の國民のために捧ぐるもの。最後の一头はイスラエル民族のためなればなり。而して又構廬の節は收穫の祝ひなるを以て、僧侶等は露と雨とに就いて祈禱を獻ぐ。これ翌年の農業に祝福を乞ふなり。一週間は露のため、第八日は雨のために祈るといふ。

この第八日なり。雨勢なき地方にていと貴き『神の賜物』に就いて祈禱を獻げらるゝ時、耶蘇は起つて大聲に呼ばはりぬ。『人もし渴かば我に來りて飲め。我を信ずる者は聖書に記せる如く、その腹より活ける水、川の如くに流れ出づべし。』約翰傳にはこれ以上を記さざれど、聽衆の深く感動せるより言へば、尙ほ多くの論議はなされしならん。馬太の記せる恩寵に充てる招呼は此の時吐か

れしならんか。曰く、「凡て疲れたる者、重きを負へる者は我に來れ、我爾曹を憐はせん。われは心柔和にして謙遜る者なれば、わが輓を負ひて我に學べ。なんぢら心に平安を得べし。そはわが輓は易く、我が荷は輕ければなり」(馬太十一) 斯かる論議の耶蘇の唇より洩るゝは、ガリラヤ人の常に耳にせし所、されど其の朝この神殿の庭に集まれる群衆の多くは、他方より來れる者、斯かる説を聽けることなし。愕然心を撃たれし彼等は言ひて曰く、「これは救世主の道を備ふる預言者なり。」或は「これは基督なり」といふ。又これに反對する者あり。「否、基督はガリラヤより出づべけんや。聖書に基督はダビデの裔にてダビデの住みし里、ベツレヘムより出でんと記されしに非ずや。」彼等は實にナザレの耶蘇に拘りて、その救世主たる聖格を認むる能はざりしなり。

斯く耶蘇に對する感想二派に分れて相争へることは、その逮捕の好機會を供せり。集議所より遣はされし下吏は耶蘇を捕へんとて機會を窺へり。耶蘇を捕へんは正に今ぞと想はれしかど、下吏の心は却つて耶蘇に捕はれたるを如何にせん。彼等は手を空しうして集議所に歸りぬ。報じて曰く、「いまだ此の人

の如く言ひし人あらず。」耶蘇の曳き來らるゝを待ちに待ちしパリサイの人は下吏に曰く、「爾曹も亦惑されしか。」こは想はず發せる嘆聲にてありしならん。彼等は己が品格を落すまじとの傲慢なる心もて附言して曰く、「有司又はパリサイの人にして彼を信ずる者あるべけんや。律法を識らざる衆人……彼等は實に呪ふべし。」

頑強なるパリサイの徒輩の中、一點の紅を飾れるはニコデモなり。彼は夜耶蘇を訪ねし以來、窃に其の弟子たり。この時薄弱ながら抗勢を採りて曰く、「その人に聽かず、その行を知らざる先に之を裁くは、われらの律法にかなはず。」衆皆嘲笑して曰く、「爾も亦ガリラヤ人なるか。想ひ見よ、ガリラヤより預言者の出づることあらんや。」

## 第九章 エルサレムの抗議

### 第一節 自己の證明

構廡の節は終りぬ。されど耶蘇は尙ほエルサレムに留まれり。神の攝理は自



己の計畫に反し、耶蘇をしてエルサレムに來るを餘儀なくせし故に、耶蘇は其の血の注がる、前に暫く其の敵に抗議せんとせらる。而して最初の抗論は神殿の内賽錢箱の側に起れり。女人禁制の庭に十三の箱あり、その形状より喇叭と名づけらる。禮拜者はこれに賽錢を投ぐるなり。そは人繁く往來する處、耶蘇は此處を選んで教へて曰く、『我は世の光なり。我に従ふ者は暗さを歩まず、生命の光を持つべし。』構廬の節の末日には女人禁制の庭に黄金の燭臺に火點ぜられ、禮拜者は手に炬火を持ちて舞踏するを慣ひとせる故、その聯想よりこゝに光といはれしならん。又一つには「光」は猶太にて救世主の異名なり。故に「我は世の光なり」との語は自ら救世主たるを主張せられしと見るべし。パリサイの人は此の語を聽きて抗議しぬ。教師の律法によれば、自己の證明は不正と認めらる。故に叫んで曰く、「爾は自ら證す。さればそは眞ならず。」耶蘇は自若として答へぬ。『我自ら證すとも、我が證明は眞なり。』耶蘇は自ら何處より來り何處に往くかを知る。律法には二人の證明は眞なりと記さるゝに非ずや、『我は獨り在るに非ず、我を遣はせし父と偕に在り。我を遣はせし父も亦わが證明

をなす。』彼等曰く、『爾の父は何處に在るや。』その思想の卑俗にして到底耶蘇の語を解する能はざるを見るべし。

耶蘇は又ある時教へて曰く、『我往かん、爾曹我を尋ぬべし。爾曹己れの罪に死なん。我往く所には爾曹來ること能はず。』こは節筵の折教へられし諫告の反覆なり。されど此の度は彼等これを解して曰く、『彼は自殺せんとするか。』猶太の殖民地に往かんとするかとの解釋は、遂に斯く變じぬ。その思想の益々墮落し往くを窺ふべし。耶蘇は彼等の想低きを蔑視し、又甚だしく失望せられぬ。『爾曹は下より出て、我は上より出づ。爾曹は此の世より出て、我は此の世より出でず。』彼等と耶蘇とは雲泥の相違あり。解せられざるも道理なり。『爾曹人の子を擧げし後、我の彼なるを知り、又我自らは何事をも行はず、惟わが父の教に従ひて、是等の事を言へるを知るべし。』殺して見れば神の子なりとは、餘りに晚き悟りにあらずや。

抗論は空しからず、『耶蘇この事を言へる時、多くの人彼れを信じぬ。』こはエルサレムにて得たる眞正の改宗者なり。この他有司等の中にも耶蘇の教に

感じ、心を動かせる者どもあり。耶蘇は一日彼等をも真正の弟子となさんとし、その有司等に語られぬ。然るにそは端なく彼等の不興を買ひ、再び敵に變ぜしこそ是非なけれ。耶蘇曰く、『爾曹もし我が道に居らば誠に我が弟子なり。且つ真理を知らん。真理は爾曹に自由を得さすべし。』この自由の語は耶蘇と彼等の衝突を來せり。彼等はアブラハムの裔なり。奴隷にあらず。自由は固より有する所なり。故に問うて曰く、『爾の言ふ自由とは何ぞ。』耶蘇曰く、『凡て惡を行ふ者は惡の奴隷なり。われ爾曹がアブラハムの裔なるを知る。されど我を殺さんと謀る。そは我が道。爾曹の衷に在らざればなり。爾曹もしアブラハムの子ならば、アブラハムの行を爲すべし。』彼等尙ほ其の自由を主張して曰く、『我儕は奸淫によりて生れず。只一人の父あり。即ち神なり。』耶蘇曰く、『神もし爾曹の父ならば、爾曹我を愛すべし。我は神より出て來ればなり。』彼等の父は惡魔なり。故に其の父の慾を行ふことを好む。『神より出てし者は神の言を聽く。爾曹の聽かざるは神より出てざるに因る。』耶蘇の言は涼乎として響く。彼等は嘲つて曰く、『爾はサマリヤ人にして鬼に憑れたる者なり。』我儕の言へるは宜ならずや。』

耶蘇は答ふ、『我は鬼に憑れし者に非ず。我はわが父を尊び、爾曹は我を輕んず。われ誠に爾曹に告げん。人もし我が道を守らば窮りなく死を見ざるべし。』この語は益々彼等の嘲弄を買ひぬ。『今こそ我儕爾の鬼に憑れしを知る。アブラハム既に死に、預言者も死ねり。然るに爾は人もし我が道を守らば窮りなく死なじといふ。爾はアブラハムより優る者ならんや。』耶蘇は答ふ、『我もし自ら稱讚めば、わが稱讚は虚し。我をあがむる者はわが父即ち爾曹が我が神と稱する所の者なり。爾曹の先祖アブラハムは我が日を見んことを悦び、且つこれを見て樂しめり。』彼等曰く、『爾未だ五十にも及ばざるにアブラハムを見しや。』  
(この語は耶蘇の容貌が辛苦に疲れ、其の齡より年老いて見えたる証とすべし。)耶蘇は斷じて曰く、『我はアブラハムの在らざりし前より在る者なり。』實に此の斷言は迅雷耳を掩ふに暇あらざらしむ。衆は激然として起てり。石を取りて耶蘇を撃たんとす。耶蘇は隠れて其の中を過ぎ、神殿より出て去りぬ。

## 第二節 耶蘇と盲人

論争の日より數日を経ぬ。安息日に當りて耶蘇は弟子等を伴ひて道を往け

り、途上食を乞へる生來盲目の若者坐せり。神殿の門近くにやありしならん。禮拜者の惻れみを得んとす。憐たる其の狀、耶蘇の惻隱の心を動かす。弟子等は問うて曰く、「師よ此の人の盲目に生れしは自己の罪か、はた兩親の罪か。」耶蘇は二つながら斯かる因果説を拒けられぬ。曰く、「そは彼によりて神の業の顯はれんためなり。」何ぞ悠々たる沈思に時を費すべけんや。「晝の間は我必らず我を遣はせし者の業をなすべし。夜來らん其の時、誰も業をなす能はず。」耶蘇の最後は近し。救ふべき者は凡て救けん。と焦心せらる。「われ世に在る時は世の光なり」と言ひて、地に唾さし、唾にて地を溶き、その泥を盲人の目に塗り、而して若者に曰く、「シロアムの池に往きて洗へ。」若者は命に従へり。即ち目見ると得て還る前にも言ひし如く泥を目に塗りしは、奇蹟の靈光を隠して、泥の効力に歸せしめんとするに外ならず。

盲人は悦んで其の家に還れり。隣人怪しみて曰く、「こは坐して物を乞へる者ならずや。」或はいふ、「この人は彼の乞食に似たり。」若者は答へぬ。「我は彼なり。」而して耶蘇の爲せる一部始終を語る。パリサイの人之を聴き、「彼れは

安息日を守らざる故に神より出でし者に非ず。」又これに反對する者あり。「罪人いかで斯かる奇蹟を行ふを得んや。」議論は二派に分れたり。彼等は盲人の意見を問ふ。「爾はなんぢの目を啓けし者を何といふや。」答へぬ。「彼は預言者なり。」

彼等は尙ほも言ひ争へり。若者の兩親の許に至り、若者が誠に生來の盲人なりしかを聴き正さずんば此の奇蹟は信ずべからずと言ふ。然るに其の兩親の答は實に直截なりき。「こは我が子なると生來の盲目なるとを知るのみ。其の如何にして目の啓きしかは直接に彼に尋ねよ。彼は成人なり。自ら語るべし。」兩親の斯く巧みに遁れしは、猶太人が耶蘇を基督なりと證する者を會堂より破門すべしと議決せしを知ればなり。

彼等は再び若者を詰問す。若者は耶蘇の恩寵に感ぜり。故に飽までも抗論せり。彼等が耶蘇を罪人なりと言へるに對して曰く、「罪人なるや否や、われ之を知らず。我は盲人なりしが今わが目明かとなれり。只この一事を知る。神は罪人に聴かず、されど神を敬ひて其の旨に従ふ者には聴きたまふべし。世の元始よ

り以來生れつゝなる盲人の目を啓けし人あるを聽かず。『盲人の此の語は衆人の激怒を買へり。曰く、『爾は全く罪に生れし者なるに、却つて我儕を教へんとするか。』遂に若者を會堂より破門せり。

會堂の門は若者に對して閉ぢられぬ。されど其の時より天國の門は若者のために開かれぬ。耶蘇は破門のことを聽き、若者を尋ねて之に遇ふ。曰く、『爾は神の子を信ずるか。』答ふ。『主よ、神の子として我が信すべき者は誰ぞ。』耶蘇曰く、『爾は既に神の子を見る。今なんぢに語る者はそれなり。』神の子は若者の前に立てり。若者の心の目は亦忽ち啓く。『主よ、我は信ず』といひて、跪きて耶蘇を拜せり。

### 第三節 羊の門の譬喩

耶蘇は不正にも人を教會より放逐せし彼等の處置を悲しみ、一つの譬喩を語らる。猶太の荒野に羊群を入る、牢かま到る處にあるは、耶蘇と其の弟子等の常に見る所。その牢に入るに門あり。牧羊者は此の門より入りて羊を導く。『彼の羊を引出すとき先に往く、羊彼れの聲を知りて之に従ふ。羊は他の人に従は

ず。却つて遁る。そは他の人の聲を知らざればなり。』實に羊と牧者との間柄は親密にして水をも洩らさずとや言はん、牧者の徳は柔和勇氣獻身にあり。『その臂かみにて小羊を抱き、之をその懷かみ中に入れて携へ、乳を含まする者を靜かに導くべし』(以賽亞四十一) 猛き獸の口より羔を奪ひ、失はれし羊を尋ねて山の奥をも踏分わけんこそ牧羊者の任務つとなれ。猶太人にとりて其の心を引く、これ以上の畫圖はあらず。古代の聖徒は神を人類の牧羊者に譬ふるを好めり。基督者の古き石碑には牧者が失はれし羊を肩にして還る所を畫きしもの尠なからず。

この譬の直接の目的は破門者を慰むるに在り。『我は即ち羊の門なり』と耶蘇は言ふ。『我は門なり。若し人われより入らば救はれ、且つ出入をなして草を得べし。』而して耶蘇は譬に羊の門たるに留まらず、又善き牧者なり。『善き牧者は羊のために生命を捐つ。我は己れの羊を知り、又己れの羊に知らる。我は此の牢に在らざる他の羊をも持てり。彼等をも連れ來らん。彼等わが聲を聽かん。遂に一つの群、一つの牧者となるべし。わが父我を愛す。そは我再び生命を得んために生命を捐つる故なり。』

この譬に有司等は再び二つに分れぬ。多くの人はいふ、『鬼に憑れて狂ふ者の言なるに、何ぞ彼に聴くや。』これに對する者どもはさふ、『これ鬼に憑れし者の言に非ず。鬼に盲人の目を啓く能あらんや。』この兩派は耶蘇に近づき、最後の解決を求めんとせり。日は過ぎぬ。修殿の節は來れり。こは十二月廿五日より八日間に執行せらる。耶蘇が神殿のソロモンの廓を歩める時、彼等は耶蘇を環圍みて曰く、『我儕を何時まで疑はするや。爾もし基督ならば明かに我儕に告げよ。』耶蘇答へて曰く、『我爾曹に告げしかど、爾曹信ぜざるにあらずや。爾曹の信ぜざるは、我が羊にあらざればなり。わが羊は我が聲を聴き、我は彼等を知る。彼等われに従ひ、われ彼等に永生を與ふ。彼等いつまでも亡びず。またこれを我が手より奪ふ者なし。我に彼等をたまへる我が父は萬有よりも大なり。又わが父の手より之を奪ふ者なし。我と父とは一つなり。』

この語は衆人を激せしむ。神を激す是より甚だしきはなし。彼等は石を取りて耶蘇を撃たんとせり。耶蘇は彼等の手より脱れて去りぬ。耶蘇に同情せる者ども彼を庇護せるなるべし。耶蘇はこゝに於てエルサレムを去らんとし。ケド

ロンの谷を越えて西に向ふ。それより橄欖山に登られしならん。途上莊嚴なる想は耶蘇の胸に満てり。振返りて聖都を瞰視し、辣き哀憫の告別は其の唇より發せり。『あゝエルサレムよ、エルサレムよ、預言者を殺し、爾に遣はされし者を石にて撃つ者よ。母雞の雛を翼の下に集むる如く、我爾の赤子を集めんとせしこと幾度ぞや。されど爾曹は好まざりき。視よ爾曹の家は荒地となりて遣されん。われ爾曹に告げん。主の名によりて來る者は福なりと爾曹の言はん時至るまでは、今より我を見ざるべし。』

エルサレムは不信仰を以て耶蘇を容れず。有司等は耶蘇を拒け、之を殺さんとせり。されど時至らず。耶蘇は安らかにエルサレムを去れり。馬太と路加が斷片的に記入せる偉大なる言は此の時吐れしならん。『天地の主なる父よ、この事を智者明者に隠して、赤子に顯はしたまふを謝す。父よ然り、それ此の如きは聖旨に適へるなり。父は我に萬物を與へたまへり。父の外に子を識る者なく、又子及び子の顯はす所の者の外に、父を知る者なし。』

## 第十章 ヨルダンの彼岸に退く

## 第一節 離縁に就いて

耶蘇はエルサレムを去りて、ヨルダンのベタニヤに退く。そはヨハネの説教せし處、耶蘇洗禮を受け、救世主として世に出現し、最初の弟子に出遇ひしも其處なり。この場處こそ耶蘇の眼に永久神聖にして懐しき所なれ。今や最後の近づける時、耶蘇は此處に退きて神と靈交し、以て慘憺たる試練に堪ふる力を養はん。とせられぬ。而して又耶蘇は弟子の信仰薄弱なるを嘆き、彼等が惑に陥らざるため、尙ほ教ふる所あらんとせられぬ。

衆人は耶蘇の後に隨へり。されば耶蘇は尙ほも彼等に教へ、又病を癒すことを倦まざりき。彼等は耶蘇のなせる大なる業の恩寵を想うて、曰く、『ヨハネは休徴をなさず。されど此の人に就いてヨハネの言ひし事は皆眞なり。』そは實に果實多き時にてありき。『多くの人彼處にて彼を信ぜり。』

有司等は耶蘇がベタニヤにて新に勢を張れるを聴き、甚しく騒ぎ立てり。聽

てパリサイ人は影の形に従ふ如く、耶蘇の側に現はれぬ。慧しくも工夫せる疑問を提出して曰く、『人如何なる故に係らず、其の妻を出して可なるや。』こは當時盛んに論ぜられたる問題なり。モーセの律法にては妻不貞なる時には離縁するを許せり。されど教法師等は其の慣習に従ひて此の條項を論争せり。シヤムマイ派は律法の文意に拘泥して不貞のための外、妻を離縁すべからずといひ、ヒルレル派は俗衆に媚びんために、『如何なる故に係らず』妻を離縁するを許せり。夫たる者妻を嫌ふため、或は他の女に愛を移せしため、或は妻の料理不味かりしため、之れを離縁するも差支なしといふ。而して當時ヒルレル派の解釋一般に行はれしは勿論なり。嘗に七去のみならず、夫の好惡によりて妻は離縁せらるべし。明日をも知れぬ妻の運命、げに浮草の如し。耶蘇は如何なる場合にも歴せらるゝ者の友なり、何ぞ女の運命を憫れまざらんや。耶蘇は教法師等の論争に携はるを避け、先づ此の解決を聖書に求められぬ。『爾曹讀まざるや。聖書には、神人を男女に造りたまへり。この故に人は父母を離れて其の妻に合ひ、二人のもの一體たるべしとあるに非ずや。されば既に二つに非ず、一體な

り神の合せたまへる者は人これを離すべからず。」男女は一體の半分なり。優劣あるべきに非ず。何ぞ女は男の奴隷たるべけんや。

こはパリサイの徒も認むる所、彼等はヒルレルの説を是認せざりしなり。されど今や耶蘇の『神の合せたまふ者、人これを離すを得ず』との答につけ入り、『然らばモーセが離縁状を與へて妻を出せと命ぜしは何故ぞ』と問ふ、こは實に巧妙なる係蹄にてありき。耶蘇がモーセの律法を否定せんか、異端として彼を宣告し、その人望を全く奪ふを得べし。遁れん途はなかるべしと想ひの外、耶蘇はこれに就いて何等の痛痒を感じず、攻撃者の刃を奪ひて彼等の胸に擬せられぬ。然りモーセは離縁を許せり、そはイスラエル民族の思想低く、心情的なきに依り止むなく之を許せるなり。』ソロンは嘗て彼の造れる律法の最上なるものに非ず、されどアセン人に取りては最上なるものと言へり。モーセの律法亦然り。律法は應病投藥のものと知らずや。

パリサイの人は退けり。弟子等も又猶太人の僻習を脱せざるものから、斯かる嚴肅に堪へやらず、『若し斯くの如くならば人は妻を娶らざるに若ず。』と

言へり。こは快樂主義の立場よりの言なり。されど耶蘇は其の言を變じて嚴肅主義に改め、只『人は妻を娶らざるに若かず』との語を執へて、曰く、『この語は人皆受容ること能はず、たと賦けられたる者のみ之を爲すを得べし。それ母の腹より生來きたる寺人あり。又人にせられたる寺人あり。又天國のために自らなれる寺人あり。』只尊むべきは保羅の如く天國のために獻身して獨身生活を送る者のみ。(哥林前八)

## 第二節 『嬰兒の我に來るを容せ』

雖て耶蘇は全く別種類の人々の訪問を受けらる。子を持つる父母の一群は各その愛兒に祝福を受けしめんとて來れり。彼等の想ひや敬虔なり。神壇に愛兒を捧ぐる感想を懷きぬ。こは實に耶蘇の心を樂しましむ。然るに離縁論にて心を害せる弟子等は之を阻めり。その状を見て、耶蘇は叫びぬ。『嬰兒の我に來るを容せ。禁しむること勿れ。天國にある者は此の如き者なり。』一人々々嬰兒の頭に手を按き、之を祝福して去らしむ。こは實に未だ自覺なき嬰兒に取りて由々しき經驗なり。彼等の全生涯の狀や如何に。

## 第三節 富める青年

耶蘇ベタニヤに滞在せる間、一日一人の青年耶蘇を訪ふ。彼は會堂の宰にてありき。彼は耶蘇の弟子等と共に宿所より出て來るを見て、その許に走り、跪きて問うて曰く、『善き師よ、われ限りなき生命を得んがために何の善事をなすべきか。』こは三ヶ月以前エリコの會堂にて教法師が耶蘇に尋ねし所に同じ。この青年は會堂の宰にてあれば、耶蘇の永生に就いての議論を傳へ聞き、尙ほ一層其の説を確かめんとせるなるべし。されば今耶蘇ベタニヤに在りと聽き、惱める心を解かんためエリコより數哩旅して來れるならん。彼はパリサイの徒なり。我が義務を知らしめよ、我之をなさん。』と用意せる善良のパリサイのタルソの保羅の如く嚴格なる法律を教へられ神に熱心なる者、しかも其の靈魂は尙ほ不満足なるを覺ゆ。彼は凡ての事をなせり。されど尙ほ缺ける所あり。故に何等の緒言も説明をも附せず、善き師よ、われ永生を得るために何をなすべきや。』と問へり。されど其の間は根本的誤謬に陥れり。耶蘇は善き師たるに留まらず、主基督なり。又永生は行爲に依つて得らるべきものにあらざるなり。

只義とせらるゝは信仰に因る。行爲によるに非ざるなり。

故に耶蘇は此の青年の至誠なる心を悦びつゝも、その問を正して曰く、『何故われを善きといふや、一人の外に善き者はなし。即ち神なり。』こは苛刻なる答の如くにして實は然らず。耶蘇は此の青年よりして『主よ、神の子よ』との尊稱を聽かんとせられしなり。而して其の『生命を得んために』との問を正して、その行爲に依つて得らるべきものにあらざるを示さんとて、『若し生命に入らんと欲せば誠を守るべし』と答へらる。行爲は生命の門に入るを得るのみ。生命の堂奥に進むは只信仰の力による。青年は問ふ、『誠とは何ぞ。』耶蘇曰く、『殺す勿れ、姦淫する勿れ、盜む勿れ、妄りの證を立つる勿れ、爾の父と母とを敬へ、又己れの如く爾の隣人を愛すべし。』耶蘇は此の誠を根本的に解せらる。『女を見て色情を起す者は其の衷心既に姦淫したるなり。』との語は耶蘇の解釋の一般を示せり。然るに青年の誠を解するや、淺薄なり。皮相なり。パリサイ的にてありき。彼は斯かる容易なること、言はぬ許りに『これ皆わが稚き時より守れるものなり。何の虧たる所われにあるか。』こゝに於て耶蘇は青年の心の眞只



中に衝入りて、その病根を披瀝せらる。曰く、『全からん事を欲せば、往きて爾の所有物を賣りて貧しき者に施せ、さすれば天に於て財あらん、而して來り十字架を操りて我に従へ。』この世の財を貧者に施すは、天に財を貯へんためなり。然れ共そのみにては永生を得るに足らず。十字架を操りて耶蘇に従はんことこそ生命を全うする秘鑰なれ。これを聽ける青年の心や如何に、彼の産業は大なり。生れてより富有の身、何ぞ其の境涯を超脱するを得んや。地の財に拘泥せる彼の心、俗臭甚々たり。『彼の言を聽きて憂へて去りぬ。』一言沈痛、彼は永生を得ざりしのみならず、この世の名譽をも失へり。青年の名は永遠に没して吾人の知る能はざる所。春秋に富み、學ぶ所大に、天の賦性豊かなりし青年、必ずや神國建設の勇者として名聲を不朽に垂れしならんに、惜むべし。彼は蠹くひ鏽くさる地の財を失ふを恐れて、『憂へて去りぬ。』詩聖ダンテは之を呼んで『大なる拒絶』といへり。詩聖の悲しき嚴格なる想像は、此の青年の前途に従ひぬ。他界の限涯に於て、秋の木の葉の如く飛び來る無數の靈魂とは、變りやすき旗の翻へるに心なく従うて、天に拒けられ、地獄にも嫌はれ、神にも惡魔に

も一様に憎まれたる者の中に、この『卑怯にも大なる拒絶をなせる者の影』を見たりといふ。

青年は首項低れて去れり。耶蘇は弟子に向つて曰く、『誠に爾曹に告げん。富める者の天國に入るは難い。哉、その神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を穿るは却て易し。』こは弟子等の心に雷聲の如く響きぬ。驚いて問うて曰く、『さらば誰か救ひを受くべきや。』弟子等の心には尙ほ赫奕たる王位を耶蘇に擬せり。この世の富と榮華はその欲する所なり。然るに耶蘇の言や斯の如し。耶蘇は何を以て弟子等の勞苦に報ひんとするか。耶蘇は彼等の心を憫れまれぬ。『これ人には能はざる所なり。されど神には能はざる所なし。』

されど弟子等は耶蘇の此の答に満足する能はざりき。その答は茫漠として捕捉し難く想はれぬ。即ち常に代言人なるペテロは耶蘇に問うて曰く、『我儕一切を棄て爾に従へり。されば何をすべきか。』これ富める青年の爲し能はざる所を我等既になせり。さればこれに依つて何をすべきやと露はに其の報償を問へるなり。耶蘇は其の心を不便と想はれけん。彼等の心を満足せしめて曰

く、『我に従へる爾曹は世あらたまり、人の子榮光の位に坐する時、爾曹も十二の位に坐してイスラエルの十二の支派を鞠くべし。凡て我が名のために、家或は兄弟或は姉妹或は父或は母或は妻或は子或は田疇を棄つる者は百倍を受け、且つ限りなき生命を嗣がん。』

#### 第四節 葡萄園の工人の譬喩

耶蘇は尙ほ弟子等と語り、彼等を戒めて曰く、『されど多くの先なる者は後になり、後なる者は先になるべし。』その説明として例の如く譬喩を語らる。葡萄園の主人早曉町に往きて工人を雇ふ。これと一日賃金デナリ一枚の約束をなして彼等を園に遣はす。九時頃又街に出て徒に遊べる者を見て、爾曹に相當の賃錢を與ふる故、園に往けといふ。十二時と三時頃又斯くし、五時頃に至りて又斯の如くす。日暮るゝ時、主人は家宰をして先に來れる者にも後に來れる者にも同じくデナリ一枚を與へしむ。先に來れる者は不平に堪へやられて之を主人に訴ふ。主人曰く、『友よ我なんぢに不義をなさず、爾とデナリ一枚の約束をなせるにあらざるや、爾のものを取りて往け、我また此の後に至れる者にも爾の如

く拂ふべし。』神の愛は萬人平等に注ぐ。天國に於ても亦斯の如し。『後の者は先に、先の者は後になるべし。』この譬喩の要は、第一弟子等の傭人根性を正さんためなり。働いてそれに對する賃錢を得る、主人と工人との間に何等の恩義なし。何ぞ愛の親しみあるべしや。天國の律法は權利義務に依つて成立せず。實に愛の法なり。父子有親の關係に於ては報償を要求すべけんや。この譬喩は又弟子等の驕傲を矯めんためなり。耶蘇は『後なるもの』に望を囑されぬ。その世を逝りて後、保羅を起して最大なる使徒の權を賜はりしを見ずや。保羅は實に五時頃來りて工人となれるものと謂ふべし。

### 第十一章 ラザロの復活

耶蘇ヨルダンの外ベタニヤに在りし間に、他のベタニヤより消息は齎されぬ。ラザロは病めり。そを氣遣へる姉妹は之を耶蘇に知らして、その一言を得んと欲せり。耶蘇の一言の神秘なる靈藥なることは姉妹の既に見聞せる所なり。使者は姉妹の語を傳ふ。『主よ爾の愛する者病めり。』この消息は耶蘇の心を

動かせり。ラザロの病は神の攝理なるを認めらる。耶蘇は何事か己が靈力を發揮する事起りて、エルサレムに對する最後の顯照をなし、又弟子等の信仰を強固にせんものと欲せられぬ。この欲求は充たされしなり。『これは死ぬる病にあらず、神の榮よほのためなり、神の子をして之によりて榮を得しめんが爲めなり。』耶蘇は神の聖旨を悟れるものから、故意わざと出立を延ばすこと二日に及ばれぬ。その二日は姉妹の信仰には苛き試練にてありき。待ちに待てる主は來まざるなり。ラザロは遂に死す。使者の聽き來れる『死ぬる病にあらず』との耶蘇の語は甲斐なかりしなり。マルタ、マリアの信仰は此に於て搖さしか。彼等は『耶蘇の愛する所の者なり。』何ぞ然らん。冷刻に見ゆる耶蘇の態度には愛の深く、潜むことなかるべからずと、尙ほも耶蘇に縋る心を起せしならん。

聽て耶蘇は弟子等に命じ出發せんとす。指して行衛はユダヤなり。十二人は愕然たり。叫んで曰く、『師よ、ユダヤは近頃も石をもて爾を撃たんとせしに復彼處に往きたまふか。』耶蘇は靜かに答へぬ。『一日の中に十二時あるに非ずや。人もし日中歩まば躓くことなし。そはこの世の光を見るに因る。人もし夜歩ま

ば躓くべし。そは光その人に無き故なり。』こは明かに諺なり。トオマス、フウラアは曰く、『神の子供は父が此の世に爲さしむる事を有したまふ間は、決して死せず。』耶蘇は時至るまでは敵の爲す無さを知れり。然れども弟子等の心を安ずるため、事實を語りて曰く、『われらの友ラザロ寐ねたり。われ彼を醒いまさんために往くべし。』弟子等は曰く、『主よ、彼もし寝ねしならば癒ゆべし。』何ぞ主の力を、煩はすを要せん。彼等は他くまでも利己的なり。卑怯なり。耶蘇は之を悲しみ明らかに告げて曰く、『ラザロは死せり。爾曹をして信ぜしむるために、我彼處に在らざりしを悦ぶ。されど今彼處に往くべし。』弟子等は逡巡せり。されど耶蘇をして獨り往かしむるに忍びざるなり。雙兒のユダは常に憂悶すれど尙ほ大膽にして衷心耶蘇を愛する者なり。同僚の決心を促がして曰く、『我儕も亦往きて主と共に死ぬべし。』

ペタニヤの家庭は悲哀の谷底に沈めり。猶太の習慣として人死すれば親族朋友隣人は一週の間之を弔す。死後三日の間は魂魄再び還ることもあらんかと望み、毎日墓に詣づ。四日には凡ての望みは絶たれ、制へ難き悲哀の襲ひ來る

を慣ひとす。ラザロの家には弔者尠ならず。その善良静淑なりしことは衆人に愛せられ、エルサレムにも知己尠なからざりき。故に耶蘇と親しみしに係らず、有司等は其の姉妹を慰めんとて來れり。

第四日に耶蘇は來る。その報マルタに達す。マルタは忙ぎ出て迎へ、村外にて耶蘇に面す。泣いて曰く、『主よ此に在せしならば我が兄弟は死せざりしものを。』こは四日の間姉妹の感慨を吐露せるもの、而して姉妹はセイロの娘、ナインの寡婦の子になせる耶蘇の奇蹟を記憶せるものから、尙ほ微かなる望みを懷きしと見え、マルタは附言して曰く、『さりながら假令今にても爾が神に求むる所は神なんぢに賜ふと知る。』耶蘇の答は簡明なり。『爾の兄弟は甦るべし』マルタは之を最後の審判に於ける復活の意味に取れり。即ちマルタは耶蘇が所謂宗教的慰安を與へらるゝものと信ぜり。耶蘇はマルタの誤解を指摘して曰く、『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死するとも生くべし。我を信じて生くる者は永遠に死せざるべし。爾これを信ずるや。』この語に含まれし深遠なる意味はマルタの能く解する所に非ず。されど彼女は全心を以て耶蘇を愛

せり。答へて曰く、『主よ然り、爾は世に來るべき救世主神の子なりと我信ず。』マリアは家に在りて主の來れるをも知らず、泣き悲めり。マルタは急ぎ家に歸りて、有司等の嫉みを恐れて、マリアの耳に叫びぬ。『師來りて爾を呼びたまふ。マリアは躍るが如く起つて耶蘇の許に急げり。耶蘇は未だ村に入らず、尙ほマルタの迎へし所に留まれり。マリアは耶蘇の足下に伏し、潸然涙を垂れて曰く、『主よ、爾もし此處に在せしならば、我兄弟は死せざりしものを。』而して又語る能はざるなり。

慰問者はマリアの急ぎ家を出てしを見て、墳墓に往きて哭せんとするならんと想ひ、その後に從ひぬ。然るに彼等はマリアが耶蘇の足下に泣き沈めるを見出せり。一同皆同情の涙に暮れぬ。これを見たる耶蘇は、セイロの娘の場合の如く、『何ぞ騒ぎ且つ哭くや、死ぬるに非ず。只寢たるのみ』(馬可六)とは言はず、『心を慟まし身を慄はして、涕を流したまへり。』これセイロの娘には親密なる關係なく、ラザロは其の愛せる者なるに因るか。決して然らず、耶蘇はしかく偏せる愛を有したまはざるなり。耶蘇の心に深く立入つて、其の涕を流されし原

因を測らんか。そは己が愛するラザロが永劫の愁を得て、安らかに神の懷に容れられしに、姉妹の悲痛と又己が榮光を顯照するため、又この塵の世に引戻すの不憫なるを感ぜられしに因るべし。

慰問にとて來れる有司等は、耶蘇の泣きたまひしを見て、或は、『見よ、如何ばかり彼を愛する者ぞ』と言ふ者あり。或は嘲笑して、『昔者の目を啓きたる此の人は、彼を死ざらしむること能はざりしか』といふ。その嘲笑は耶蘇の耳に達せり。されど何等の痛痒を感じたまはず、只ラザロのために慟しみつゝ、墓に至る。墓は洞にて其の口の所には石を置けり、『石を除けよ』と耶蘇は命ず。マルタは亡き弟のいたましき狀を主に見するに忍びず、『主よ、彼は早や臭し、死にてより既に四日を経たり』といふ。耶蘇はマルタに言ふ、『爾もし信ぜば神の榮光を見んと我なんぢに言へるに非ずや』。耶蘇は死骸の既に腐れ初めしを知りて、その奇蹟を一層偉大ならしむるを得んと望めり。聽て石は除かれぬ。耶蘇は天を仰いで曰く、『父よ既に我に聽けり。我これを爾に謝す。我なんぢが恒に我に聽くことを知る。然るにわが斯く言ふは傍に立てる此の人々をして、爾の我を

遣はせしことを信ぜしめんためなり』。耶蘇は神秘なる力を有せるを自覺す。されど天の父に斯く祈りつゝ、而して墓に向つて大聲にて呼ぶ。『ラザロよ、出てよ』。死者は布にて手足をまかれ、面は手布にて包まれしまゝ、出て來れり。耶蘇は駭き奇しみて忙然たる人々に曰く、『彼を釋きて往かしめよ』。

是に於てか、耶蘇に就いて二様の見を有せる猶太の有司等は、益々自家の説を固執するに至りぬ。一方は進んで耶蘇を信じ、他方は其の魂の扉を一層堅く閉ざせり。而して馳せて珍事を祭司の長に告ぐ。集議所の議員は召集されぬ。互に言ひて曰く、『我儕いかにすべきや。この人多くの奇蹟をなせり。若し彼を此のままに棄て置かば、人みな彼を信ぜん。さらば羅馬人來りて我儕の地をも民をも奪ふべし』。彼等の恐懼は、衆皆耶蘇を救世主として仰がんか、内亂忽ち起りて、遂には羅馬人に蹂躙せらるゝを免れずと言ふにあり。議員は皆默然たり。聽て其の歳の祭司の長にしてサドカイ派なるカヤバは、徐ろに口を開いて曰く、『爾曹何をも知らず、又民のために一人死にて、國家滅びざるは我儕に益をなすことをも想はざるなり』。こは實にカヤバが耶蘇の國民のために犠牲の

死を遂ぐることを無意識に預言せるにてありき、耶蘇の死はイスラエルを救はんとするにありと、敵の口より想はず洩れしも面白し。

## 第十二章 エルサレムに出立

### 第一節 エフライムより

集議所の處決は耶蘇の戒心する所にてありき。若しヨルダンの彼岸ベタニヤに再び還らんか、捕手は其の後を追へるなるべし。即ち耶蘇は竊にエルサレムの北二十哩ベゼルの北東五哩に位せるエフライムの邑に志されぬ。そは小麦の産地なり。サマリアの國境に近きを以て、捕手來らんか、直ちにサマリアに避けて其の權外に出づるを得べし。又この邑は傳道の當初、耶蘇が悪魔の誘惑を受けし荒野に近し。されば死に赴くに先んじて、生涯の覺悟を定めし其の場所を再び見て、往時を忍ばんとせられしならん。

エフライムに滞在する幾日、待ちに待てる逾越の節は近づけり。即ち十二人を従へてエルサレムに向ふ。されど直線に猶太の荒野を横切らず、南東に進む

こと十二哩、エリコに近く通せる北よりの往還に出づ。エフライムより節に上る順禮者の團體は耶蘇の跡に従へり。聖都に上るに悦ばしき歌うたふは順禮者の慣習なれど、一行は黙して進めり。耶蘇は深き想に満たされて澗歩せり。王者の風は四邊を拂ふ。弟子は驚き、他の者は怖れを懷きぬ。

この旅行に於ける耶蘇の目的は死なり。見ずや、十字架は前途に立てるを。此に於て耶蘇は又十二人を傍に呼び、この行こそ、祭司の長と學者等は人の子を十字架につくるために異邦人に渡すべきことを告げ、而して人の子は第三日に甦るべきを以てす。十二人の頭腦は近くベタニヤに目撃せる奇蹟に奪はれてあり。されば全く耶蘇の語を解せず、今ぞ主が其の光榮を得て、救世主たる帝冠を戴く時こそ來たれと悦べり。

### 第二節 サロメと其の息子の野心

北方より通ずる往還にて、ガリラヤの順禮者の一行は耶蘇に結びつきぬ。その中にヤコブ、ヨハネの母サロメありき。ベタニヤに於ける奇蹟は廣く喧稱せられ、逸早くもカペナウムに達せり。今やサロメは二人の愛息に出會ひ、その奇

蹟の仔細を熱心に問へるなるべし。是に於てサロメは其の愛息のために大望を抱くに至りぬ。そは永く心に抑制せられし所にして、今や勃然として勢を得たるならん。而してそは母の大望のみにあらずして、實は息子二人の希望たり。十二人が天國に於て最大なる者は誰ぞと議論するや久し。この兄弟とペテロの三人は耶蘇の最も信頼する所、救世主の左右に坐すべきは三人の中ならざる可らず。さればサロメにとりては、ペテロこそ我が二人の愛息の競争者とこそ想はれぬ。若し此の競争者に勝たんとせんか、エルサレムに入らざる前、今ぞ其の時と想はれたり。されど十二人は斯かる野心を耶蘇の前に披瀝する能はざりき。この世の望を口はす時、耶蘇が常に嚴然之を拒けられしは彼等の記憶に鮮かなり。ペテロの如きは白眼以て、「サタンよ、後に退け」と叱咤されしにあらずや。されどサロメは斯かる事あらんとは知らず、盲者蛇に怯ぢざる如く、耶蘇の側に近づきぬ。サロメの手段は巧妙を極む。自ら口を開かずして、願ふ心を素振に現はせり。こは慧しき婦人の特徴にてやあらん。耶蘇その状を見て問うて曰く、「何を欲するや」。サロメは假面を脱せり。肉體に於ては耶蘇の叔母なり。言

くもありしならん。曰く、「この二人の我が子を爾の國に於て一人は爾の右に一人は爾の左に坐ることを命ぜよ。」語るはサロメなり。されど彼女は息子の代言人たり。耶蘇はこれを聴き、怒らずして悲しみぬ。あゝ彼等は尙ほかゝる世心を有てるや。曰く、「爾曹は求むる所を知らず、爾曹はわが飲まんとする杯を飲み、又わが受けんとするバプテスマを受け得るや。」こは二人の兄弟に語るゝなり。彼等は耶蘇が斯く問はれしに重荷を下せる如く心軽く覺えて、「能くすべし」と答ふ。想ふに彼等の心、耶蘇エルサレムに往きて王位に即かんとするもそは争擾なしに得らるべきものならずと想へり。今や「わが杯を飲み」云々との語に接し、こは取も直さず激甚なる争擾に堪へ得る勇氣ありやとの意ならんと想へり。されど豈に計らん、耶蘇の目的は王位にあらず、十字架なり。十字架の左右に同じく懸けらるゝ勇氣ありやとの事なり。あゝ此の間に「能くすべし」との答を發するは、今の兄弟には到底能はざるを知らずや。

耶蘇は其の答の祥雲の如きを覺ふれど、そを咎めんとせず。「誠に爾曹はわが杯を飲み、又わがバプテスマを受くべし、されど我が左右に坐るは、わが與

ふべきに非ず、只わが父に備へられたる者は與へらるべし。』使徒等は天の王國を描くに此の世の腐敗せる王國の型を以てし、その權勢は寵臣に與へらるべしとなす。耶蘇は想へらく、そは賜物にあらず、報償なり。力を角して最も優勝なる者に褒賞の與へらるゝ如し、神の國の權威も亦靈の力によつて受くるを得べし。この理は兄弟の一人ヨハネの後年深く悟れる所、即ち記して曰く、我先に勝を得てわが父と偕にその寶座（ヨハネ）に坐する如く、勝を得る者には我が寶座（ヨハネ）に坐することを許さん（ヨハネ）。小人の使徒は兄弟に語られし此の語を聽きて憤懣に堪へざるなり。ペテロは殊に然りしならん。是に於て耶蘇は又た神の王國の根本的法則を語られぬ、こは一度嬰兒を前に措きて實物教育を爲されしことあり。この時再び語つて曰く、『異邦の領主は其の民を治め、俊れし者共は政權を執る。これ爾曹の知る所なり。されど爾曹の中にては然すべからず、爾曹の中大ならんと欲する者は爾曹に役（ヨハネ）はるゝ者となるべし。又爾曹の中首たらんと欲する者は爾曹の僕となるべし。斯の如く人の子の來るも人を役ふためには非ず、却て人に役はれ又多くの人に代りて生命を與へ、その贖（ヨハネ）ひとならんた

めなり。』贖罪の原理は此の裡に包含せらるゝなり。

### 第三節 エリコの門にて

耶蘇の一行は進みてエリコに達す。そはヘロデの建築の成功せる一つにして、劇場競馬場などを有し外観甚だ壯麗なり。耶蘇は多くの群衆と共にエリコの間（ヨハネ）に近けり。忽ち聲あり。耶蘇の耳に達す。そは門の側に坐して施物を乞へるバルテマイといふ盲人より來る。順禮者の群が續々エルサレムに往く時こそ、乞食にとりて最も豊かなる期節なりしならめ。この盲人は今多くの人の喧騒せるを聽き、何事にやと尋ね、ナザレの耶蘇の將に過ぎんとするを知れり。施物より尙ほ優れる賜物を受けんとする希望は胸裡に湧く。即ち聲高く叫んで曰く、『ダビテの裔耶蘇よ、我を憐れみたまへ。』ベタニヤの奇蹟は乞丐の盲人の耳にまで達せり。さてこそ此の救世的尊稱を以て耶蘇を呼ばはれるなり。耶蘇の先驅者は黙せよと盲人を叱せり。されど尙ほ叫べり。『ダビテの裔よ、我を憐れみたまへ。』耶蘇は哀れなる其の聲に心動き、彼を連れ來れと命ず。人々は盲人の許に來りて言ふ。『勇んで起てよ、彼なんぢを呼ぶ。』盲人は欣然として



從へり。穢れし上衣を投げ捨て、惠深き聲の來れる方に進む。耶蘇は問うて曰く、『爾われに何を欲するや。』盲人は曰く、『大なる主よ、われ見えんことを願ふ。』耶蘇曰く、『往け爾の信仰なんぢを救へり。』視力は直ちに盲人に還る。バルテマイは愛に輝く耶蘇の聖顔を目のあたり見るを得たり、讚美の隊に加はりて耶蘇に隨行す。

#### 第四節 税吏ザアカイ

耶蘇エリコの町に入れば、群衆益々至る。日は没しぬ。旅人はエリコに留まらざるべからず。エルサレムには尙ほ十五哩あり、その途は所謂血の坂にて山賊出沒して危険なるのみならず、明日は安息日なり。然れば其の夜六時は安息日の初めなり。耶蘇は何處にか宿を求めんとて街を行けり。エリコは祭司の町といはる。されど祭司は耶蘇の敵なり。彼を歡待すべくもあらず。

エリコは豊饒の町なり。海より低きこと八百二十尺の平野に位し、棕櫚と拔爾撒謨の藪蒼たる森に圍まる。益々増大する其の収入は、税吏の跋扈を來せり。税吏の重なる一人にザアカイといふ者あり。人々の憎惡を受くれど家甚だ富

めり。而して其の心は善に向つて開け、子供らしき好奇の念強し。彼は耶蘇の大なる奇蹟を聴き、面のあたり驚くべき預言者を見んと欲しぬ。今や大勢の群衆に圍まれて耶蘇は來れり。ザアカイも亦群衆の中に交はり、耶蘇に近づき、その面を見ると同時に、耶蘇の一瞥を辱けなうせんと想へり。されど彼の努力は無益なりき。群衆は彼を知る。税吏の彼等の中に交れるこそ、稀なる好機會なれ。彼が前に出てんとするや、嘲笑と凌辱を浴せて之を妨げぬ。ザアカイは到底耶蘇に近づき難きを感じぬ。されど彼と耶蘇とは數歩の隔てに過ず。豈に耶蘇を見ずして止むべきや。然れども彼は丈低し、群衆の後にては到底望みを達すべくもなし。如何になさばや。思案は巧妙なる手段を生めり。耶蘇は町を過ぎて南門に近づけり。門外に枝を路に擴げて蒼鬱たる桑の樹立てり。ザアカイは突進みて其の樹に登る。見よ、行列は一瞬の裡に集まり來る。彼は耶蘇を見たり。耶蘇は彼を見たり。樹を仰ぎ見し耶蘇はザアカイの逆境と其の清く邪氣なき心を察せられぬ。叫んで曰く、『ザアカイよ、急ぎ下れ、われ今日必ず爾の家に住らん。』六時は過ぎぬ。安息日は初まれり。耶蘇は税吏の屋根の下に安息日を守らんとす。

驚愕は二重なりき。第一ザアカイの吃驚なり。彼は「税吏罪ある者の友」なる耶蘇が見己れを憫れまんことを欲せり。然るに耶蘇の爲せる所は其の希望に超絶せり。耶蘇は彼の名を呼び、そのエリコに來れるは彼の家に宿らんとためなる如く語り。こは奇想天外より落つる如くザアカイに感ぜられぬ。彼は樹よりすべり下りて、歡迎の準備にとて家に急ぎ往けり。而して第二の吃驚は又居合はせし群衆を襲へり。耶蘇が世の除者（のりもの）に語を懸けしのみならず、その穢れし家に宿らんとは、如何に奇怪なる出來事にてありけるよ。彼等は啞然として税吏の家まで耶蘇に従へり。そは大なる邸宅にてありしならん。ザアカイは敵視せる市民より遙に離れて、町の壁外に居を構へり。耶蘇は先づ其の家に入らんとす。ザアカイ其の後に次ぐ。これを見たる衆人は譏いて曰く、

『彼は往きて罪ある人の客となれり。』その聲はザアカイの耳に達す。彼は嘲弄せる人々を眺め、又耶蘇を仰ぎ見て、叫んで曰く、『見よ、わが財産の半ばを、主よ、貧しき者に施さん。若しわれ誣（し）たる訟をなして人より取りたる所あらば四倍にして之を償ふべし。』そは群衆に對する應答たると同時に、主に對する誓言

なり。決然たるザアカイの態度や大に嘉すべし。これぞ彼が新生涯に入る首途と知られける。律法は貧者に五分の一を施せと命ず。然るに彼は二分の一を誓へり。誣たる訟をなせる時は、收納せし物に五分の一を増して返せといふ。然るに彼は四倍を償はんとす。是に於てザアカイは既に新しく生れし人なり。耶蘇の心は大に悦ぶ。曰く、『今日この家は救はるゝを得たり。そは此の人もアブラハムの裔なればなり。』その信仰は彼を救へり。信仰を有する者はアブラハムの裔なり。耶蘇の悦ばれしも理なるかな。『それ人の子は喪はれし者を尋ねて、之を救はんとために來れり。』ザアカイの救ひに依つて、耶蘇の心は甚だ満足を感じぬ。

この時過されし安息日こそ、耶蘇が地上にて守られし最後のものなれ。されどそは歴史より没せられぬ。税吏に就いては以後記載なし。耶蘇は人々の心を知り、此の時又譬を語られぬ。そはエルサレムに近ければ、衆人神の國は直ちに實現せらるべしとの謬想を懐けるを説破せんとせられぬ。凡そ三十年以前、ヘロデ王死して、猶太の王位を子アルケラウスに讓る。アルケラウスは皇帝の勅

定せる尊稱を受けんとて羅馬に往けり。その不在中猶太の使者羅馬に往きてヘロデの非行を數へ、國民は直接に羅馬の支配を受けんと望めることを陳述せしことあり。この事件より聯想して、耶蘇は一人の貴人あり、領地を受けんとて遙かに旅せしが、出立に際して十人の僕を呼び、金十斤を渡して商ひせよと命ぜしことを語られぬ。然るに市民はその貴人を憎み、使者を遣はして、その主たるを肯んぜざることを訴ふ。貴人は還りて金を託せる僕等を召し、手布に包みて其の託せし金を藏し置ける者を責め、最も多く利を得たる者に其の託せる金を與へ、又徒黨を謀れる者を誅せり。

貴人は耶蘇なり。衆人の有せる幻惑を齏らさんと此の譬を語られぬ。彼等は近き將來に來らんとする報償と榮光とを夢む。されど耶蘇は遠國に旅せざるべからず。一日大なる榮光を持つて還り、大なる權力を以て此の世を支配すべし。然れ共その間に永き時は過ぎ去るべし。耶蘇は往くに先んじて、信仰を彼等に託す。十倍にも二十倍にも託されし信仰を發展する者は、耶蘇の報償を受くること多し。されど信仰を手布よこぬいに包みて置く者は叱責せらるべし。實に「有て

る者は與へられ、有たぬ者は其の有てる者をも取らるべし。』彼等の本分は榮光と名譽にあらず、勞働と責任これなり。

#### 第五節 ベタニヤを過ぐ

安息日終れる時一行は出立す。血の坂を過ぎて、ベタニヤに達す。盛んなる歡迎は彼を待てり。集議所は耶蘇の死を宣し、賞を懸けて其の居所を探れり。されど先週爲されたる奇蹟はベタニヤを驚せり。有司等の憎惡を顧みず、非常なる尊敬を以て耶蘇を待遇す。邑の重立てる者の一人は饗筵を設けて耶蘇を招く。その人はシモンといふ。他のシモンと分たため癩病者といふ形容詞を冠せらる。彼は嘗て此のいまはしき病の人なりしが、耶蘇に癒されしならん。邑の人々多く來りて饗宴を助く。マルタも接待役なり。復活せるラザロも食卓に坐せり。マリアは如何。彼女も亦接待役として饗宴に侍せり。彼女は其の兄弟の復活に就いて感恩の情胸に満てり。主に對する愛と尊敬とは表象せんやうもなし。然れ共如何にかして己が心の至誠まことを現はさんと努めぬ。マリアは價高き香膏の盒びんを携へ來れり。饗宴酣なる時、耶蘇の側に近づけり。貴賓の首に香膏をそへ

ぐは當時の慣禮なり。マリアは耶蘇の首に其の膏を掛けるのみならず、その足に之を塗り、膏の香は偏く室内に満つ。優雅静淑の處女にして衆人稠坐の前に斯かる振舞を敢てす。げに愛は羞耻を滅するものなり。

滿堂愕然。互に叫けり。マリアに怒を含める者あり。この衆情を代言せるはケリオスの人ユダなりき。彼は使徒中の財政掛たり。而して其の怒れるはマリアの穩かならざる振舞に就いてにあらず。實に其の費を吝みてなりき。曰く、「この香膏を何ぞ銀三百に售りて貧しき者に施さざるや。」その功利的思想や、實に唾棄すべし。然れども耶蘇の眼には、マリアの振舞は實に「美しき行」にてありき。マグダラのマリアは悔改めたる魂もて先に斯かる行をなせり。今またベタニヤのマリアは感恩の情をもて之をなす。想ふにベタニヤのマリアはマグダラのマリアがなせる所を聴き、こゝに之を倣へるならんか。マリアの柔しき手は耶蘇を葬らんとために之に膏をそゝげる如く、身えしなり。即ち曰く、「何ぞ此の婦を惱ますや。こはわが葬禮のためなり。貧しき者は常に爾曹と借にあれど、我は常に爾曹と借に在らず。」而して尙ほ約束の大なる語を附言して曰

く、「われ爾曹に告げん、天の下いづくにても此の福音の宣へ傳へらるゝ處には、この婦のなせし事も其の記念のために云ひ傳へらるべし。」こは實にマリアにとりて大なる報償なりき。このマリア若しマグダラのマリアと同人ならば、斯かる附言は爲されざりしならん。(馬太と馬可はマリアが膏を只耶蘇の首に敷く如く記す。今これを折衷して首にも足にも塗れるものとす。然れども約が姉妹の特徵なりとせば先のマグダラのマリアの譯と此の譯とを混同せしにあらざるか。)

### 第十三章 エルサレムに入る

#### 第一節 凱旋のホザナ

ラザロの復活は耶蘇の名聲を冲天に擧ぐ、踰越の節に来れる順禮者は口より口に之を傳ふ。耶蘇の節に来らんことは衆人の頸を長くして待望する所なりき。既にしてエリコより來れる順禮者は耶蘇の來るを風評せり。且つ復活せるラザロを見んとてベタニヤに赴ける人々は、耶蘇の明日エルサレムに入らんとせるを告ぐ。有志等の激怒は一層増せり。ラザロを死に處せんと決す。そは

ラザロの事より耶蘇を信ずる者益々加はらんことを慮れるなり。翌日こそ聖都には入るなれ。耶蘇は最後の思出に其の方法を講ぜられぬ。日本武士の死せんとするや、香を胃にたくと同じく、耶蘇の詩的情緒は斯かる際にこそ、いみじくも現はれぬ。耶蘇は衆目の前に救世主たる尊嚴を示さんと考へられぬ。教師によりて常に論ぜらるゝ預言あり。そは當時人口に膾炙せし語なり。「シオンの女よ、大に悦べ、エルサレムの女よ呼ばはれ、視よ汝の王は来る。彼は義しくして救ひを賜はり、柔和にして驢馬に乗る。即ち牝驢馬の子なる駒に乗るなり。」猶太地方にて驢馬は美しき動物なり。之に眞珠と銀を鑲たる鞍を置かんか、いと壯麗に見られぬ。往古より、偉人は驢馬に乘れり。イ、スラエルの士師ギレアデのセイルの子三十人あり。三十の驢馬に乘れり(士四十)。王者は戰場には馬に乘り、平和の傳令をなす時には驢馬に乘れり。往古の神託によれば、シオンの王者は平和の君なる故に驢馬に乘りて来るなり。この預言は耶蘇に依つて實現されんとす。

ベタニヤに近く、小山の崖にベスページベスページの村あり。耶蘇は其の村に知人を有

せり。恐らく無花果、棕櫚、橄欖を栽培せる園丁なりしならん。耶蘇はエルサレムに至るの途次、この村に入らんとす。即ち二人の弟子に向つて先づ村に入り、繋ぎたる驢馬の其の子と偕に在るに遇はゞ、それを解きて我に牽き來れと命ず。而して若し爾曹に其の理を聽かんとする者あらば、「主の用なり」と言ふべし。然らば直ちに之を遣はさんと附言す。弟子は耶蘇の命ぜし如くなし、驢馬とその子を牽き來り、己が衣をその上に置けり。耶蘇はこれに跨りてエルサレムに向ふ。群衆は都の郊外に耶蘇を迎ふ。驢馬に跨れる耶蘇の状いかに威風堂々たるよ。喝采鳴を止めず。往古の預言に應じて聖都に近づく救世主を見ずや。今に初めて渴望せる王者の行幸に會す。彼等群衆は己が衣を脱して、或は棕櫚の樹の枝を伐りて路に布けり。斯かる凱旋の表象を以て、耶蘇を護衛す。既にして橄欖山の西の半腹に來れる時、忽ち歡呼の聲は起る。

ダビデの裔ホザナよ

福ひなるかな主の名によりて來る者よ。

いと高きところにホザナよ。

前より後より斯かる讚美は高く天に揚れり。實にそは帝王の凱旋にてありき。然れども又こは歎呼の絶頂にてありき。時ならぬ暴風は雲を集めり。パリサイの人は群衆の中より進み出てぬ。耶蘇に對して、「師よ、爾の弟子を戒めよ」といふ。耶蘇は答へて曰く、「我なんぢらに告げん、この聲もし黙しなば、石叫ぶべし。」されど耶蘇は胸中「ホザナよ」と讚する其の口こそ、數日を経ば、「十字架に釘けよ」と叫ぶに至らんことを明察してあられき。即ち橄欖山より聖都の日光に燦めくを瞰視して悵然その哀情を洩らされぬ。「若し爾だにも今この爾の日に於て、爾の平安にかゝはれる事を知らば、福なるに、そは今爾の目に隠れたる、爾の敵なんぢの周りに壘を築き、四方より圍み攻め、爾とその中なる兒女を撃滅し、石をも石の上に遺さざる日來らん。これ爾その願りみたまふ時を知らざればなり。」これより凡そ四十年チヌスの軍聖都を破壊せる時、この預言は適中す。

群衆は門に至る。都城舉りて地震の如く震ふ。「こは誰ぞや」と問ふ。従ひ來れる群衆は應ふ。「こはガリラヤのナザレより出てたる預言者耶蘇なり。ラザロ

を墓より甦らせし者なり。」パリサイの人は切齒して憤激す。互に願みて曰く、「爾曹の謀る所、益なきを知らずや。見よ、世は皆彼に従へり。」

その日耶蘇は何をも爲さざりき。心情は重く沈めり。暫く憩はんことを欲する念は襲ひ來れり。王者の行幸は堪へ難くなりぬ。そは凱旋の入來と稱せらるれど、實は謙遜の入來にてありき。群衆は樂しめども、耶蘇は悦ばず、その心は神の前に最も謙れるなりき。

## 第二節 貧しき寡婦

耶蘇は其の日直ちに神殿に詣らる。神殿の庭には人群集す。耶蘇は細心に四邊を見廻す。聽て賽錢箱と相對する處に休息して、禮拜者の喇叭の内に金を投ずるを見る。貧しき寡婦あり、レツタ二枚を捧ぐ。こはデナリの六分の一なるアスサリオンの四分の一なれば、甚だ小額なり。又富める者あり、多くの金を箱に投ず。想ふに前の寡婦は耶蘇の知れる者ならん。惱める者は常に耶蘇に引着けらる。寡婦も亦嘗て耶蘇の祝福を受けしことありしならん。今耶蘇はこれを見て弟子を願みて曰く、「われ誠に爾曹に告げん、この貧しき寡婦は凡ての人よ

りも多く捧げたり。そは彼等は皆その剩餘ある所より捐輸を神に捧げ、此の婦は窮乏ところより其の所有を悉く捧げたればなり。』

### 第三節 果實なき無花果樹

黄昏に耶蘇は都を出て、橄欖山の坂に退かれぬ。されどベタニヤの村に還らず。山麓にあるゲツセマネの園にて最後まで來らん夜を過さんとす。青きシリアの天空を戴いて、橄欖の樹下蔭を假の宿所と定められぬ。翌る曉又エルサレムに赴かる。途上彼方に無花果の樹あり。葉生ひ繁れり。耶蘇は空腹を感ずるものから、果實あらんかと望まれぬ。葉の出づる前に實を結ぶは無花果樹の特色なるを以て葉の繁れるは果實のある證となすべし。されどそは無花果の季節にあらず。この樹は地味肥え位置善かりしたためか、その實は早く既に熟し了るなりき。されば耶蘇近づけば只葉繁るのみにて果あるなし。待望は空しく、葉は繁りて、しかも實なし。耶蘇は此の無花果樹のイスラエルにさも似たるを想はれぬ。さればイスラエルの運命を警告されし如く、又この無花果樹の最後を宣告す。今より後誰も爾の果を食ふべからず。』こはイスラエルに取りて活ける

實際の比喩と見るべし。

無花果の樹の下を去つて、耶蘇は十二人と都に入り、神殿の庭に群衆を教ふ。盲者跛者など群り來りて癒されんことを乞ふ。狂熱の無盡藏、讚美は各人の口より發す。重に至るまで歡呼の聲に應じて、『ダビデの裔ホザナよ』と叫ぶ。有司等は無念骨髓に徹すれども、未だ如何ともする能はず。只耶蘇を責めて曰く、『爾かれらの言ふことを聽くや。』耶蘇は從容答へて曰く、『然り、爾は未だ讀まざるや。嬰兒乳哺者の口より讚美は發すと記さるゝにあらずや。』(詩八)夕暮は近づきぬ。耶蘇は默然たる敵を後にして、園に還る。

## 第十四章 有司との衝突

### 第一節 破邪の譬喩

翌朝又エルサレムの途にて、無花果樹の前を過ぐ。見よ既に枯れしにあらずや。弟子等は甚だ驚けり。ペテロは叫んで曰く、『師よ、見たまへ、爾の呪へる無花果樹は枯れたり。』彼等は何故驚けるぞ、主の語空しく地に落ちしことあらざ

るにあらずや。耶蘇答へて曰く、『我まことに爾曹に告げん。信仰ありて疑はずんば、この無花果樹のみにあらず。この山に命じて、こゝより移りて海に入れと云ふとも亦成るべし。爾曹信じて祈らば、願ふところ悉く得べし。』

エルサレムに至り、又神殿の庭にて教ふ。有司等は其處に來り、倨傲なる態度にて耶蘇の語を遮ぎる。『何の權威もて爾は此の事を爲すや。この權威を誰が爾に與へしや。』この問は二重の係蹄なり。一面には自己の職權を示して群衆の心に印象せんとし、他面には耶蘇の口よりして其の救世主たること、嘗て其の公言せし如く、彼と父と一なりとの主張を尙ほ一度言はしめて之を捕へんとするなり。されど耶蘇は斯かる係蹄に陥る者にあらず。逆に問うて曰く、『我も一言なんぢらに問はん。余に答へよ。然らば我も何の權威をもて之をなすかを告げん。ヨハネのバプテスマ……そは天よりか人よるか。』彼等は默然たり。若し人よると言はんか。群衆はヨハネを預言者と信ずれば如何なる争擾を起すやも測り難し。若し天よると言はんか。ヨハネは耶蘇の救世主たることを絶叫せるにあらずや。逡巡せる彼等は遂に『知らず』と答ふ。耶蘇も直ちに答へ

て曰く、『我も何の權威をもて之をなすか。爾曹に語らじ。』こは論理の上乗なるものにあらずや。

耶蘇は尙ほ譬喩を語りて潰亂せる敵を追窮す。『爾曹いかに想ふや。』或人二子あり。長子に告げて、子よ今日葡萄園に往きて働けといふ。長子は否と答へしが、悔いて往けり。又次男に斯く告げしに君よ我往くべしと答へしが、遂に往かざりき。耶蘇問うて曰く、『この二人の者何れか父の旨に遵ひしぞ。』彼等は自ら己れを宣告するとは悟らず、『長子なり』と答ふ。何ぞ知らん、この長子こそ、社會の除外者を現はし、所謂『口にて神をほめ、心には神に遠かる』次子こそ、彼等猶太人を指せるなるを。耶蘇は彼等の愚を可笑しく思ひつゝ、告げて曰く、『誠に爾曹に告ぐ。税吏又遊女は爾曹より先に神の國に入るべし。それヨハネは義しき道をもて來りしに爾曹これを信ぜず。税吏遊女は之を信ぜり。爾曹これを見て尙ほ悔改めず。彼を信ぜざりき。』

耶蘇は攻撃者を粉碎して、群衆に向ひ、再び之に教ふ。有司等は尙ほ彼の周圍を彷徨して、その言を聽かんとす。耶蘇は又た譬喩を語る。直接有司等に語らず



とも深く彼等に關係する所なり。地主あり、葡萄園を造り、籬を環らし、その中に酒榨をほり、塔を建て、之を農夫に貸して他の國に往けり。生熟期とはなりぬ。僕を遣はして葡萄を收めしむ。農夫ども其の僕等を捕へ、一人を鞭ち、一人を殺し、一人を石にて撃てり。又他の僕を前よりも多く遣はせしに、農夫等また之を殺す。依つて遂に我が子ならば敬ふならんと思ひて、その子を遣はせり。然るに農夫等その子を見て、互に曰く、『これは嗣子なり。いざ之を殺して其の産を奪はん。』即ち其の子を捕へて葡萄園より逐出して殺せり。耶蘇曰く、『然らば葡萄園の主人來らん時この農夫に何を爲すべきか。』群衆は此の譚に非常なる感興を覺えて叫びぬ、『これ等の悪人を悉く滅ぼし、生熟期には果を納むる他の農夫に葡萄園を貸し與へん。』群衆は譚の真意を悟らず。されど有司等は之を解す。僕等は歴代の預言者にて、嗣子は耶蘇自らを指せるを知る。群衆の思慮なき答は實にイスラエルの罪惡の告白なり。故に有司等は抗議して曰く、『斯かること勿れ』(路加廿六)。

耶蘇は抗議せし人々を顧み、驚きの眼もて凝視し、彼等の心の秘密を讀まん

とす。問うて曰く、『匠人の棄てたる石、これを家の隅の首石となれり。これ主のなしたまへることにて我儕の目の奇しとする所なりと記されしを讀まざるか。』こは詩の百十八篇の齣にして、イスラエル民族追放時代の作なり。禮拜者は大なる節筵の折、この歌を唱ひて回復されし神殿に詣てしなりき。禮拜者の神殿に入れる時、門の側に棄てられたる石を見る。そは古き神殿の楣なりしならん。そは神殿改築の際、匠人に必要なるものとして棄てらる。されど祭司等は聖なる記念として在來の場所にそれを置き、詩篇の作者は其の石を以てイスラエルに對する神の恩寵を歌へり。然るに耶蘇はそを以てイスラエルの恩寵を拒絶せる譬喩に用ひらる。『これ故に我爾曹に告げん、神の國を爾曹より奪ひ、その果を結ぶ民に與へらるべし。』

## 第二節 姦淫せる婦に就いて

有司等は激怒す。耶蘇を捕へんとすれば、狂熱せる群衆に妨げらる。空しく手を拱いて一度耶蘇の許を去りしかど、尙ほ其の殺意を棄てず。如何にせばやと首を鳩めて協議す。時恰かも姦淫せる時捕はれし婦あり。彼等は手を拍ちて

悦びぬ。耶蘇の罪人に親切なるは其の知る所、必ずや律法に背ける審判をなすならんと思へり。この事件は律法の註解者、正統派の勇將たるパリサイ人に委ぬ。『税吏遊女は爾曹の前に神の國に入るべし』との語は尙ほ耳底に喧しく響けり。即ち味爽耶蘇の神殿にて教を爲せる時、不義の婦を曳いて衆人押し來る。好奇の眼、貪慾の耳もて耶蘇を圍む。曰く、『師よ、この婦は姦淫を爲しをる時、そのまゝ執へられし者なり。此の如き者を石にて擊殺せとはモーセ律法の中に命ぜり。汝は如何に言ふや。』そは又巧妙なる係蹄なり。その豫想せる如く、律法に反せる宣告を下さんか、神を瀆す者として直ちに耶蘇を捕ふるを得べし。之に反し、律法の儘に審判せんか、耶蘇は在來の主張に背くを以て忽ち人望を失ふべし。マグダラのマリアは其の從者の一人にあらずや。然るに忽ち彼等の豫想は反しぬ。耶蘇は答へざるなり。姦淫の現行犯、婦にとりてこれ以上の耻辱あらんや。暗裡の罪惡を明處に晒して、少しも耻ぢざるのみならず、尙ほそれを種にして大なる惡謀を實現せんとす。その無情冷酷實にこゝに至るか。耶蘇は歌ながら慄然として、彼等のために耻かしく感ぜられぬ。即ち屈みて地に物書か

る。そは何を書かれしや、地は語らず、歴史も亦記す能はざるなり。斯くとは露知らぬ。彼等は頻に答を迫る。耶蘇は漸く其の情を抑へて、身を起しぬ。靜に曰く、『爾曹の中罪なき者あらば、先づ此の婦を石にて撃てよ。』而して又身を屈めて物書かる。彼等の状を見るに堪へざるなり。耶蘇の一言は、彼等の良心を貫けり。老人を初めとし、若者まで遁るが如く去りぬ。彼等は己が犯せる罪を感ぜるなり。き。残れるは耶蘇と婦のみ。慈悲の化身は可憐なる者に對す。問うて曰く、『婦よ、爾を訟へし者は何處へ往きしや。爾の罪を定むる者なきか。』婦は耶蘇の叱責を待てる如く、叫く、『主よ、誰もなし。』耶蘇は憐憫の眼もて婦を眺めて曰く、『我も爾の罪を定めず、往きて再び罪を犯す勿れ。』

### 第三節 貢物に就いて

耶蘇の敵は尙ほ他の係蹄を工夫す。聽てパリサイの弟子にて教法學校にて訓練せられたる青年及びヘロデの黨なるサドカイの人々、耶蘇の許に來る。恭謙の態度を示して曰く、『師よ、爾は眞正なる者なり。眞正を以て神の道を教ふ。又誰にも偏らざることを我儕は知る。そは外貌によりて人を取らざればなり。』

されば貢をカイザルに納むるは是か非か、爾如何に思ふや。我儕に告げよ。」こは最も巧妙なる係蹄なるかな。羅馬の輓は猶太人の重荷なり。征服者に貢を獻ずるは猶太人の自尊心を害するや甚だし。實に入貢の是非は當時識者の頭腦を悩ませる問題なり。いま彼等は耶蘇を見るに、彼はガリラヤ人なり。ガリラヤ人は常に羅馬に反抗の態度を取れり。而して耶蘇の弟子には、ユダの徒黨に加はれる者もあり。されば必ず耶蘇は入貢を非とするならんと待望す。若し入貢を是とせんか。耶蘇は忽ち衆人の豫期に背くべし。見よ衆人は彼を救世主として崇敬す。救世主は異教徒の輓よりイヌラエルを救ふ者にあらずや。されば如何にしても耶蘇は入貢を是とする能はず。故にカイセルに貢を納むるは非なりと口にせんか。直ちに耶蘇を逮捕するを得べし。完全なる兩刀論法。これに勝るあらんや。如何にしても遁れ難く見えぬ。されど耶蘇の智慧は此のダイレンマの上に超脱せるを如何にせん。『偽善者よ何ぞ我を試むるや。貢の銀錢を我に見せよ』と言ふ。彼等デナリ一枚を耶蘇に渡す。それには皇帝の像あり。また

PI. CESAR DIVI AUG. F. AUGUSTUS PONTIF. MAXIMI と銘せらる。耶蘇曰く『この

像と銘は誰を表はすや。』『カイザルなり』と答ふ。耶蘇曰く、『さらばカイザルのはものはカイザルに歸し、神のものは神に歸すべし。』

#### 第四節 復活に就いて

蟻螂の斧をもて磐石を砕かんとするの可笑しさよ。入貢論の輩は耶蘇の答を奇として還り往く。次に來れるはサドカイの徒なり。彼等は復活論を擔ひ來る。パリサイ人の聖視せる神託はサドカイ派の拒む所。彼等は只成文法を認めり。又預言者とハギオグラフィ(舊約聖書の律法を記さる部分)を排して、サマリヤ人と同じく、モーセの書のみを採用す。殊に其の主張は復活を否定するにあり。こは復活の教理を重視するパリサイ派と論争の焦點たり。この輩は今や耶蘇に近づけるなり。『師よ、モーセは言へり、人もし子なくして死なば、兄弟その妻を娶りて子を生子、兄弟の後を嗣がすべしと』(申命記廿五ノ五)。彼等は一つの假定を設けぬ。兄弟七人あり、兄妻を娶りて子なくして死す。その妻は順次に弟に嫁せしが、皆子なくして死せり。然らば復活の時この婦は七人の中誰の妻となるべきや。』斯かる場合は不可能の想像なり。聖クリソストムは戯れて曰く、兄弟二人子な

くして死さば、その弟たる者は其の婦を不吉として之を娶るを欲せざりしならんと、然れども耶蘇は斯かる笑ふべき想像をも拒まず、それを以て見えざる神の國の眞理を闡明する手段となされぬ。曰く、「爾曹聖書をも神の力をも知らざる故に謬れり。」彼等の懷疑の原因は無知、而してその無知は二重なり。第一彼等は來るべき世を知らず、現世の型を以て之を測る。これ其の根本的誤謬に陥る所以。即ちそは神の力を知らざればなり。耶蘇教へて曰く、「それ甦るときは、娶らず嫁かず天にある神の使等の如し。」現世の縁を離れて、尙ほ一層聖淨なる縁は我等を結ぶ録して神その愛する者のために備へたまひしものは、目未だ見ず、耳未だ聞ず、人の心未だ思はざる者なりとあるが如し。(哥林前二九) 耶蘇は尙ほ進んで彼等の無知を指摘す。サドカイ派は信仰の則としてペンタツ一ク(舊約聖書の五卷)を固守す。然るに彼等は其の五卷をも充分に會得せざるなり。『死せし者の甦ることに就いては、神の爾曹に告げたまひし言に、我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なりとあるを未だ讀ざる乎。されば神は死にし者の神に非ず、生ける者の神なり。爾曹大に謬れり。』耶蘇は「爾曹大に謬れり」

との語に力を入れて、彼等の武器とせる聖書の句を以て、彼等を撃つ。人々その教を驚きぬ。「師よ、善く語りぬ」と叫ぶ者もありき。

#### 第五節 最高の誠に就いて

サドカイの人は敗れて遁ぐ。パリサイ派は如何なる場合にもサドカイの競争者なり。彼等は尙ほサドカイの爲し能はざりし處を成就せんと志して耶蘇に對す、教法師一人を選びて、律法論を以て耶蘇を挑む。教師等は律法に六百三十誠ありとなす。それに輕重を附せり。誠の輕重に就いては嚴格なるシヤムマイ派と寛大なるヒルレル派と論争絶え間なかりき。而して普通の解釋によれば死刑に當する誠を重しとせらる。割禮、酵たね、酵たねパンを食すること、安息日を守ること、犠牲、潔禮の如きはそれ。

今や耶蘇を惱まさんとて教法師は進めり。「師よ、律法の中何れの誠か大なるや。」耶蘇は直下に答へぬ。「凡ての誠の最も大なるは、イスラエルよ聽け。主なる我儕の神は即ち一つの主なり。爾心を盡し精神を盡し意を盡し力を盡して主なる爾の神を拜すべし。これ誠の首なり。第二もまたこれに同じ、己れの如

く爾の隣人を愛すべし。これより大なる誠なし。凡ての律法と預言者は此の二つの誠に懸れり。』この二つの誠は實に神に對し、人に對する當時の宗教觀を總括すべし。俄然耶蘇は教法に通曉せることに於ても當時比敵なきを示せり。耶蘇の語調その瞥見は深く、問者たる教法師の心を動かす。教法師は眞摯の人にてありき。彼はニコデモの如くパリサイの代表者として來りしかど、是を是とする赤心を有せり。その心は耶蘇の語に躍れり。見よ、パリサイの代表者たる彼は敵なる耶蘇に降り、パリサイ人は代表者の選出を謬れり。答へて曰く、『善いかな。師よ、なんぢ神は一にして他に神なしといふは眞理なり。又心を盡し智慧を盡し精神を盡し力を盡して之を愛し、又己れの如く隣人を愛するは、凡ての燔祭と禮物よりも優れり。』この答は耶蘇の心を悦ばす。孺子教ふべしとや思はれけん、『爾は神の國より遠からず』と稱揚せられぬ。

#### 第六節 ダビデの裔とダビデの主

連續せる抗論はこゝに終る。耶蘇は常に問者の想を超絶す。最早耶蘇を惱まさんと敢てする者なし。今や耶蘇は自ら攻撃の態度を占む。耶蘇は詩の第一百十

篇を引照す。こは不明の作者の手になるものにして、不明の王の必勝の剛勇を祝し、その勝利をエホバの助力に歸せり。而して其の王をば單に『主』と稱す。そはイスラエルの歴史中後代に屬し、その王は『メルキセデクの狀にて』王と祭司とを兼ねぬ。こは此の詩の明白なる意なり。然るに教師等は之を全く他の意味に説明す。作者の不明を嫌へる彼等は、凡てを大詩人のものとなさずんば止まず。故に作の年代をも考證せず、これをも『ダビデの歌』と稱し、詩中わが主と記されしは、イスラエルの救世主をさしてダビデの言へるなりとは教師等の解釋なり。これを熟知せる耶蘇は彼等を辱しめんとて問はれぬ。『爾曹救世主について如何に思ふや。そは誰の子なるや。』そは學識ある教師等に容易き問題なり。無造作に答ふ。『ダビデの裔なり。』耶蘇は破邪の辯を振はれぬ。『然らばダビデひたに感じて何故これを主と稱せしや。ダビデはいふ、主わが主に宣ふ、我なんぢの敵を爾の足臺あしだいとなすまで我が右に坐すべしと、ダビデ既に之を主と稱す。さらばいかて其の子ならんや。』

## 第十五章 森嚴なる宣告

論敵は沈黙す。耶蘇は最後に學者とパリサイの人の汚穢悖戾に對して凄切悲壯の宣告をなされぬ。激怒と憐憫は混然として發露し來る。そは骨を刺す諷刺を以て初まる。『學者とパリサイの人はモーセの位に坐す。故に凡て彼等が爾曹に言ふところを守りて行ふべし。されど彼等が行ふ所をなす勿れ。そは彼等は言ふのみにして行はざればなり。彼等は重くして負ひ難き荷を人の肩に括りて擔はせ、己れは一指だも動かすを好まず。』而して名譽に渴し、區々たる野心を逞うす。その佩經を廣くし、その裾を長くし、筵席の上座、會堂の高座を好み、街道を歩む時は鄭重なる挨拶を受け、『師よ、師よ』と尊敬せられんことを欲す。耶蘇は斯の如く彼等の肖像を描寫し來りて、一々その缺點を指摘せらる。

一、天國を閉づること、『あゝ、爾曹禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ。爾曹天國を人の前に閉ぢて自らも入らず、且つ入らんとする者の入るをも許さざるなり。』彼等は傳説を以て神の言を蔽ひ、虚偽の坭をもて生命の水を

塞ぐ。ヨハネは天國の路を拓かんとせしに、彼等之を殺す。今や亦耶蘇をも殺さんとす。

二、改宗を努むること。『あゝ、禍なるかな、偽善なる學者とパリサイの人よ。爾曹あまねく水陸を經めぐりて一人だも己が宗旨に引入れんとす。既に引入れば、これを爾曹に倍せる地獄の子となす。』實に彼等が人を導くや、その人の靈魂に就いて愛ふるにあらず、只己が宗派を盛んにせんとするなり。

三、正邪を決する標準。『禍なるかな、瞽者なる相よ。』耶蘇は彼等が正邪を決する標準を引き來りて、その邪曲を列れり。彼等は道德法を固守して、道德心を廢らす。彼等はいふ、『殿を指して誓ふも事なし、殿の黄金を指して誓はゞ背くべからず。祭の壇を指して誓ふも事なし。其上の禮物を指して誓はゞ背くべからず。又天を指して誓ふも事なし。神の寶位を指して誓はゞ背くべからず。』大は小を兼ねるにあらずや。殿と殿の黄金、祭壇と壇上の禮物、天と神の寶位、その間に何等の相違あるべき。『なんぢ愚にして瞽なる者よ。』

四、細に忠にして要を極んずること。『爾曹禍なるかな、偽善なる學者とパリ

サイの人よ。爾曹は薄荷、茴香、馬芹の十分の一を納む。』斯かる野菜の十分の一を納むるは小事に忠なる極點にあらずや。然れども彼等は律法の最も重きものなる、義と仁と信とを棄つ。これ極小を以て極大に代ふるなり。實に彼等は替なる相者なり。諺に所謂「蠅を流出して駱駝を呑む者」といふべし。

五、貪婪と淫亂。「禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よ。爾曹杯と盤の外を潔くして内には貪婪と淫欲とを充たせり。』彼等の貪婪なるや、『賄賂を悦び、臟財を追求め、孤兒を虐げ、寡婦の訟を取あぐることなし』(以賽三)而して其の胸には肉欲満てり。耶蘇は彼等の心の秘密を讀めり。而して例を他に索むる要なし。教法文學を繕かば耶蘇の判斷の正しきを解せん。教師シメオンは美女を見るを好み、その美に動かされて神を讚するを得たりき。教師ギタル及び教師ヨカナンは婦人の浴場に坐する習慣を有せり。その猥雜なるを批難せられし時、ヨカナンは答へて『われは色欲の奴たらざりしヨセフの裔なり。』と言ひしとぞ。

六、外は美しく内は穢なし。『爾曹禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よ。爾曹は白く塗りたる墓に似たり。外は美しく見ゆれども、内は骸骨とさまざまの汚穢に満つ。』猶太の墓は人の過つてそれに躓き穢れんことを恐れて、白く塗らる。されば遙かに立てる癩病者の如く、『穢れたるもの！穢れたるもの！』と叫ぶが如く、炳然として立てり。雨季には泥に汚さるゝを以て逾越の節の前には、塗り更へらるゝを常とす。誠に耶蘇の言へる如く、エルサレムの周圍には、外は美しく内は穢れし墓多く立てり。實にそは『外は義しく見ゆれども、内は偽善と不法に充つる』パリサイ人に似たり。

七、預言者の血の罪。聯想は墓よりして最後の恐ろしき宣告を齎す。『爾曹禍なるかな偽善なる學者とパリサイの人よ。爾曹預言者の墓を建て、義人の碑を飾れり。而して言ふ。我儕もし先祖の時にあらば預言者の血を流すに與せざりしをと。』げにも彼等は橄欖山の南麓に預言者の墓を建つ。日光に輝きて燦然たるを見ずや。先祖の殺せる殉教者を哀悼するや至れり。彼等は十字架の譚を聽きて、劔を撫して、『あゝ我そこにあらば猶太人を寸斷せしものと』と嘆ぜし野蠻の酋長に似たり。古代の預言者を斯くも尊崇せる彼等は目前に語れ

る最大預言者を殺さんとするなり。彼等は其の祖先の子たるに耻ぢざるなり。彼等に預言者と智者と學者とを遣はさんか、その祖先のなせる如く、『或は殺し、或は十字架に釘け、或は會堂にて鞭うち、或は邑より邑に逐ひ苦しめん。』

耶蘇の言は聽衆をして戰慄せしむ。彼等は慘憺なる出來事を能く知れり。凡そ九百年以前ヨアシ王の時、善良なる祭司エホイアダの死後、ユダとエルサレムは偶像崇拜に陥れり。エホイアダの子ゼカリヤ之に抗議す。而して彼は神殿の庭にて石にて撃殺されぬ(歴代志下廿四)。そは慘然たる罪惡なりき。猶太人はそれを償はんとて、ケドロンの彼岸にゼカリヤを記念する社(社)を造れり。この出來事は國民の耳底に銘されて忘れんやうもなし。而して之を記せる歴代志略第二卷は希市來の聖書にて最後の卷をなす。故に耶蘇の言を解せば次の如し。『聖書の第一頁より最後まで爾曹の歴史に記されし罪惡は、爾曹に報ひ來るべし。爾曹は過去幾世紀の罪惡の繼承者なり。堆積せる刑罰は爾曹に落つべし。われ敵に爾曹に告げん。この事皆この時代に報ひ來らん。』

こは實に慘絶の預言なりき。有司等の殺意は益々堅し。首をあつめて密議を

凝らす。

## 第十六章 希臘人の使者

日は傾きぬ。耶蘇は神殿に憩ふ。弟子等は都を去つて橄欖山に宿りを求むる。前忙しく往來す。ピリポは使者として街に往きしが、見知らぬ人々其の側に來る。彼等は希臘人なりき。乞うて曰く、『君よ我等は耶蘇に見えんことを欲す。』教會史の祖カイザリアのオイセピウス(340)は奇談を傳ふ。メソポタミアのエデッサ王アブガルスは、不治の難病に罹れり。耶蘇の名聲を聽き、使者を送りて、來りて癒さんことを乞ふ。オセピウスはエデッサの記録保存所にて、其の記録を發見せり。彼はアブガルスの書翰と耶蘇の返書とをシリア語より翻譯せり。王の書翰にいふ。

『エデッサの君主アブガルスは、エルサレム地方に現はれし善き救主耶蘇に安きを問ふ。爾に就いて又爾が藥材藥草なしに病を癒すことの風評は我が耳に達せり。曰く、爾は賢者に見せしめ、跛者を歩ましめ、癩病人を潔め、汚れた



る魂と鬼とを逐出し、永き病に惱む者を癒し、死者を甦せりと。而して我は爾に就いてこれ等のことを聴き、爾が神にして天より降りて斯かる事をなすか。或は爾が神の子にして斯かる事をなすか。この二の一ならんと推測するが故に余は書を認めて爾に乞ふ、我が許に旅してわが有する病を癒さんことを我は又猶太人の爾を罵り、爾を害せんとなすと聴けり、わが都は小さくとも善良なるもの、されば爾と我と兩者に好都合ならん。」

耶蘇はこれに答へて、エルサレムに留まりて其の使命を成就せざるべからずと言へり。されど其の天に昇りし後弟子の一人を遣はしてアブガルスを癒し、彼と其の人民に生命を與ふべきを約せり。この約を履んで、タツタイはエデッサに遣はされぬ。

こは奇聞なり。この書翰の確實なるやは甚だ疑はし。されど耶蘇の許に來れる希臘人はアブガルスの使者なりしこと實らしくも想はる。ピリポは今使者の辭を聴き、如何にせばやとこれをアンデレに語る。アンデレは常に彼が相談相手にして又師の愛する者なり。二人は往きて耶蘇に告ぐ。こは主の胸の情緒を搔

き亂しぬ。無上の歡喜は耶蘇を鼓吹す。この希臘人こそ、耶蘇を信ずる諸民諸族諸音の先驅と思はれぬ。イスマエルの群ならざる他の羊は牧者の聲を聴きて、その許に集ひ來れり。こは來るべき一層大なる事の前兆、耶蘇の犠牲の空しからざる抵當なり。耶蘇叫んで曰く、『人の子榮光を受くべき時至れり。誠にまことに爾曹に告げん。一粒の麥もし地に落ちて死なずば、唯一にて在らん。若し死なば多くの實を結ぶべし。その生命を惜む者は之を喪ひ、その生命を惜まざる者はこれを保ちて永生に至るべし。人もし我に仕へんとせば、我に従ふべし。我に仕ふる者は我が居る所に在らん。人もし我に仕ふれば、之を貴ぶべし。』

耶蘇の歡喜はこゝに中絶す。傳道の初期荒野にて襲はれし如き古き誘惑はその胸を衝く。耶蘇の死は絶対に必要なりや、出奔の門戸は神の攝理に依つて前に開かれぬ。今語らるゝ召喚に従はんか。頑強なるエルサレムと血に渴せる敵を後にして、親切なる希臘人の許に往き、そこに天の王國を建設せんかな。耶蘇は人情の脆きを感ぜらる。近づける十字架の光景と温かなる希臘人の招待。耶蘇は叫んで曰く、『今わが心愁ひ痛めり。我何を言はんや。父よ、この時より我

を救ひたまへと言はんか。』而して彼の祈禱は答へられぬ。神の永劫の目的は耶蘇の死にあり。世の罪の犠牲となるにあり。こは耶蘇の使命、耶蘇はこれを避くべからず。耶蘇は一瞬の逡巡より靈を覺醒し、慨然として曰く、『否、これが爲めに、われ此の時に至れるなり。希はくば、父よ爾の名の榮光を顯はせ。』

危機は瞬時に止む。耶蘇の胸、波收まりて、萬民救済の希望は澄み渡りて煌々たり。ヨルダンの岸にて、變貌の山にて聽かれし、天よりの聲は又も沈黙を破りぬ。神は愛子の祈に答へり、『われ其の榮光を既に顯はす。又これを顯はすべし。』傍に立てる者これを聽きて、或は雷なりと云ひ或は天の使彼れに語れるなりと云ふ。耶蘇曰く、『この聲はわがために非ず、爾曹のためなり。この世は今審判せらる。この世の主は今や逐出さるべし。われ地より擧げられなば、萬民を引いて我に就かしめん。』

耶蘇はこれらの言を終りて身を避けて隠れぬ。この隱退の節、希臘人の使者と會見せられしならん。その時何を語られしや、福音記者は之を記するなし。恐らくピリポとアンデレは使徒の代表者として其の會見に出席せしならん。想

ふに異邦人に告げらるゝ所は、萬民平等の救済なりしならん。『我は世に來れる光なり、我は世を審判んために來らず、世を救はんためなり。』

## 第十七章 耶蘇の預言

夜は來りぬ。耶蘇と十二人は都を去りて橄欖山に還る。神殿を出づるに先んじ、弟子は聖なる建築の壯嚴を嘆賞す。そは北方の農夫たる彼等の眼を驚かすに足る。ヘロデ王の都を飾れる時、ゼルバベルの古き殿堂は破損してありき。王は民心を買はんとて神殿の再築を畫りぬ。そは建築の最も成功せるもの、宏壯なる殿堂は天を摩す。ヘロデの殿を見ざる者は、美しき建物を見ざるなりと稱せらる。悉く大理石にて造られ、その石材は長さ四十五キユビット、高さ五キユビット、幅は六キユビット、而して黄金その上に置かる。遠く望めば白雪の山の如く、曉の曙光に輝きて、燦然人目を眩す。弟子の一人は叫びぬ、『師よ、大理石の構造の如何に壯大なるかを見よ。』耶蘇は答へぬ、『爾曹は此の大なる建物を見る。されど此の處に在る一の石たりとも他の石の上に圮れずしては遣らじ。』

こは驚くべき布告なりき。橄欖山に退ける時弟子の四人ベテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレは窃かに耶蘇に近づき、その説明を求む。『何れの時この事あるや。』耶蘇は山麓の静夜、谷の彼方に聖都と神殿を瞰視しつゝ、來らんとする事を論ぜらる。そは記念後七十年に起れるエルサレムの破壊と、十九世紀過去つて未だ顯はれざる基督の再臨なりき。エルサレムの運命は歴史上顯著なる事實となりぬ。されど耶蘇と同時代の人は全くそれを悟らざりき。彼等は天空の休徴を讀めども、時の休徴を知る能はざりしなり。攝理の道德的に峻嚴なるは、耶蘇に未來を聞く秘鑰を供しぬ。エルサレムの不義の杯は滿てり。そは死せる骸骨に同じ。『骸骨のある所、驚かならず集まるべし』(馬太廿四) 耶蘇は其の民情を察し、羅馬が手を拱いて永く忍ばざるを見たり。その先見せし所は、その最も悲しめる事なり。耶蘇はエルサレムを愛せり。そは耶蘇に取りて大王の都なり。その殿堂は彼の父の家なり。エルサレムはイスラエルの信仰の中心、義人の血の注がれし所なり。實にそは耶蘇の愛して聖視せし所なり。然るに其不信仰、今や何たる状ぞ。其の運命を思へば、耶蘇の胸は鉛の如く重し。十二人に斯く語れる時、

悲哀の洪水は彼を壓せり。耶蘇が極力凶禍の状を描かれしも、さもありなん。己が再臨に就いては曰く、『その時人の子の休徴、天に現はる。地上に在りて哭き悲しめる諸族は人の子の權威と大なる榮光をもて、天の雲に乗り來るを見るべし。又その使等を遣はし、筵の大なる聲を以て、天の此の端より彼の極まで四方より其の選ばれし者を集むべし』されど其の時は知る能はず。耶蘇は明覺に依て歩まず、信仰の生活をなされぬ。故に曰く、『その日その時を知るは、唯わが父のみ。天の使等も誰も知るなし。』而して耶蘇は斯かる森嚴なる預言の際にも、尙ほ其の自然の研究を嗜好を失はざりき。『なんぢら無花果樹に就いて譬を學べ、その枝既に柔かにして葉萌めば、夏の近きを知る。』故にその日その時は確實に知れずとも、『これ等のことを見れば、其の時は近く門口に至ると知れ。天地は癡れん、されど我が言は癡せじ。』

耶蘇は弟子等の戒心すべきために、二の譬喩を語られぬ。小人の童女と銀錢の譚は、これ再臨に就いての教といふべし。譬しめよ、働けよとは、其の訓戒なりき。童女の譬は、弟子等の熟知せる光景を描く。シリア地方の結婚は、夜半に

祝せらる。行列と響應は其の重なる禮式なり。花嫁の友なる童女の一家は燈を執りて新郎を迎へ、花嫁の父の家に護送す。如何なる故ありてか、新郎の來ること遅し。童女は途に彼を待てり。餘りに時遅ければ、疲勞せる童女は、睡りに落ちぬ。半夜叫び聲は起る。『新郎來りぬ。出て迎へよ。』燈は光微かに、油將に盡きんとす。然るに五人の童女は注意深く、五人は恐かなりき。前者は斯かる時の用意にとて油を携へぬ。後者は何等の備へなし。即ち前者に油の分け與ふるを乞ふ。されど賢き童女は答へぬ。『我儕と爾曹とに、恐らく足るまじ。爾曹賣る者に往きて油を買へ。』愚かなる童女は油を買はんとて急ぎ往けり。然るに新郎既に家に入りて筵席整へるを以て門は閉ぢられぬ。後れし童女は門を叩きて、『主よ、我儕のために開きたまへ』といふ。内より答あり。『誠にわれ爾曹に告げん。我は爾曹を知らず。』

『然らば怠らずして守れ、爾曹その日その時を知らざればなり。』こは耶蘇のこの譬の訓戒にてありき。時代は矢の如く飛びぬ。されど耶蘇は未だ來らず。燈を點じて待つのみならず、油の準備は常に肝要なりと知らずや。

耶蘇は尙ほ一の譬を語る。ある人旅せんとして三人の僕を召し、その智慧に應じて、第一に銀五千、第二に銀二千、第三に銀一千を預けて貿易せしむ。第一と第二は危険を冒して商ひし、その預金を二倍にす。主人は歸り來りて彼等を賞し、『善にして且つ忠なる僕よ、爾わづかなる事に忠なれば、我なんぢに多き事を督らせん』といふ。第三は才能少きを以て少額を預けられぬ。然るに彼は其の少額をも充分に用ゆる能はず。只これを失はん事を恐れて地に藏し置けり。主人彼を責め、『惡しく且つ怠れる僕よ、爾なんぞ我が金を兌換舖に預け置かざりしぞ。さらば我が歸りたる時元利をろべて得べかりしを』といひ、その一千を取りて第一の者に與ふ。こは實に人各その天分に應じて働きをなし、以て主の再臨を待つべきことを教へられしもの。銀を少なく預けられしが、惡しきに非ず、これを用ひて相當の利を得ざるが、惡しきなり。神は我等を信じて、才能を託し、自由に我が用ゆる所に委す。我等は全心全力を擧げて、その發展を努むべし。

耶蘇の論議は最後の審判に終る。耶蘇はダニエル書の語を借りて、『人の子己れの榮光と諸の聖き使を率ゐて來る』(セハニエル)その時、萬國の民を前に集む

べし。而して羊を牧ふ者の綿羊と山羊とを分つ如く彼等を左右に分つべし。右の者に向つては、飢えし時食はせ、渴きし時飲ませ、旅せし時宿らせ、裸なりし時衣せ、獄にありし時訪れたる恩を謝し、「わが父に恵まるゝ者よ、來りて創世よりこのかた、爾曹のために備へられたる國を嗣げ」といふ。こゝに於て義しき者は、爾に斯かる恩を施せることなしと告白す。「我まことに爾曹に告げん。既に爾曹わが兄弟のいと小さき者の一人に行へるは即ち我に爲せるなり。」と答へらる。而して左の者に對しては、「罰せらるべき者よ、我を離れて惡魔と其の使のために備へたる熄ざる火に入れよ」と宣す。そは即ちいと小さき者の一人に恩を施さざりしを以て、主に對して爲さざりしと同罪たるなり。「我を召びて主よ、主よといふ者盡く天國に入るに非ず」とは即ち此の意に外ならず。この最後の審判の描寫に於て、耶蘇は實に基督教の統一の勢力を示せり。嘗て希臘の哲學は神學の豫備なる如く考へられしことあり。その弊はこゝに言はず。宗教の實踐的方面に於て、儒者も佛者も亦基督者と同じく神の審判を受けて、義しき者の中に加へらるゝを得ると知らずや。萬民の救濟、こは實に耶蘇の理

想にして、その實現せんために世界史は徐ろに發展す。時の卷物の舒へ盡さるゝ所、そは世の最後にてやあらん。

## 第五篇 日没と曙光

## 第一章 樓上の室

日没は近づきぬ。來らん曙光を知る由もなく、光景は悲壯を極む。時は除酵たれいれせんの初日即ち逾越オウキョシの羔こつぱを殺すべき日なり。耶蘇は十二使徒と共に、逾越の食を取らんとせらる。ゲツセマネの逮捕、カルバリー丘上の十字架は次て來るべし。耶蘇は慘憺たる境涯に臨むに先んじ、十二使徒と最後の晚餐を共にせんとせられぬ。

四方には濃霧密集す。一寸先きはあやめもわかず、されど耶蘇の心は毫も波うつことなし。約翰は耶蘇の語を記して曰く、『今人の子榮えを受く、神も又彼に因りて榮えを受くるなり。』耶蘇の泰然たる態度見るべし。

暴風雨は將に破れんとす。これより前二日祭司の長と學者達相謀りて耶蘇

を捕へて之を殺さんとす、然れども民を畏れぬ。人民の耶蘇に對する尊崇は厚し。故に詭計を以て彼を捕へざるべからず、又除酵節の過ぎたる後にあらずんば、事を擧ぐることに難し。彼等が其の困難に頭を悩ませる時、想ひ設けぬ助力は來れり。十二使徒の一人イスカリオテのユダの變節これなり。ユダは耶蘇に於て此の世の救世主を望みぬ。耶蘇の帝冠を戴かん時、己れは其の大臣たらん野心ありしこと明けし。然るに耶蘇の一舉一動は凡てユダの希望に反せり。帝冠を望まずして、十字架を望む。何ぞそれ弟子等を愚弄するの甚だしきや。耶蘇と共になせる三年間の苦心艱難、而して弟子等に對して耶蘇の報ゆる所は何ぞあゝ止ぬるかな。斯かる人を救世主として奉戴せることや、ユダは秘かに祭司の許に至れり。耶蘇を賣らんことを語る。祭司等は悦びぬ。報ゆるに銀三十シケルを以てす。こは奴隸一人の價格なり。思ふに耶蘇を一奴隸の如く買へりとの意味にて、この小價格をユダに與へしならん。千金を懸けて敵の首を獲んとす。敵の首に對する尊敬は尙ほそこにあるを見る。祭司等は銀三十シケルを以て救世主の生命を買へり。凌辱これに勝るあらんや。耶蘇は除酵節の前日逾越の

食の準備を命じおかれぬ。そは其の晩餐の甚だ重大なるを慮れてなるべし。耶蘇は節ノドの當日ペテロとヨハネに命じて曰く、『往きて我儕が食せんために逾越を備へせよ。』彼等は答ふ、『何處に之を備ふべき。』と耶蘇曰く、『城下に入らば水を盛りたる瓶を運べる人に遇はん。その人の入る家に往き、その家の主人に言へ、師、爾にいふ、わが弟子と共に逾越を食すべき客席は何處にあるやと、さすれば其の主人は備へせる樓上の室を示すべし。そこに晩餐を備へよ。』この名譽を得し家の主人は誰なりしならん。後には福音の宣傳者となれるマカなるべしとは、當らずと雖も遠からざる推測なり。マカはバルナバの從兄弟にして富有の身なり。その寡婦たる母マリアと共に、エルサレムに住居し、後にも使徒等を饗應せることあり(使徒行傳十二ノ十二)。マリアは樓上の大廣間に晩餐を用意せり。ペテロとヨハネは耶蘇の命ずるまゝに其の家に至れり。

やがて耶蘇は他の使徒等と共に其の家に至る。直ちに樓上の室に通じて晩餐の席に着く。十二使徒も各その席を取れり。晩餐は始まりぬ。耶蘇は此の筵の莊嚴を使徒等に覺らしめんために曰く、『われ苦難ツラシを受くる前に爾曹と共に

この逾越を食するは我が大に願ふ所なり。われ爾曹に告げん、神の國の來るまでは再び之を食せず。』耶蘇は杯をとり謝して之を分つ。酒は一行しぬ。次の杯は用意せられたり。

この時主人役たる者は、逾越の起原及び其の意義を説明するの習慣なりしが、耶蘇は之を避け、異常なる方法を設けられぬ。耶蘇は晩餐の席を起ちて上衣を脱ぎ、手巾を取りて腰に纏ひ、而して盤に水を満たさる。こは既に準備せしめ置かれしものと見ゆ。耶蘇は今何をなさんとしたまふか。弟子等は怪訝の眼を以て眺めぬ。客の入り來る時、家の奴隸その足を洗ふことは、猶太希臘及び羅馬の習慣なり。耶蘇は今奴隸の業を敢てせんとするか。然り、耶蘇は之に依て弟子等の利己的野心を打碎かんとしたまへり。謙遜の實地教訓なり。

使徒の首席を占むるは、ペテロなり。耶蘇はペテロより始む(クリソストムはペテロを次にす)。ペテロは驚きぬ。『主よ、爾わが足を濯ふか』と叫ぶ。耶蘇は答へぬ、『わが爲す所を爾いま知らず、後これを知るべし。』されど尙ほペテロは其の汚れし足を祝福の手に濯はるゝを不敬として之を拒めり。『爾決して我が足を

濯ふべからず』と云ふ。耶蘇は答ふ、『若しわれ爾を濯はずんば、爾と我と係はりなし。』極端より極端に馳するは、ペテロの特質なり。彼は叫びぬ、『主よ、昔に我が足のみならず、手をも首をも濯ひたまへ。』耶蘇はペテロの此の答に微笑まれしならん。曰く、『足のほか濯ふに及ばず、而して全く潔し。されど悉く潔き者にあらず。』耶蘇は彼等の足を濯ひ洗ひてユダに及ぶ。其の足こそ昨日耶蘇を賣らんために走れるもの、されど耶蘇は柔しく其の足を濯はれぬ。』耶蘇は濯ひ了りて、その上衣を着、己が席に復して曰く、『我が爾曹になせし事を知るや、我は爾曹の主なるに尙ほなんぢらの足を濯ふ、爾曹も互に足を濯ふべし。我なんぢらに例を示せり、こは我なんぢらに爲せし如く、爾曹にも爲さしめんためなり。』

耶蘇はやがて麵麩を取り、謝して之を擘き、使徒等に與へて曰く、『こは爾曹のために與ふる我が身體なり。我を記憶せんために之を食へよ。』この語は使徒等の耳に雷聲の間近く鳴る如く轟きぬ。耶蘇は從容として麵麩を食し、後又杯を取りて曰く、『この杯は爾曹のために流す我が血にして、我が立つる新約な

り。』耶蘇は語つて茲に至り、流石に心に憂へ胸迫りしと見え、明言して曰く、『誠にまことに爾曹に告げん、爾曹の中一人われを賣る者あり。』弟子等は此の語に懼を懷き、互に顔を見合せ、その誰を指して言はれしなるやと疑ひ惑ふ。ペテロはそれを尋ねたげに見えぬ。されど彼は足を濯はれし時の失敗あり。且つ座席は耶蘇を中央にして、その周圍にならぶ。ペテロの席は耶蘇の背後にありしを以て、之を尋ぬるに便宜ならざりき。耶蘇の正面、その胸に接してヨハネ坐れり。ペテロは耶蘇の後よりヨハネに目くばせしぬ。ヨハネは耶蘇の最も愛する弟子なり。約翰傳に『耶蘇の愛する一人の弟子』と記して己が名を記さるは奥ゆかしく感ぜらる。ヨハネは耶蘇に問ふ、『主よ、そは誰ぞ。』耶蘇は答ふ、『わが一つまみの食物に物をつけて與ふる人はそれなり。』遂に之をシモンの子イスカリオテのユダに與ふ。子の罪は親に及ぶ。福音書記者が特に此の場合シモンの子と記せるを見ても、人の子たる者は慎まざるべけんや。ユダの叛逆は公然となれり。最早斯く知られしからはとてユダは起ち上りぬ。耶蘇はユダに言ふ、『爾のなさんとする事を速になせ。』使徒は其の何の故たるを知らず、ユ



ダは財政を司れる故、市に往きて物買はしめらるゝにやあらん、或は貧者に施さしめらるゝにやと思ひぬ、時は夜なり、ユダの姿は暗裡に没しぬ。

耶蘇は使徒等に送別の辭を告げて曰く、「今や人の子榮えを受く、神も亦彼によりて榮えを受くべし、小子等よ、我なほ暫く爾曹と偕にあり、爾曹われを尋ねん、我往く所には、爾曹至ること能はじ、さればわれ新しき誠を爾曹に與ふ、即ち爾曹相愛すべし、我なんぢらを受する如く、爾曹も相愛すべし。」シモン、ペテロは耐へ切れざる如く尋ねぬ。「主よ何處に往きたまふや」耶蘇は答へぬ。

「我が往く所には、爾今從ふこと能はず、後われに従はん。」ペテロは曰く、「主よ何故今なんぢに従ふこと能はざるか、我は爾のために我が生命を捐てん。」されど耶蘇は知り過ぐるほど、ペテロの性格を知りたまへり、曰く、「爾わがために生命を捐つるや、誠にまことに爾に告げん、鷄鳴かざる前に、爾三度われを知らずと言はん。」されどペテロは尙ほ斷言して、「必ず爾のために死せん」と言ふ、他の者皆ペテロの言に應ず。

耶蘇は彼等の心を眞摯ならしめんとて曰く、「我爾曹を遣はずに、財布旅袋

履を帶ばしめしことなし、缺乏ことありしや。」「無し」と答ふ、耶蘇曰く、「今は財布ある者は之を取れ、旅袋ある者もそれを取れ、これ等を持たぬ者は衣服を賣りて劍を買ふべし。」弟子等は耶蘇の此の言を文字通りに解しぬ、上衣の下に隠せる劍を取出し、「こゝに二つの劍あり」といふ、劍を有せし者の一人はペテロ、他の一人はヨハネなりしならん、耶蘇は弟子等の答をいと憐れに感ぜられぬ、彼等に曰く「足れり。」

靈筵は今や終らんとす、残るは只一つ、羔を犠牲にするあるのみ、その犠牲たる羔は耶蘇その人なり、席上は益々悲愁の色を帯び來りぬ、耶蘇は曰く、「爾曹心に愛ふる勿れ、神を信じ又我を信すべし、我が父の家には第宅多し、我が往くは爾曹のために住ふ所を備へんためなり、爾曹わが往く所を知り、又その途を知る。」雙兒のユダ、耶蘇の語を遮ぎる、曰く、「主よ我儕爾の往く所を知らず、如何にして其の途を知らん。」耶蘇は答へぬ、「我は途なり、眞理なり、生命なり。」ピリポは口を開きぬ、「主よ我儕に父を現はしたまへ、さらば我儕満足すべし。」耶蘇は悲しげに言はれぬ、「ピリポよ、我かく久しく爾曹と偕にありしに、未だ

我を知らざるか。我を見し者は父を見しなり。』レツバイのユダは問ふ、「主よ如何にして爾は自らを我儕に現はし、世には示さざるや。」耶蘇は其の心の迷を解かんとせられざりき。聖靈は來りて凡ての眞理を彼等に教ふる時あらんと信じられぬ。曰く、「われ平安を爾曹に遺す、我が平安を爾曹に與ふ、爾曹心に憂ふる勿れ、又懼るゝ勿れ。」その間ベテロ、ヨハネの如き重立てる使徒の沈黙せるは、如何なる想に沈みしにやあらん。意味深きこと、謂ふべし。

時既に晩し、耶蘇は曰く、「起てよ、我儕往くべし。」一同讚美を歌ひ、樓を下りて、睡閑なる街道に出て往けり。

## 第二章 ゲツセマネの園

耶蘇は深く弟子等の心を氣遣はれぬ。彼等よく己が後繼者となりて、神國建設の事業を果すべきや否や。今ぞ彼等を教ふる最後かと想へば、いと果敢なく感ぜられぬ。假令信仰の眼暗き弟子なりとも、何日かは其の眼明らかなる時もあるべきに、教へずに止むべきにあらず。耶蘇は樓上の室に捕手の來るべきを

359

知れり。所を變へて尙ほ少しく弟子等と語らんものと、適當なる所を索めらる。耶蘇が最後の教訓は約翰傳に精しく記さる。されど其の語られし場所に就いては記すなし。想ふに神殿の庭を選ばれしならんか。夜は晩し、下弦の月は登りて、薄光を放てり。十一人の中央に立ちて耶蘇の語らるゝ所の如何に壯嚴なるや。神殿の門の上に、參詣者の眼を捕ふるは聖なる紋章として造られし長さ人の身長ほどなる黄金の葡萄樹の房々と熟れる環なり。この精美なる裝飾はヘロデの宏大なる神殿の不思議の一なり。羅馬人の聖地に侵入せる時、これに目を着け、斯かる紋章あるからは、この神殿は神聖なるものと推斷せり。誠にそは猶太獨特の紋章なりき。昔時葡萄樹は預言者及び詩の作者に依つてイスラエルの象徴として用ひられぬ。それより下つては救世主の象徴とせらる。『あゝ萬軍の神よ、願くは歸りたまへ。天より俯し視て此の葡萄の樹を顧み、爾が右の手にて植ゑたまへるもの、自己のために強くなしたまへる枝を護りたまへ』(詩四十ノ五) この紋章は救世主の表號なるを以て、ぞは耶蘇に肅嚴なる譬喩を供せり。『我は眞正の葡萄樹、わが父は農夫なり。』彼が弟子は其の枝なり。その職

務は實を結ぶにあり。「斯くして我が父に榮光あり。」而して枝の實を結ぶは、その幹に連結するためなるを以て、弟子たる者は耶蘇と根本的に連結せざるべからず。「我より離るれば、爾曹何をも爲す能はざるなり。」

これを緒言とし、耶蘇は樓上の室にてなせる議論を詳説せらる。彼等は迫害に遭ふべし。されど二の大なる慰安あらん。第一、彼等が受くる所は、その主の受けし所、主はそれ以上の慘憺たる迫害を受けられしを知ることなり。「世若し爾曹を惡む時は、爾曹より先に我を惡めりと知れ。僕はその主より大ならずとわが爾曹に言ひし事を心に記せよ。人若し我を窘迫ば、爾曹をも窘む。」第二、尙ほそれ以上に彼等は聖靈の助けを有せり。耶蘇逝かば、聖靈來りて彼等の力を鼓舞せん。「われ慰安者を父より送らん、即ち父より出づる眞理の靈なり。」

『われ此等の事を爾曹に語りしは、爾曹をして我に在りて平安を得させんがためなり。爾曹世に在りては患難を受けん。されど懼るゝ勿れ、我既に世に勝てり。』この鏘々たる語を以て十一人に對する訓言を結び、それより天を仰いで父に祈を語らる。そは自己の榮光を懇願し、又之を感謝せる辭なり。又その弟

子等のために哀願の祈なり。第一、彼が今祈れる間に偕に在る十一人のために哀願す。彼等は父が此の世より彼に賜へるもの、又彼が父の名に依て保ちしもの、又彼が此の世に己が代表者として遣し往く所の者共なり。この祈に就いて最も驚嘆すべきは、句々節々勝利の歡喜鳴響けることなり。「我爾の榮を世に現はし、爾の我に委ねし所の業は我これを成せり。父よ、今我をして爾と偕に榮を得させたまへ。」何たる確信の辭ぞや。この辭に對して死何處に在る。陰府何處に在る。これをソクラテスが將に死せんとして、靈魂不滅を論ぜる辭に對す。日と月との差を感ぜずんばあらず。

耶蘇は弟子等と語り、又神と語れる後、市を去る。十一人と偕に寂然たる街道を經門を過ぎて橄欖山に向ふ。約翰が特に其の途にて「ケデロンの河を涉りて」と記せるは深き意味あり。そは歡樂の流にあらず。祭壇に犠牲となれる獸の血は其の水を穢し、その流を紅ひならしむるは其の常にてありき。世の罪を負ふ神の羔は今や其の流を涉られぬ。橄欖山の西の斜面にゲッセマネの園あり。耶蘇はそこに十一人を導かれぬ。そは恐らくマカの母マリアの所有地にし

て、耶蘇の常に黙想に耽られし場所なりしならん。

夜は益々闇けぬ。疲憊せる弟子等は上衣にくるまりて、睡りこけんとなす。されど耶蘇の胸は森嚴なる想に満てり。弟子等に曰く、『爾曹こゝに坐れ、彼處に往きて祈らん。』ペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人を携へて少しく歩を進めぬ。世に勝てりとの耶蘇の心情も、この時憂愁の雲に遮ぎられて、悲哀の棘は胸を刺せり。耶蘇は三人に言はれぬ、『我心痛く憂へて死するばかりなり。こゝに待ちて我と共に目を醒まし居れ。』

耶蘇はそれより石を投げて遠くほどの距離に進み行き、そこに跪づかれぬ。祈りて曰く、『わが父よ、若し聖旨にかなはず、此の杯をわれより取りはなち給へ、されど我が心のまゝを成さんとするに非ず、聖旨を成させ給へ。』夜は静かなり。耶蘇の祈る聲は手にとる如く聴えぬ。斯くして殆んど一時間、耶蘇は冥想の裡に神との靈交を充實し居られぬ。その間三人の弟子は疲れと悲しみに氣も遠く、假睡して我を忘れ居たりき。耶蘇は弟子等の側に來り、その睡れるを見、眼を赤くせるペテロに曰く、『斯く一時も我と偕に目を醒まし居ること能は

ざるや、惑に入らぬやう目を醒し、且つ祈れよ。』耶蘇は慈愛の眼にて弟子等を眺め、『その靈には願ふなれど、肉弱きなり』と辯解しやられぬ。二度往きて、復祈つて曰く、『わが父よ、若しわれ此杯を飲まずして止む能はずんば、聖旨に任せたまへ。』と、來りて又弟子等の眠れるを見る。これ彼等の目疲れたるに因る。彼等は耻ぢぬ、されど耶蘇は叱したまはず、三度彼等を離れて、同じ語をもて祈られぬ。既にして歩を返し悲しき反語もて弟子等に曰く、『今は寢て休め、時は近し、人の子罪人の手に賣されん、起さよ、我儕往くべし、我を賣りし者近けり。』と  
耶蘇の語れる時、捕手の一隊は近く來りぬ。ユダは耶蘇の屢々弟子等と會せる此の處を知れるなりき。祭司の長、パリサイ人、下吏、兵卒は提灯、兵器、棍棒を携へて來る。ユダは彼等に徴し合せて曰く、『わが接吻する者は彼なり、之を捕へよ。』直ちに耶蘇の許に來る。『師よ安きや』といひて、耶蘇に接吻す。耶蘇はユダにいふ、『友よ何のために來るや。』耻を知らぬユダも此の柔しき一言に逡巡しぬ。耶蘇は一步進み出て、兵卒等に曰く、『誰を尋ぬるや。』彼等答ふ、『ナザレの耶蘇なり。』耶蘇は曰く、『我は其の人なり。』その語は權威に満てり。それを聽

ける兵卒等は胸壓せられし如く、身を退きて地に仆れぬ。ジョン、パンヤンにも斯かることあり、パンヤンの説教せる時、警吏の一隊は其の家に入込みぬ、開ける聖書を手にして眼を凝えたるパンヤンの勢に怯へたりけん、警吏は色蒼さめて仆れぬ。パンヤンは居合はす人々を見廻はして叫びぬ、「看よ、この人は神の言に慄へしよ。」ジョン、ウエスレーに就いても、同様の逸事語られぬ。

耶蘇は再び問ふ、「誰を尋ぬるや、」彼等は「ナザレの耶蘇なり」と言ふ。耶蘇は答ふ、「我既に爾曹に我はその人なりと言へり、若し我を尋ぬるならば此輩を赦して去らしめよ。」耶蘇が再び斯く問はれしは、彼等が弟子等をも捕へんとするかを確かめんためなりしならん。茲に於て兵卒等は耶蘇を捕ふ。ペテロは主の捕へられしを耐へ難く思ひつ、劔を抜きて祭司の長の僕マルコスの右の耳を斬落せり。耶蘇はペテロを戒しめていふ、「劔を鞘におさめよ、凡て劔をとる者は劔にて亡ぶべし。我今十二軍餘の天使をもわが父に乞ふこと能はずと爾曹想ふや、若し然せばいかて聖書に記されし所に應はん、我は父の賜ひし杯を飲むべし。」斯く言ひて耶蘇はマルコスの耳にさはりて之を醫せり、ペテ

ロは幸ひに生命を拾ひぬ。耶蘇マルコスを癒さずんば、ペテロも亦捕はれたるべし。

365

彼等は耶蘇を縛れり。耶蘇曰く、「爾曹劔と棒を以て盜賊を捕ふる如く、我を捕へんとするや、われ日々爾曹と共に神殿に在りしが、爾曹われに手を措くことなかりき。然るに今や爾曹の時なり、暗黒の勢なり。」彼等は耶蘇を曳き往きぬ。その間に弟子等は如何にせるや、殊に耶蘇と偕に死せんと公言せるペテロは如何にせるや、あゝ、彼等は卑怯にも逃げ去りしなりき。馬可傳十四の五十一によれば、ある若者身を蔽ふに麻の夜具を以てして、耶蘇に従ひぬ。捕手の者共、若者の従ひ来るを悟りてこれを捕へんとせしが、若者は麻の夜具を棄て、裸體にて逃れ去りぬ。惜しいかな、その名を逸す。されどその使徒の一人にあらずること明かなり。想ふにそは聖晚餐をなせし家の若者にて、耶蘇と使徒等の出立せる後、麻の寝衣をまとふて床に就きしかど、睡られざるまゝに起き出でつ、窃かに耶蘇の一行に隨へるものならん。而して其の家は馬可の母マリアの家なりとの想像を事實なりとせば、取も直さず斯かる些細なる事を書き記せし

馬可こそ、その若者なりしこと明らかならん。

### 第三章 祭司の前にて

ゲツセマネよりして耶蘇は集議所に曳かれぬ。猶太が獨立せる當時なれば、集議所の判決は萬事を定むるなれど羅馬の支配を受くる其の日、羅馬の方伯の宣告を受けざるべからず。當時の集議所長をなせる祭司はヨセフ、カヤパにてありき。彼は老アンナスの養子なり。老アンナスは既に退隱の身なりしが、尙ほ大なる勢力を保てり。故を以て耶蘇は先づアンナスの所に曳き往かれぬ。ペテロとヨハネは其の後に追従す。兵隊は祭司の門に達す。ペテロはそれより入る能はずして門外に立ちぬ。されどヨハネは以前より漁夫として祭司の知遇を辱らし、父ゼベダイと共に屢々その家に入らせしを以て、祭司の婢僕は皆彼を知れり。故に容易く門内に入りて形勢を窺ふを得ぬ。ヨハネは懸て門の所に至り、門を守る婢に告げて、ペテロをも内に入らしむ。ペテロは中庭に入りて、人々と共に火の傍に坐しぬ。門を守る婢は先に入りし人の舉動訝しとや想

ひけん、ペテロを探して其の火の傍にあるを見出し、彼を熱視して、「この人も彼と偕にありし」といふ。ペテロは肯んぜず、「女よ我これを知らず」と答ふ。ペテロの語はガリラヤ方言なり。他の人々も眼をペテロに注ぎ、「爾も彼の一人なり」といふ。ペテロはいふ、「人々よ我は然らず。」

その間に耶蘇は祭司や長老の尋問を受けられぬ。彼等は耶蘇に其の教のこゝとを問ふ。耶蘇は答ふ、「我あらはに世に語れり、我常に猶太人の平素集會する會堂及び殿堂にて教へをなし、秘かに語れる事なし。何ぞ我に問ぬるや、我いかに語りしか、聽ける者に尋ねよ、彼等わが言ひし所を知れり。」耶蘇の態度は權威あるもの、如し。傍に立てる一人の下吏掌にて耶蘇を打ちて曰く、「爾祭司の長に答ふるに斯くの如きか。」耶蘇は答へぬ、「若しわが語りし所善からずばその善からざるを言へ、若し善くば何ぞ我を打つや。」ヨハネとペテロは耶蘇の打たれし音を聽いて身を震はせるならん。ペテロは立ちて尙ほ火に煖まれり。ペテロの顔色は蒼ざめてありしと見え、人々は又尋ねぬ。「爾も彼の弟子の一人ならずや。」ペテロはまた肯んぜずして「然らず」と答ふ。祭司の長の僕の一

人に、ペテロに耳を削れし者の親戚あり、曰く、『我なんぢが彼と偕に園にありしを見しに非ずや、』ペテロは尙ほ肯んぜずやがて鶏二度鳴きぬ。ペテロは耶蘇が鶏二度鳴く前に三度我を識らずといはんと言ひたまひしを想ひ起し、痛く泣き悲しみぬ。

夜は白めり、耶蘇はそれより集議所に曳き往かる。途すがら耶蘇を護衛せる者共、嘲弄して彼を撲ち、その目を掩うて問うて曰く、『爾を撲つ者は誰なるか預言せよ。』その他種々の事を口にして彼を譏れり。既にして集議所に至れば、民の長老祭司の長カヤバ學者等相集うて、耶蘇に問うて曰く、『爾は基督なるか。』耶蘇曰く、『假令われ爾曹に言ふとも信ぜざるべし。今より後人の子は大神ある神の右に坐すべし。』彼等は異口同音に言ふ、『然らば爾は神の子なりや。』耶蘇曰く、『誠に然り。』彼等曰く、『何を證據を用ひんや。我儕現に其の口より聽けり。』耶蘇はこゝに於て神を褻せる罪に擬せらる。この罪は石にて擊殺さるゝにあり。この尋問の間、耶蘇に同情し、秘かに其弟子となれるニコデモ、アリマテアのヨセフは如何になし居りしや。そこに出席せしも、恐れて口を緘ぢ

しや、又卑怯にも缺席したりしや。歴史は語る所なし。

耶蘇はそれよりピラトの公廳に曳かれぬ。夜は全く明けぬ。その間叛逆人ユダは耶蘇の成行如何にと窺ひたりしが、其の死に宣告されしを見、痛く己が非行を悔いぬ。三年間耶蘇と寢食を共にせる間に於ける懐しくも尊き記憶は、ひしひしとユダの胸を襲ひしならん。彼は銀三十を祭司の長、長老等に返して曰く、『無辜の血をわたし、我は罪を犯しぬ。』彼等いふ、『我等の關する所にあらず、爾自ら當るべし。』ユダその銀を殿に投げ捨て、そこを去りて自ら縊れ死しぬ。祭司の長等その銀を取り、こは血の價なれば、養錢の箱に入るべからすとて、共に謀り、その銀を以て旅人を葬るために陶工の田地を買へり。故に其の田地は今に至るまで血の畑と稱せらる。叛ける者の最期ぞ、いとも憐れなる。使徒行傳第一章十五節以下にはペテロがユダの最期を語る記事あり。そはこゝに記せる馬太の記事と異なる。兩者を比較するに、馬太の記せる所正しきが如し。

## 第四章 ポンテオ、ピラトの前にて

當時猶太の方伯たりしポンテオ、ピラトは性嚴格にして實務の才幹を有する代表的羅馬人なりき。彼は境遇の奴隸となりて、主耶蘇を死に處したるため、悪名萬世に傳はれり。境遇の奴隸たる、亦慎しまざるべけんや。

今や衆人耶蘇を曳きてピラトの公廳に往く。時は昧爽なり。ピラトは睡りより醒めて衆人に遇ふ。彼等に曰く、『如何なる咎を以て此の人を訟ふるや。』人々答ふ、『彼もし惡をなさざれば、爾にわたさじ。』ピラト曰ふ、『爾曹この人を取り、爾曹の律法に従ひて罪を定めよ。』ピラトは初めより之に關せざらんとせり。人々はいふ、『我儕に人を殺す權力なし。』彼等はピラトの宣告を待たずして、耶蘇の死を胸に畫けり。ピラトは公廳に入り、耶蘇を呼んで曰く、『爾は猶太人の王なるや。』耶蘇は答ふ、『爾かく言ふは、自ら斯く考へしによるか、又我に就いて人の告げたるによるか。』ピラトは羅馬人たる自負心を有せり。曰く、『我は猶太人ならんや、爾の國の民と祭司の長、爾を我に訟へぬ、爾何を爲せしや。』

耶蘇は答ふ、『我が國は此の世の國にあらず、若しわが國この世の國ならば、わが僕われを猶太人にわたさざる爲めに戦ふべし。されば我が國は此の世の國にあらざるを恐れ。』ピラトはいふ、『然らば爾は王なるか。』耶蘇は答ふ、『爾の言ふ如く、我は王なり。我はそのために生れ、そのために世に臨れり、そは眞理を表現せんためなり。凡て眞理につく者はわが聲を聴く。』ピラトは曰く、『眞理とは如何なる者ぞ。』されど彼は耶蘇の説明を待たず、耶蘇はストア派の賢人が王なる如き意味にて王なりと主張することを知りぬ。故に出でて、衆人に告げて曰く、『我は此の人に罪あるを見ず。』衆人は極力反抗して曰く、『彼はガリラヤより始め、遍ねく猶太を教へ、こゝまで來りて民を亂せり。』ピラトはガリラヤと聞き、『此の人はガリラヤ人なるか』といふ。『然り』との答へに、『然らば此の人を審判すべきは、ガリラヤを統治せるヘロデ、アンチパスなり』とて、耶蘇をヘロデの許に送る。ヘロデは逾越節のため當時エルサレムに滞在したるなりき。ヘロデは耶蘇を見て甚だ喜びぬ。彼は洗禮者ヨハネの首を斬りし者、耶蘇がヨハネの甦生りなりとは、彼の耳に達せし所なり。その他種々なる風評は傳は



りしものから親しく耶蘇を見、その奇蹟を眼前になさしめんと欲せること久し。故に耶蘇に向つて多くの事を問ひぬ、されど耶蘇は何をも答へざりき。蓋し耶蘇はヘロデの浮薄なる心を看破せられしのみならず、その洗禮者ヨハネを斬に處せるを快く思はれざりしならん。ヘロデは爲すべき術なし、ざりとて眞面目に事を處理する心もなかりしと見え、祭司の長、學者等の側より頻りに認ふるにも係らず、只その士卒と共に、耶蘇を嘲笑し之を愚弄したる後、華美なる服装を纏はしめ再びピラトの許に送り還せり。

ピラトは再び耶蘇を審く、祭司の長有司及び長老を召集して曰く、「我この人を鞭けども其の罪あるを見ず。ヘロデも亦然り、彼も耶蘇の死罪に當るを見ざりき。故に彼を鞭うちて之を釋さん。この節に必ず一人の罪人を赦す先例あるにあらずや。」衆人は皆聲をそろへて叫ぶ。「この人にあらず、バラバを赦免せよ。」バラバは城下に一揆を起し、人を殺して獄に投ぜられたる者なり。故にピラトの立場より言へば、耶蘇を赦してバラバを所刑するは至當なりしなり。ピラトは再び其の所思を述べしかど、衆人は耶蘇を十字架に釘けよ、十字架に

釘けよ」と叫ぶ。

ピラトは思ひ惑ひぬ。時に彼の妻より使者來りぬ。妻は名をクラウジア、プロクラといふ。猶太教の改宗者なりき。彼女が耶蘇を見知れる事は明らかなり。神殿の庭にて耶蘇の教を聽きしこともありしならん。前夜祭司の長がピラトの許に來り、耶蘇を捕ふるため兵卒を派遣せりと聽ける時、彼女の心は痛く愁ひぬ。晝の憂慮は夜の夢に現はれぬ。彼女は義人なる耶蘇を夢みぬ。耶蘇を夢見し彼女は幸ひなるかな。夢醒めて起出づれば、夫は既に在らず。審判の座に往けるを知りぬ。即ち使者を送りて、「耶蘇に係はる勿れ」と言はしめしなりき。

ピラトは妻の忠言に力を得て、又もや衆人に向ひ、「彼は何の惡事をなせしや、我未だ彼が死罪に當るを見ざれば、答うちて赦さん」と言ふ。彼等聲を激まし、耶蘇を十字架に釘けよと言ひ募りぬ。ピラトは輿論の力に屈せり。餘儀なく衆の欲する所に従はんとす。彼は其の語の益なく亂の起らんことを知り、水を取りて人々の前に手を洗うて曰く、「この義人の血に我は罪なし。爾曹自から之に當れ。」民皆答へて曰く、「その血は我儕とわれらの子孫に係るべし。」こゝ

に於てピラトは耶蘇を渡せり。

あゝ萬軍の主世の光なる耶蘇基督は斯くして十字架の刑に處せられんとす。この時人類の罪は高潮に達して、滔天の波を擧げしなり。窮すれば達す。罪惡は耶蘇を十字架に釘けぬ。而して其の十字架こそ人類を罪惡より脱せしめて、神に向つて精進せしむる表象となりしなれ。暗愴たる悲慘の極、而して希望の曙光は茲に白みぬ。

## 第五章 十字架

耶蘇は其の衣を褫て、紫の袍うぶに着返へしめらる。首には棘の冠くわんかゝる。而してその肩に負はしめられしは十字架なり。その前には傳令者たづね罪標ざいひょうを荷ぶ。ピラトは猶太人の頑強を憎み、即ちその罪標に「猶太の王ナザレの耶蘇」と記さしむ。萬人に通ずるため之を希布來、羅典、希臘の三語を以て書す。祭司の長は反抗して、「猶太の王と自稱せるナザレの耶蘇と記されよ」といふ。されどピラトは冷然として曰く、「既に記し了りしを如何せん」。當時世界語の代表たる三語もて猶太の

王と記せる罪標こそは、耶蘇が世界に主たる尊き暗示を有せり。

耶蘇は盜賊二人と共に刑場に曳かる。百人の長の司令の下に一隊の兵卒之を護衛す。跣足と十字架を肩にせる耶蘇は、鞭に追立てらる。祭司等の群集は前後左右より彼を嘲弄し、唾をかくるもあり。耶蘇の最も愛せる弟子ヨハネは密かに耶蘇の狀を視てありしが、走つて之を聖母マリヤに報ず。マリヤは數名のガリラヤ婦人と共に、悲嘆に沈みてありぬ。

耶蘇は十字架の重さに堪へざる如し。よるめき倒れしとも云はる。されば他人をして代らしめざる可からず。兵卒は四邊よっぺんを見まはしぬ。一人の男市の門を入り來るあり。そは希臘生れの猶太人にてクレネのシモンといふ者。逾越を祝せんために、北亞非利加の市よりエルサレムに上れるなり。市の壁外に宿し居りし彼は、朝の祈禱會に列するため神殿に往かんとす。然るに尙ほ一層神聖なる務めは彼を待ちぬ。彼は主の十字架を負ふ光榮を與へられぬ。兵卒は皇帝の名を以て彼を捕へ、無理やりに十字架を肩にせしむ。クレネに二人の子あり、アレキサンデル及びバルフといふ。此の二人は其の後羅馬教會の信者となれり。シ

モンも亦改宗するに至れりとぞ。

耶蘇の肩は軽くなりぬ。己が十字架を負へるシモンを一瞥して彼を祝福せられしならん。この時多くの男女は其の後に隨ひ來りしが、婦人等は耶蘇を見て、死罪の者のために悲しむを禁ずる律法をも忘れて、哭き悲しみぬ。その同情は耶蘇の心を樂しましむ。全く疲れはてたる今も尙ほ王者たる權威を失はざる耶蘇は、婦人達を顧みて曰く「エルサレムの女子よ、わがために哭く勿れ、只己れと己が子のために哭け。産ざる者、未だ孕まざるの胎、未だ哺せざる乳は福なりといはん日來らん。」

死出の行列は進みぬ。耶蘇は十字架を肩より下せしかど、尙ほ力甚だ弱く、支へられずんば歩行する能はざりしが如し。今や漸く地上に於ける最大悲劇の行はるべき場所に達す。そはエルサレムの西方にやあらん、ゴルゴダ(髑髏)といふ所にてありき。時は朝の九時なりき。(十字架は東洋に起原す。羅馬人は敵なるカトリックの十字架といふは×型にして、聖アンドリヤが斯かる型の十字架にて死せし故、聖アリミサといふは+型なりき。) 十字架はD型なり。又Cruz Decussataといふは×型にして、聖アンドリヤが斯かる型の十字架にて死せし故、聖アリミサといふは+型なりき。

猶太にては罪人を刑に處する時、その神経を鈍くするため強き酒を與ふる習慣あり。『酒醜を亡ぶる者に與へよ。その苦楚を想はざるべし』(三六三)といふ箴言より來るなるべし。今や耶蘇の手に釘を貫ぬくにあたり、没藥を和へたる酒は差出されぬ。耶蘇は渴けるものから一口之を味ひしが、その飲料の何たるかを知つて、之を拒みぬ。耶蘇は曇りなき澄明の心もて父に往かんとするなり。

耶蘇の十字架は建てられぬ。二人の盜賊左右に在り、祭司の長、學者を初め往來の者共、上を仰ぎて嘲弄を極む。兵卒等は耶蘇の衣服を分つ、一人は上衣、一人は帶、一人は履、一人は頭巾を取る。殘るは裏衣なり。こは縫目なく上より渾たく織れるものなり。傳説によれば、聖母マリアが其の愛兒のために自ら織れるものなりしといふ。そはガリラヤ邊の貧民の裏衣なりき。されど羅馬の兵卒にとりては珍妙なるものなりしならん。彼等は之を裂かずして、圖になしぬ。

耶蘇は祈つて曰く、「父よ、彼等を赦したまへ、その爲す所を知らざればなり。」こは十字架上より耶蘇の發せられたる第一聲なりき。十字架上にて救世主の殺されんとする其の下にて、衣服を分つて得々たる兵卒等の狀の如何に憐れ

なることよ、十字架上の耶蘇と十字架の下に於ける兵卒は好箇の對照なり。されど此の對照は世常にあるを如何せんや、一方に世を清めんとする憂國者あれば、他方に世を濁して耻ぢざる利己主義者あると同じ、耶蘇が斯かる者共のために祈られし聲こそ至愛至仁の發露にてありき。

耶蘇の狀は如何にも神々し、「父よ彼等を赦したまへ」と祈られし時、その面の如何に愛に溢れしことよ、左右に懸けられし盜賊は、中央に冥想せる耶蘇を見て、こは實に神の子たるべしと想ふに至りぬ。一人の盜賊は頑強なる心を有せり、即ち罵る如く耶蘇に言ひて曰く、「爾もし基督ならば己と我儕を救へ」。他の一人は柔和なる心を有せり、罵れる者を戒しめて後、耶蘇に言ひて曰く、「主よ、爾國に往かん時、我を憶ひたまへ」。耶蘇は答へぬ、「試に我なんぢに告げん、今日爾は我と偕に聖樂園にあるべし」。傳説にいふ、盜賊はチタス及びヂユマクスといひ、聖なる家族がヘロデ王より埃及に遁れし時、途にて一行に遇へり。ヂユマクスは一行を掠奪せんとせしが、チタスは之を妨ぐ。且つチタスはマリヤの腕によれる聖兒を眺め、之を抱きかゝへて、「あゝ祝福の兒よ、我を憐れ

むべき日の來らん時、われを憶えて、この日のことを忘る勿れ」といへりとぞ。

この時ヨハネは聖母マリヤ、その妹サロメ、クロバの妻マリヤ及びマグダラのマリヤを伴うて來りぬ。悲哀に堪へやらず、婦人等は十字架に身を籠りぬ。寄邊なき寡婦の母に取りては、耶蘇は此の世に於ける唯一の慰安なり。他の息女もありしかど、耶蘇の如く厚く此の母に仕へしはなし。聖母は耶蘇の足に手を觸れて泣きぬ。耶蘇は母に向つてヨハネを推奨して曰く、「婦よ、これ爾の子なり」。又ヨハネに曰く、「これ爾の母なり」。蓋しマリヤは他に息女ありし故、食に窮する如きことはなかりしなれど、耶蘇がヨハネに母を託されしは、比較的耶蘇の精神を深く解せるヨハネをして母の信仰を培はしめんとなされしならん。聖母は兒としての耶蘇を失ふ代りに、主としての耶蘇を得ざるべからず。愛情は崇拜に變じ、慈話は祈禱に進まざるべからず。ヨハネは耶蘇が最後の依頼を受けて、聖母を己が家に連れ往きぬ。

今や正午なり。耶蘇の十字架上にある既に三時間、前夜の昏なりぬ。冷氣は暴風雨の徵候と思はれしが、この時地は全く暗くなりぬ。こは熱風砂漠を吹荒む